年報
平成１６年度

Oita University of Nursing and Health Sciences

大分県立看護科学大学

年報

もくじ

地域社会への貢献を目指して …… 1
１　委員会/ワーキング・グループの活動
１－１　教授会 …… 2
１－２　運営委員会 …… 3
１－２－１　教務小委員会 …… 3
１－２－２　教育・実習小委員会 …… 3
１－２－３　学生受入小委員会 …… 6
１－２－４　学生生活支援小委員会 …… 6
１－３　自己評価委員会 …… 7
１－４　入試委員会 …… 7
１－５　図書委員会 …… 7
１－６　地域交流・公開講座委員会 …… 8
１－７　研究倫理・安全委員会 …… 8
１－８　広報委員会 …… 9
１－９　情報ネットワーク委員会 …… 9
１－10　国際交流委員会 …… 11
１－11　就職対策委員会 …… 11
１－12　その他 …… 12
１－13　研究科委員会 …… 12
１－13－１　研究科準備委員会 …… 13
１－14　看護研究交流センター …… 13
２　学内外行事の概要
２－１　学年歴 …… 15
２－２　オープンキャンパス …… 17
２－３　公開講座・公開講演会・公開講義 …… 17
２－４　第6回看護国際フォーラム …… 18
２－５　第6回大分看科大／ソウル大学研究交流会 …… 19
２－６　姉妹校学生交流 …… 20
２－７　第7回若葉祭（大学祭） …… 21
３　教育活動
３－１　平成16年度入学者選抜状況 …… 22
３－２　平成16年度3年次編入学試験状況 …… 24
３－３　平成16年度博士（前期・後期）課程入学試験状況 …… 24
３－４　教育
３－４－１　生体科学研究室 …… 26
３－４－２　生体反応学研究室 …… 28
３－４－３　健康運動学研究室 …… 31

３－４－４　人間関係学研究室 …… 33
３－４－５　環境科学研究室 …… 38
３－４－６　健康情報学研究室 …… 40
３－４－７　言語学研究室 …… 42
３－４－８　基礎看護学研究室 …… 46
３－４－９　看護アセスメント学研究室 …… 48
３－４－10　成人・老人看護学研究室 …… 50
３－４－11　小児看護学研究室 …… 52
３－４－12　母性看護・助産学研究室 …… 55
３－４－13　精神看護学研究室 …… 60
３－４－14　保健管理学研究室 …… 63
３－４－15　地域看護学研究室 …… 66
３－４－16　国際看護学研究室 …… 68
３－５　共通科目 …… 72
３－６　大学院の教育活動 …… 75
３－７　ボランティア活動 …… 80
４　学内セミナー …… 83
５　学内プロジェクト研究 …… 85
６　奨励研究 …… 86
７　インターネットジャーナル「大分看護科学研究」 …… 91
８　業績
８－１　著書 …… 92
８－２　翻訳 …… 92
８－３　研究論文 …… 92
８－４　その他の論文 …… 97
８－５　学会発表 …… 100
８－６　学術講演等 …… 110
９　地域貢献
９－１　講演 …… 111
９－２　研究指導 …… 122
９－３　学会その他の委員等 …… 123
10　助成研究 …… 129
11　海外研究派遣 …… 133
12　学外研究者の受入 …… 134
13　教職員名簿 …… 135

地域社会への貢献を目指して

行政改革に端を発した大学改革が、国立大学においては、統廃合、独立行政法人化と目まぐるしくすすめられました。公立大学に関しても、平成 16 年 6 月の「地方独立行政法人法」の制定にともない、各県で、独立行政法人化（独法化）の議論が活発に行われております。このような中、本学も平成 18 年度から独法化することが決定し、現在、その準備等に追われているところです。

行革の一環としてはじめられた大学改革ではありますが、大学がその使命を改めて自覚し、大学・教育の自主性を堅持しながら、一般社会の常識から見て妥当とされる大学運営を図ることは当然必要とされることであり、一方では、遅きに逸した感さえあります。

大学の使命の一つに、「地域社会への貢献」があり、本学も、平成 10 年の開学時に定めた、３つの目標からなる「建学の精神」の中の一つの目標としてこのことをうたっております。

地域社会への貢献は、国公私立を問わず、今や大学のキーワードの一つになっており、それぞれの大学が、産官学の連携などを通して独自性を発揮した地域社会のあり方を模索しております。

県立の看護大学である本学における地域貢献では、地域の看護職のみなさまの知的拠点として機能するように大学のリソースを最大限に活用した活動を行い、このことを通して、少子高齢化を迎えた地域のみなさまに間接的に還元されることを目指していくつもりです。もちろん、公開講座や、公開講義などにより、直接、地域のみなさまとの出会いの場を設けさせていただき、地域のみなさまの保健・医療に対するニーズを肌で感じ取る努力も怠ってはならないと考えております。

平成 16 年 4 月には、「看護研究交流センター」を設置しました。センターでは、地域の看護職のみなさまの知的好奇心を看護・看護学の発展に効果的に反映するように看護職のみなさまに対して積極的な支援をさせて頂くことにしております。

地域に開かれた大学、地域に愛される大学を目指しております本学に対して、みなさまの叱咤激励をいただきながら、大分の知的財産の一つに育て上げていきたいと意欲を燃やしております。

平成 17 年 3 月

学長　　草間　朋子

１　委員会/ワーキング・グループ活動

平成16年度　委員会構成図

１－１　教授会

構成員：全科目群の教授・助教授・講師、事務局長
事務局：総務課長、教務学生課長
　各委員会よりの分掌事項進行状況の報告、ならびに提案議題について審議を行うと共に、大学運営に関わる重要事項の意志決定を行った。

１－２　運営委員会

委　員：草間 朋子、粟屋 典子、高橋 敬、市瀬 孝道、稲垣 敦、甲斐 倫明、関根 剛/吉村 匠平、佐伯 圭一郎、G.T.Shirley、小林 三津子、藤内 美保、高野 政子、宮崎 文子、河島 美枝子、金 順子、中村 喜美子、平野 亙、桜井 礼子、三河 明史（事務局長）

事務局：小手川 元晴（総務課）、竹下 敏彦（教務学生課）

各小委員会よりの分掌事項進行状況の報告、ならびに提案議題の審議を行うと共に予算に関する審議を行った。

1－2－1　教務小委員会

委　員：佐伯 圭一郎、高橋 敬、宮崎 文子、G.T.Shirley

単位認定に関する作業、平成 17 年度時間割作成、平成 17 年度シラバス作成の作業などを中心に活動を行った。

１）助産学履修者選考ＷＧ

構成員：佐伯 圭一郎、高橋 敬、宮崎 文子、G.T.Shirley、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美

平成 17 年度の助産学実習履修者の選考作業を４月に実施した。また、次年度の選考方法を検討し、選考の準備作業を行った。

1－2－2　教育・実習小委員会

委　員：草間 朋子、市瀬 孝道、粟屋 典子、宮崎 文子、甲斐 倫明、中村 喜美子、稲垣 敦

本委員会は学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育・研究予算（学部・大学院）の策定を行っている。本年度の国家試験対策に関しては、学生の国試への取り組みを早めるために、補講を例年よりも１ヶ月早めて開始（12 月上旬）するなど、国家試験対策 WG の活動によって国試合格の為の充実を図った。

卒業研究に関しては、国試準備を早めたことから、卒業研究発表会を例年よりも２週間早めて 12 月上旬に行った。例年どおり２つのサポートグループを設置し、卒業研究論文集・卒業研究発表会要旨集の作成、卒業研究発表会のサポートと、次年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎Ｉの講義のサポート（テキスト作成も含む）等の実務を行った。看護学実習（第１段階～第５段階）に関しては、卒論発表会までに３年次生の第４段階の実習が終了するように全体の実習日程を調整し、教員や学生配置等を検討・実施した。総合実習に関しては、総合実習 WG の活動によって更なる実習の充実を図った。４年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定をはじめとした企画を行い、全９回の講義を実施し、地域住民から多数の参加もあり公開講義としても成功を収めた。４年次生を対象とした総合看護学は２年目を迎え、看護基礎教育の総まとめの教育として内容の充実を図った。本年度は大学院博士（後期）課

程の開学と修士（前期）課程開学３年目を迎え、大学院生の研究予算をはじめとして、中間発表、研究発表や論文審査に関わる作業を行った。教育・研究予算関連では昨年に引き続きプロジェクト研究費と奨励研究費を予算化し、それぞれ２件と 10 件を採択して大学の研究機関としての使命の推進を図ると共に、教員３名を短期海外派遣研究員として米国大学に派遣し、教員の研究の活性化を図った。

本年度から学部生の基礎科目の学力アップのために基礎学力向上 WG を設置し、２回の進級試験を試行した。また平成 18 年度新入生から進級試験（２年次生から３年次生への進級）が実施可能となるように進級に関する学則の改正を行った。

1）国家試験対策 WG

構成員：宮崎 文子、藤内 美保、林 猪都子、工藤 節美、吉田 成一、品川 佳満、
高波 利恵、佐藤 俊実（教務学生課）

本学は完成年次から 4 年目に当たるが、国家試験対策ＷＧが設置されて 3 年目である。そのねらいは学生の国家試験対策委員会の立ち上げの推進を図り、学生が主体的に取り組むための効率的な学習を推し進めることである。本年度は国家試験対策のための情報の周知徹底を図るために学生の国家試験対策委員とともに国家試験対策マニュアルの検討・作成を行った。具体的な活動内容は国家試験対策ガイダンスの企画・実施、模擬試験の作成・印刷・実施・結果の分析及びそれを踏まえた補講計画・実施をした。業者模試の受験については費用がかかるため学生の自主性に任せた。また受験手続の指導や国試に向けての取り組み姿勢について周知徹底を促した。反省点として、補講に関して 12 月早期から国試の取組みを開始したが、欠席者が多いことが目立った点があげられる。来年度の補講のあり方を改善点としたい。

2）総合実習 WG

構成員：関根 剛、大賀 淳子、高波 利恵、安部 恭子

総合実習ＷＧは、看護実習の最終段階にあたる総合実習を円滑に行うことを目的として設置されている。今年度の実習は平成 16 年１月に総合実習オリエンテーション、及びガイダンスを実施した。その後、平成 16 年６月 28 日から７月９日までの総合実習を実施した。

今年度は、実習終了後に担当教員および施設指導者の意見を本ＷＧでまとめる作業を追加した。その結果、いくつかの問題点や疑問点がリストアップされ、次年度の改善点を明確にする上で非常に役立った。総合実習は過去 4 年間に実習施設の追加・削除が見られるようになってきていることから、施設への実習受入の確認、新しい施設の追加など、教育・実習小委員会と共に対応する必要がある。

3）基礎学力向上ＷＧ

構成員：高橋 敬、中村 喜美子、佐伯 圭一郎、伊東 朋子、小野 美喜、藤内 美保

平成 18 年度新入生からの進級試験実施に向けて、本年度は２回の試行を行った。本試験の目的は 1～2 学年の間にどれだけ基礎学科を修得したのかをみるためのものである。現在は試行段階であるが、その結果から、今後の勉学の指針にしてもらう。ま

た勉学するに際して、何をどのように学習したら良いかのナビゲーションでもある。１回目の試験は３年次生を対象に平成 16 年 4 月に試行した。２回目の試験は科目群の講義担当者に「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」の 3 冊から 10 問を４択で作成してもらった。委員会で 120 問を選択し、２年次生を対象に平成 17 年 2 月 18 日に試行した。

4）実習関連 WG

構成員：粟屋 典子、桜井 礼子、藤内 美保、伊東 朋子、小野 美喜、
大村 由紀美、八代 利香、吉留 厚子、大賀 淳子、山下 早苗

主な活動は以下の通りである。

(1)「看護技術学習プログラム」の企画・実施・評価

これまで、研究室単位で担当していた３・４年次生に対する技術チェックプログラムを「看護教育のあり方検討会報告書」をもとにして総合的に検討し、看護系教員全員の協力を得て実施した。

① ４段階実習前・技術チェック ３年次（７月～８月実施）
② 総合看護学 ４年次（10 月～11 月実施）
③ 卒業前・技術チェック ４年次（３月実施）

(2) 実習センターの運営・管理および各実習施設の整備

本年度は、実習センター整備として、２階休憩室を学生が看護技術を演習できるよう器材の整備を行った。また、パソコンの増設と学内 LAN へのアクセスに関する検討等を行い、学生、教員ともに利用しやすいセンターの整備を行った。

(3) 実習ガイドブックの作成と事故対応マニュアルの見直し

実習ガイドブック 2004 年度版を６月に作成した。また、2005 年度版作成のための見直しを行い、平成 17 年５月には完成を目指す。

また、教員用の事故対応マニュアルの全面的な見直しを行い、想定される事故ごとに対応策をまとめた。

(4) 救命救急の講習会

AED（自動体外式除細動器）の非医療従事者の使用に伴い、教職員に対して、AED の取り扱いを含む救急救命の講習会を日本赤十字社大分支部に依頼し、実施した。また、学生には、学年毎に学内で AED の取り扱いの講義を行った。

5）専門看護師教育課程検討ＷＧ

（1）共通科目の検討ＷＧ

構成員：小西 清美、伴 信彦、大賀 淳子、工藤 節美、高野 政子

専門看護師教育課程の認定を平成 17 年 7 月に申請をする計画で、専門看護師教育課程検討ＷＧが平成 16 年 6 月 8 日に設置された。専門看護師教育課程の共通科目である看護教育論、看護管理論、看護理論、看護研究、コンサルテーション論、看護倫理、看護政策論の 7 科目について、本学の教育理念に基づき、専門看護師教育課程の審査基準に沿うように検討を行った。

（2）母性看護専攻教育課程検討ＷＧ

構成員：小西 清美、宮崎 文子、吉留 厚子、林 猪都子、大神 純子、梅野 貴恵

専門看護分野は母性看護学専門看護師の育成とし、平成 16 年 12 月から母性看護専攻教育課程の基準に沿って、教育課程を検討中である。

1－2－3　学生受入小委員会

委　員：金 順子、小林 三津子、桜井 礼子、高野 政子

事務局：竹下 敏彦（教務学生課）

本小委員会の役割は、編入学生、科目等履修生、聴講生、研究生の受け入れや大学間の単位互換に関する事柄について、その手続き、認定、条項・内規などを検討することである。

本年度は、３年次編入学生２名の既習得単位の認定および科目等履修生、聴講生、研究生、大学間の単位互換の受け入れ可能開講科目の決定や募集要項などの検討を行った。また、大分工業高等専門学校に専攻科が設置されたことに伴い、本学へ単位互換に関する協定の加盟申し込みがあり、協定書の締結について検討した。

1－2－4　学生生活支援小委員会

委　員：河島 美枝子、平野 亙、藤内 美保、関根 剛、吉村 匠平、原田 幸代（保健室）、三浦 始（教務学生課）

本小委員会では、学生が本学での生活全般を充実させることにより、効果的な教育が受けられることを目標としている。活動の項目は基本的な心身の健康管理から奨学金等による経済的支援、サークル活動・自治会活動など多岐にわたる。

本年度の活動の特徴および評価すべき内容として、以下５項目をあげる。いずれも継続的な実施による長期的な効果が期待される地味な活動である。

１．定期健診を教育の場と捉え、本年度も健康管理に関しては個別の生活指導を中心とする事後指導に力点を置いた。（将来、健康指導や健康教育を実施する立場となる看護学生には、自らの心身健康管理を自律的に行なえる能力が必要であり、教育の一環として捉えた）

２．本学の提案で、日本学生支援機構に給付開始までの「つなぎ資金」が創設されたことは、給付開始までの学生の生活不安を解消する大きな成果がある。

３．コンタクト･グループをパワーアップするいくつかの試みの効果を今後期待したい。なお、このコンタクト･グループ活動は、小規模な大学の利点を生かして教員・学生間の交流、学年を超えた学生間の交流を深めることで、教育効果を高めることを目標とした活動である。

４．本年度、新たに交通安全教育の一環としてとして、参加型実戦教育であるマナーアップ（運転技術チェック）研修を導入した試みは、学生にも好評であった。

５．本年度の学園祭をリニューアルする提案により、学生時代のよき思い出つくりの一助となることが期待される。

１－３　自己評価委員会

委　員：粟屋 典子、関根 剛、金 順子、伊東 朋子、赤司 千波、吉田 成一、
吉村 匠平、小西 清美、高橋 厚至郎（総務課）

本年度、当委員会は以下の活動を行った。

1. 平成 16 年度の年報の編集について、平成 15 年度に引き続き、記載期間をすべて４月～翌年３月までの期間に統一すること、教育活動については、系統性・順序性を見やすくするために科目群ごとに記載することを教員に周知して編集に取り組んだ。フォーマットを指定しているが、まだ修正を必要とする部分がある。今後より効率的に編集ができるようなフォーマットの工夫が必要である。
2. FD 活動に関する講演会は実施していないが、平成 15 年度に実施した講演会の評価と、教員の FD 活動への希望調査を行った。また、本学におけるこれまでの FD 活動と看護系他大学の FD 活動に関する情報を集めた。
   学内の FD 検討会を平成 17 年 2 月 16 日に開催し、本学および九州圏内の看護系大学の FD 活動の現状を報告し、授業評価について意見交換を行った。
   FD 活動の１つである学生による授業評価については、後期後半に終了する科目で試行を行うことができた。対象となった教員からの意見を得て質問項目の改善を図り、新年度には対象をさらに拡大して実施することを考えている。授業評価の集計作業と公表の方法については早急に検討する必要がある。
3. 平成 16 年度アニュアル・ミーティングを平成 17 年 3 月 2 日に開催し、奨励研究 9 題、プロジェクト研究２題の発表と意見交換が行われた。
4. 第 3 者評価については、２月の段階で大学評価・学位授与機構による認証評価を受けることが決まったことを受け、早速準備に取り掛かった。
5. セクシュアル・ハラスメント防止・対策委員会に関しては、該当する事項が生じていない。

１－４　入試委員会

構成メンバーは非公開としている。平成 16 年度に実施した入学試験に関わるすべての事項を審議した。入試実施に際しては全学教職員の役割分担への協力を得て大過なく終了できた。

１－５　図書委員会

委　員：甲斐 倫明、小林 三津子、安部 眞佐子、影山 隆之、林 猪都子、
大賀 淳子、小野 永子（図書館）

事務局：牛島 聡子（図書館）

図書館の管理運営に関する諸問題の検討、および図書・雑誌の購入に関する決定を行った。今年度の具体的な活動内容は以下の通りである。

(1) 大分県大学図書館協議会の当番館として、総会および研修会の実施を担当した。

(2) 公立大学協会図書館協議会九州地区幹事館として、拡大委員会の出席や加盟館との情報連絡・調整等を行った。
(3) 本学で購入すべき雑誌選定の基本方針を決め、学内アンケートを参考に、平成 17 年度以降の購入雑誌の見直しを行った。和雑誌が 123 タイトル、洋雑誌が 60 タイトルを選定した。
(4) 図書選定は、各教員の担当科目の視点からの個人選定と委員会選定とに分けて行った。委員会選定では、教職員から提案された図書、学生等からの要望のあった図書、業者から見計らい図書に加えて、図書委員が分野ごとに選定を行ったものを検討し決定した。岩波ジュニア新書、中公新書、ポピュラーサイエンスのシリーズを継続購入することにした。
(5) 今年度の蔵書点検は、従来のやり方を見直し合理化を検討した結果、作業に伴う閉館の期間を短くし、1 週間で行う方法をとった。
(6) 本学に所蔵する図書を教員が学生に紹介するコーナー「図書紹介」を本学 HP 上に開設し、毎月実施している。

１－６　地域交流・公開講座委員会

委　員：稲垣 敦、宮崎 文子、吉留 厚子、高野 政子、工藤 節美、小西 清美、
宮内 信治、平川 俊助（総務課）

本年度は、昨年に引き続き一般を対象とした公開講座を企画し、３回開講した。それぞれ「高齢者の家庭看護－からだの動かし方の介助実技指導－」（7 月 23 日）、「中高年の家庭看護－栄養と食事介助の実技指導－」（8 月 21 日）、「家庭における救急法－もし、脳卒中・心筋梗塞でたおれたら－」（3 月 19 日）で全て実技指導中心とし、本学の看護実習室で実施した。講座終了後に、広報、時期、内容などの評価や改善を希望する点、今後取り上げてほしいテーマなどのアンケート調査を実施した結果、３回とも受講者の満足度は高かった。本委員会では本年も WG を設置せず、委員会メンバーでポスター・チラシの作成や関係諸機関への広報、会場設営や受付等を行った。公開講座開催にあたっては教務学生課の三浦始課長ほかの協力を得た。また、本学の地域貢献を推進するため、来年度の公開講座の増加と開催方法について議論し、草案を作成した。

大分地域大学等生涯学習協議会にも参加して意見交換した。今年度は協議会主催の生涯学習プログラムを開催することが決定され、本学も協力する予定である。また、大分県教育委員会からの依頼で、総合人間学を「おおいた県民アカデミア大学」の連携講座として位置づけた。

学内施設利用申請についても随時審査を行い、総務課と連携して指導した。

来年度の大学祭を本委員会が指導することになったため、学生の指導、教職員のイベント参加の調整をした。本年度より、総務課の平川俊助主査が委員として加わった。

１－７　研究倫理・安全委員会

委　員：草間 朋子、高橋 敬、河島 美枝子、平野 亙、吉田 成一、安部 眞佐子、

顧　問：二宮 孝富（大分大学）、西 英久（大分大学）
事務局：玉田 逸子（総務課）
　本委員会は本大学の教員が行う研究に関して、倫理・安全上問題がないか審査することを目的としている。委員会は倫理・安全に関する指針と、「教員の研究に関する学内了解事項」（平成 14 年 7 月 17 日改定）に基づき毎月 1 回開催し、今年度は、教員から提出された研究計画書 118 件の審査を行った。

１－８　広報委員会

委　員：平野 亙、小林 三津子、G.T.Shirley、宮内 信治、藤内 美保、林 猪都子、
玉田 逸子（総務課）
　オープンキャンパスの企画・運営（参加者 240 名）、ミニ・オープンキャンパスの実施（２回、参加者 17 名）、大学見学訪問者への対応（９件計 159 名うち高等学校生徒６校計 89 名）、ガイドマップ「キャンパスガイド」および英語版「キャンパスガイド」の作成、マスコミ取材への対応（ＴＶ１件、新聞３件）、「2004 年度版大分県立看護科学大学Ｑ and Ａ」の作成、および看護国際フォーラム等大学行事の広報活動を行った。

１）2005　大学案内パンフレット作成ＷＧ
構成員：平野 亙、吉田 成一、定金 香里、安部 恭子、福田 広美、三浦 始（教務学生課）
　Ｂ５版 22 ページの「2005 大学案内」を作成し、10,000 部印刷した。

１－９　情報ネットワーク委員

委　員：甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、伴 信彦、桜井 礼子、高野 政子、吉田 成一、
吉村 匠平、竹下 敏彦（教務学生課）
　ネットワークの運営管理を統括する。また、新規計画の検討およびＷＧの設置などの情報ネットワークに関連する諸問題を統括する。実際の活動では、ネットワークの維持運営管理を主な任務とするため、ＷＧを中心に活動を行った。実際の委員会運営もＷＧのリーダーを含めたメンバーで行った。
　１）ネットワークシステムＷＧ
担当内容：メール、サイボウズを含めたインターネット・イントラネット管理運営
構成員：小嶋 光明、甲斐 倫明

　２）Windows ユーザーサポートＷＧ
担当内容：教職員用ＰＣ（Windows）の管理（トラブル対応、新規ソフト対応など）
構成員：中山 晃志、佐伯 圭一郎、品川 佳満、吉田 成一

　３）Mac ユーザーサポートＷＧ
担当内容：教職員用ＰＣ（Mac）の管理（トラブル対応、新規ソフト対応など）
構成員：伴　信彦、小嶋 光明

４）メディアセンターサポートＷＧ

担当内容：メディアセンター（教材作成室を含む）の管理（トラブル対応、新規ソフト対応など）

構成員：品川 佳満、伴　信彦、吉田 成一

５）Web サイトＷＧ

担当内容：本学のWeb 内外サイトの作成および管理運営

構成員：甲斐 倫明、定金 香里、Ｇ．Ｔ.Shirley、品川 佳満、高波 利恵、岡崎 寿子、吉武 康栄、小嶋 光明、佐藤 俊実（教務学生課）、竹下 敏彦（教務学生課）

６）看護メーリングリストＷＧ

担当内容：大分県看護メーリングリスト kango-ml の管理運営

構成員：高野 政子、影山 隆之、安部 恭子

７）実習センター・看護研究交流センターＷＧ

担当内容：新規計画の立案およびマシンの管理

構成員：桜井 礼子、佐伯 圭一郎

情報ネットワーク委員会が行った主な作業内容は以下の通りである。

(1) 情報処理室からのインターネット接続を、豊の国ハイパーネット回線を経由して、大分大学から SINET に接続で行う回線に切り替えた。

(2) 実習センター・看護研究交流センターと本学とのネット接続は、ダイアルアップ接続であったが、豊の国ハイパーネット回線経由で OCT のケーブルインターネットを利用した VLAN サービスで本学と学内 LAN 接続が可能になった。

(3) 情報処理室の PC 49 台を更新した。学生用ファイルサーバとして LinuxＯＳの atom を導入した。

(4) 計算サーバ satsuki に、SAS Linux 版を導入して、azalea サーバからの変更を行った。

(5) メールサーバを sendmail から qmail に変更した。それに伴い、メーリングリストは majordomo から、ezmlm に変更した。

(6) LL 教室に CALL システムとして、24 台の eMac を導入した。広島市立大学との共同研究として、CALL システムによる英語自主学習を試行した。

(7) 動画配信用のストリーミングサーバを設置し、画像配信を開始した。

(8) FileMaker で稼動している DB（就職情報、業績、科目 Keywords）サーバをストリーミングサーバと独立して運用できるようにした。

(9) 「URL 処理機能の境界エラーが引き起こす利脆弱性」に対応した修正ファイルが公開されたので、各教職員の Eudora をアップデート（Jr5-rev2）した。

(10)学生の携帯メールへの転送システムのトラブル対応を随時行った。

(11)メールアドレスの管理（追加・削除）を行った。

(12)Web の作成、更新（英文ページの作成など）を行った。

(13)携帯電話対応のWeb（休講情報など）の作成、更新を行った。

(14)教職員マシンのトラブル対応を行った。
(15)インターネット・イントラネットのトラブル対応を行った。
(16)看護メーリングリストの運営を行った。

１－10　国際交流委員会

委　員：草間 朋子、金　順子、G.T.Shirley、関根 剛、八代 利香、桜井 礼子、
吉村 匠平
事務局：平川 俊助（総務課）

本年度は、主にソウル大学と本学との学生交流の企画・運営、第６回看護国際フォーラムの企画・運営を行った。また、韓国、ウズベキスタン、カザフスタン、中国からの海外研修員を、看護研究交流センター企画委員会と協力をして受け入れを行った。

これらの企画をスムーズに運営するために SG を立ち上げ、教員の方々の協力を得た。

１－11　就職対策委員会

委　員：影山 隆之、工藤 節美、藤内 美保、宮崎 文子、吉留 厚子、
三浦 始（教務学生課）
事務局：竹下 敏彦（教務学生課）

学生の就職・進学に関する情報の収集・提供と、学生への個別支援の企画・実施を中心に活動した。主な内容は以下の通り。

1. 卒業生の就職先での状況について、卒業生や就職先の担当上司等から適時情報を収集し、また病院等からのリクルート訪問を受け、これらの情報を就職情報データベースやＥメールによって学生に提供した。
2. 改訂した就職・進学ガイドブック 2004 年版を４年次生に印刷配布した。これをさらに改訂した 2005 年版を、３月には３年次生に印刷配布した。いずれも、Web 上でも学生に提供した。
3. ７月の就職ガイダンスでは就職して２年余りを経過した１期生を数人招き、２年次生以上の学生を対象に体験談を話してもらった。
4. ３月の就職ガイダンスでは就職内定した４年次生を数人招き、２・３年次生を対象に体験談を話してもらった。
5. 面接・小論文マニュアル 2004 年版を改訂し４年次生に配布するとともに、事務局・教員の協力を得て４年次生に模擬面接を実施した。これをさらに改訂した 2005 年版を、３月には３年次生に印刷配布した。いずれも、Web 上でも学生に提供した。
6. 学生への個別支援については、卒業研究の指導教員を中心にした指導を第一に要請し、これを後方支援するために就職対策委員が研究室を分担した。その結果、国家試験直前までにすべての４年次生の進路が決定した。
7. 以上の他、産業保健師としての就職先を開拓するために県内企業を訪問して依頼と情報収集を行った。

１－12　その他

1)　衛生委員会

構成員：草間 朋子、関根 剛、田原 基之（総務課）

教職員の健康維持と増進のため、定期健康診断を中心とした健康管理に関する情報をきめ細かく提供した。さらに、屋外を含めて学内全体の環境整備と美化に努め、教職員および地域住民に快適な環境を提供した。

2) インターネットジャーナル WG

構成員：草間 朋子、甲斐 倫明、G.T.Shirley、桜井 礼子、伴 信彦、稲垣 敦、
定金 香里、高波 利恵

本年度は、執筆要項の改訂、PubMed へ掲載の準備、執筆の依頼、広報手段の検討、編集委員会開催とその準備、第５巻第２号、第６巻第１号の企画・編集・刊行に関する実務を行った。また、昨年度末に編集用パソコンを更新したことに伴い、編集環境の見直し作業を行った。これまで編集に使用していた PageMaker は最新の OS に対応していないため、InDesign を中心とした編集環境に移行することを決め、そのために必要なテンプレート類を作成した。インターネットジャーナル「大分看護科学研究」第５巻第２号を平成 16 年６月に、第６巻第１号を平成 17 年３月にそれぞれ刊行し、本学ホームページ上（http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/browse.html）で公開した。

3)　短期海外派遣研究員選考会

構成員：草間 朋子、粟屋 典子、河島 美枝子、甲斐 倫明

平成 14 年度より選考委員を除く教員全員の応募が可能となっている。
派遣期間と派遣人数それぞれ１ヶ月、３名としている。選考基準として(1) 意欲、目的、(2) 本人の将来の研究への貢献、(3) 本学における教育への貢献、(4) 準備の進捗状況、(5) 海外研修の必要性の５点を考慮して、申請者が提出した研究概要書を審議した。

平成 16 年度は吉田 成一、松尾 恭子、定金 香里の３名を選考し、教授会に推薦し決定した。次年度から本選考委員会の業務は、教育・実習小委員会の所管とすることとした。

１－13　研究科委員会

委　員：草間 朋子、各研究科教授、助教授、講師、事務局長
事務局：田原 基之（総務課）

当委員会の役割は、大学院運営に係る重要事項の意思決定を行うことである。本年度は、修士および博士課程学生の指導教官に関する事項、 修士論文審査に関する事項、入試に関する事項、ＴＡに関する事項について審議、決定を行った。

1－13－1　研究科準備委員会

委　員：草間 朋子、粟屋 典子、市瀬 孝道、甲斐 倫明、三河 明史（事務局長）
事務局：田原 基之（総務課）

平成 16 年度より、研究科委員会の下に研究科準備委員会を設置した。本委員会は、研究科委員会より委譲されている事項について審議し、その結果を研究科委員会に報告することを役割としている。本年度は、修士および博士課程学生の指導教官に関する事項、修士論文審査に関する事項、入試に関する事項、大学院研究費に関する事項、ＴＡに関する事項について審議した。

１－14　看護研究交流センター企画委員会

委　員：草間 朋子、粟屋 典子、市瀬 孝道、林 猪都子、桜井 礼子
三河 明史（事務局長）

平成 16 年４月より、看護実習センターを拠点とする「看護研究交流センター」が設立された。県内の看護職等に設立の主旨と活動内容を知らせるために、挨拶状の送付（郵送）、およびホームページの作成を行った。

主な活動は以下の通りである。

１．地域貢献

１）研究支援等

【長期】

各施設からの依頼により、１施設２名の教員（看護系、人間科学系それぞれ１名）を講師として派遣し、継続的に研究の支援を行っている。現在、以下の通り、６施設に講師 11 名を派遣している。

・大分赤十字病院：研究指導
　藤内 美保（看護アセスメント学）、伴 信彦（環境科学）
・国立病院機構大分医療センター：研究指導
　工藤 節美（地域看護学）、吉田 成一（生体反応学）
・国立病院機構西別府病院：研究指導
　関根 剛（人間関係学）、桜井 礼子（保健管理学）
・国立病院機構別府医療センター
　梅野 貴恵（母性・助産学）
・臼杵市医師会コスモス病院：研究指導
　赤司 千波（成人・老人看護学）、品川 佳満（看護護情報科学）
・天心堂へつぎ病院
　林 猪都子（母性・助産学）、石塚 香子（生体科学）
・大分県福祉健康課：大分県中小規模病院新人ナース研修体制づくり支援
　林 猪都子（母性・助産学）、大賀 淳子（精神看護学）、
　小野 美喜（成人・老人看護学）

【短期】

・大分県立病院　研究発表会

林 猪都子（母性・助産学)、伴 信彦（環境科学）

２）研修会への講師派遣

看護専門職を対象とした看護協会や施設からの研修会への依頼を受け、講師派遣を行っている。

２．国際協力・交流活動

JICA プロジェクトへの参加

①カザフスタン「セミパラチンスク地域医療改善プロジェクト」

プロジェクト期間：2000 年 7 月～2005 年 6 月

②ウズベキスタン「看護教育改善プロジェクト」

プロジェクト期間：2004 年 7 月～2009 年 6 月

③ラオス看護教育

海外からの研修員の受け入れ

①Korea National Open University　看護教員１名

受け入れ期間：2004 年 6 月

②JICA 技術研修「ウズベキスタン看護教育改善」研修員５名

受け入れ期間：2004 年 9 月 13 日～12 月 15 日

③韓国　助産師　５名

受け入れ期間：9 月 21 日～22 日

④JICA 技術研修「カザフスタン　保健行政」研修員５名

受け入れ期間：2004 年 10 月 10 日～10 月 14 日

⑤JICA 技術研修「ウズベキスタン 看護管理」研修員５名

受け入れ期間：2004 年 11 月 9 日～11 月 11 日

⑥中国　中国協和医科大学看護学部　看護教員　２名

受け入れ期間：2004 年 10 月 23 日～10 月 31 日

海外からの来訪者

①韓国 草堂大学ソウルキャンパス看護学部　教員１名、学生 12 名

来訪日：2004 年 10 月 15 日

②ラオス　看護学校建築調査団　関係者３名

来訪日：2004 年 11 月

平成１６年度　ＣＡＬＥＮＤＡＲ

April

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

４月

8　入学式
9.12　オリエンテーション
12　前期授業開始
12 ～ 23　前期履修登録
14.21　健康診断

May

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

５月

17 ～　地域看護学実習、老人看護学実習Ⅱ（４年次生）

June

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

６月

～ 18　地域看護学実習、老人看護学実習Ⅱ（４年次生）
14　前期後半授業開始
21 ～　助産学実習（４年次生選択）
19　開学記念日
28 ～　総合実習（４年次生）

July

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

７月

～ 9　総合実習（４年次生）
12 ～ 20　初期体験実習（１年次生）
21　夏期休業開始

August

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

８月

2　オープンキャンパス

September

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

９月

4　大学院（修士）入学試験
5　編入学、大学院（博士）入学試験
6　講義開始
6 ～　成人・老人Ⅰ、小児、母性、精神看護学実習（３年次生）
～ 17　助産学実習（４年次生選択）
30　前期授業修了

（学 年 暦）

October

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

１０月

1	後期授業開始
1 ～ 14	後期履修登録

November

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

１１月

6,7	若葉祭（大学祭）
14	特別選抜試験（推薦・社会人）
～ 26	成人・老人Ｉ、小児、母性、精神看護学実習（３年次生）

December

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

１２月

1	後期後半授業開始
7,9	卒業研究発表会
24	冬季休業開始

January

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

１月

11	授業開始
13 ～	基礎看護学実習、看護アセスメント学実習（２年次生）
14	センター試験準備（1, 3, 4年次生休講）
15,16	センター試験

February

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

２月

～ 10	基礎看護学実習、看護アセスメント学実習（２年次生）
25	一般選抜試験（前期）及び特別選抜試験（私費外国人留学生）（休講）
24 ～ 27	看護師・保健師・助産師国家試験
28	後期授業終了

March

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

３月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験（後期）
18	卒業式

２－２　オープンキャンパス

大学進学希望者やその家族および進路指導者の教員等を対象に、本学の特徴と施設等を紹介する「オープンキャンパス」を開催した。

日　時：平成 16 年８月２日（月）
　　午前の部　９：30～12:30
　　午前の部　13：30～16:30
内　容：説明会（約１時間）
　　本学の概要　　草間 朋子
　　教員から一言　甲斐 倫明、福田 広美
　　学生から一言　立川 茂樹（４年）、木山 由夏（３年）
　　入試について　三浦 始（教務学生課）
　　学内見学（約１時間）　各部所に担当教員配置　27 名
　　学生ボランティア　　８名
　　模擬授業（50 分間）　基礎看護学研究室・看護アセスメント学研究室
　　希望者への個別相談（随時）
　　学生生活全般(進路指導含)　粟屋 典子、宮崎 文子、市瀬 孝道
　　学生生活(学生)　桑野 紀子、中島 世理、工藤 麻梨奈、増野 陽子
　　奨学金関連　教務学生課
参加者　午前の部　149 名
　　午後の部　91 名

２－３　公開講座、公開講演会、公開講義

1）公開講座

本年度は、昨年に引き続き一般を対象とした公開講座を３回開講した。全て実技指導中心とし、本学実習室で行なった。直後のアンケート調査の結果、いずれも極めて好評であった。

【第１回】
テーマ：高齢者の家庭看護－からだの動かし方の介助実技指導－
日　時：平成 16 年７月 23 日（金）10～12 時
会　場：看護実習室（基礎・成人）
講　師：伊東 朋子（基礎看護学）、藤内 美保（看護アセスメント学）、
　　小西 清美（母性看護・助産学）、高野 政子、山下 早苗（小児看護学）
受講者数：41 名

【第２回】
テーマ：中高年の家庭看護－栄養と食事介助の実技指導－

日　時：平成 16 年８月 21 日（土）14～16 時
会　場：看護実習室（基礎・成人）
講　師：小林 三津子（基礎看護学）、赤司 千波（成人・老人看護学）、
　　安部 恭子（看護アセスメント学）、秦 桂子（地域看護学）、
　　高波 利恵（保健管理学）
受講者数：21 名

【第３回】
テーマ：家庭における救急法－もし、脳卒中・心筋梗塞でたおれたら－
日　時：平成 17 年３月 19 日（土）14～16 時
会　場：看護実習室（基礎・成人）
講　師：小野 美喜、福田 広美（成人・老人看護学）、玉井 保子（基礎看護学）、
　　大村 由紀美（地域看護学）
受講者数：30 名

2）公開講義

「総合人間学」について、学生と一般市民を対象として公開講義を９回実施した。
（本年度年報 74 頁参照）

２－４　第６回看護国際フォーラム

今年度のテーマは、「看護教育を考える－基礎教育と継続教育－」*Nursing Education: Basic and Continuing Education of Nursing*　をテーマとし、看護の基礎教育から継続教育までを幅広く考える場とした。今年度も大分県看護協会との共催で実施した。

海外からの講師は、タイ、中国から招聘をした。タイは、看護教育が全て大学教育で行われており看護教育が進んだ国であり、また、中国は看護教育の改革が行われている途上にある国であり、それぞれの看護教育の実状について講演をお願いした。国内は、新人教育を始めとする継続教育を中心として講演をしていただいた。

フォーラム参加人員は 322 名（県内：153 名、県外：40 名、海外５名、学内：学生 87 名、教員 27 名）であり、今回から海外への広報活動も行い、韓国、中国から参加者があった。フォーラム後のアンケート（142 名、回収率 44%）では、タイ、中国の看護教育の歴史、現状について理解することができ興味深い内容であったとの意見が多かった。また、日本の認定看護師制度が理解できよかった、新人看護師の教育を考える上で参考になったという意見が多くよせられた。

フォーラムの概要
　日時：平成 16 年 10 月 30 日（土）13 時～17 時
　場所：別府ビーコンプラザ　国際会議場
　演題および演者
　「タイにおける看護教育；大学教育への移行」

Tassana Boontong, RN. Ph.D.（タイ国看護評議会　会長）
「中国における看護教育；現状と将来」
Huaping Liu, RN. Ph.D.（中華護理学会　副理事長、
中国協和医科大学護理学院　副学院長）
「日本における看護教育；継続教育について」
井部 俊子（聖路加看護大学　学長）
「認定看護師制度について」
岡谷 恵子（日本看護協会　専務理事）

２－５　第６回　大分看科大／ソウル大学研究交流会

ソウル大学との教員の学術交流の一つとして、「大分看科大/ソウル大学研究交流会」を平成 12 年度より毎年一回開催している。今年度は、ソウル大学看護大学と高麗大学看護大学から 1 名ずつの講師を招き、“Autonomy of Nursing Profession in Health Development”をテーマに研究交流会を開催した。なお、本学からも 1 名の演者が発表を行い、3 名がパネルディスカッションでのパネリストを務めた。

日時：平成 17 年 3 月 17 日（木）
演題および演者
1. “Towards Autonomy of Nursing Profession in Health Development – Issues and Challenges – Japan”
Reiko Sakurai, Associate Professor

2. “Role of Nursing Profession in Health Development – Korea”
Sung Ok Chang, Associate Professor, College of Nursing, Korea University

3. “Role of Community Health Practitioner in Health Development – Issues and Challenges – Korea”
In Sook Lee, Associate Professor, College of Nursing, Seoul National University

Panel Discussion
Advanced Nursing Education – Japan
Junko Oga, Assistant Professor

Role of Visiting Nurses' Station
Chinami Akasi, Associate Professor

Role of Public Health Nurses in Public Health Centers and Industries
Rie Takanami, Research Associate

２－６　姉妹校学生交流

【第５回　ソウル大学との学生交流】

ソウル大学からの学生受け入れ

受け入れ期間　平成 16 年６月 20 日（日）～６月 27 日（日）

受け入れ学生６名、大学院生１名、教授１名

Professor	Dr. Hah, Yang Sook (Department of Psychiatric Nursing)
Master's Student(TA)	Park, Shin Hye (Department of Nursing management)
Senior	Nam, Bo Ra
Senior	Byun, Ji Eun
Senior	Yun, Sue Kyong
Senior	Im, Hyo Min
Junior	Park, Ji Sun
Junior	Jung, Ah Rang

本学の実習センターに宿泊し、日本での看護実践の現場を見学した。主な訪問施設は、大分県立病院、湯布院厚生年金病院、佐伯市保健所、佐伯市保健センター、生野助産院、百華苑（老健施設）である。

また、教員によるウェルカムパーティ、学生による風の広場でのバーベキューパーティや、阿蘇・久住、別府の観光などを通して、ソウル大学の教員と本学の教員、学生同士の交流が図られた。

本学よりソウル大学への学生派遣

平成 16 年度のソウル大学派遣メンバーは、17 名の応募があり、４学年全てから応募があったことから異学年での編成をしたいと考え、選考の結果、派遣学生を５名とし、5 月 19 日の教授会で承認された。

派遣期間：平成 16 年 8 月 22 日（日）～29 日（日）

学生氏名：　４年次　後藤 有希、３年次　中島 世理

２年次　門田 美穂、２年次　水町 直美

１年次　坪井 香菜

教員は、生体反応学教授　市瀬 孝道、看護アセスメント学講師　藤内 美保の２名が大分から同行した。

韓国での主な訪問先は、ソウル大学病院、ソウル市保健所、地域保健所、保健診療院（訪問看護に同行）、三星病院医療センター、およびソウル大学本部国際交流センター、ソウル大学付属博物館・図書館である。また、学生は、景福宮（王宮）、韓国文化財保存訓練センター見学・民族芸能体験などを通して、韓国の文化にふれるとともに、ソウル大学生との交流を深めた。

２－７　第６回若葉祭（大学祭）

２年次生を中心に１年次生を加えた学園祭実行委員会（中村光良実行委員長）の主催により、２日間にわたり開催された。

大学祭存続の危機を乗り越え、実行委員を中心に今までの経験と反省を踏まえて準備し、関係者の暖かいご支援・ご協力により、成功裡に終了した。

日　　時　　平成 16 年 11 月６日（土）～７日（日）
参　加　者　　延べ約 1,000 名
イベント等

- 実行委員プレゼンツ
- 抽選会
- アンサンブルレインボー　～西の州会～
- カラオケ
- 健康問題○×クイズ
- ビンゴ大会
- ライブ（大分大学医学部）～Shake love it ～
  ～大分事変～
- 骨のダンス
- Micky
- ライブ　　～TERMINAL～
- The ★ Man　～男の闘い～
- Miss Nurse Contest

３　教育活動

３－１　平成 16 年度入学者選抜状況

1）概　要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学　部	学　科	入学定員	募　集　人　員			
			一　般　選　抜		特　別　選　抜	
			前期日程	後期日程	推　薦	社 会 人
看護学部	看護学科	８０人	４０人	１０人	３０人	注）若干名

注）社会人の募集人員「若干名」は推薦の３０人に含めます。

入学者選抜試験の概略　（単位：人、倍、%）

区　分		志願者	受験者	合格者	競争率	入　学　者		
						計	県　内（率）	男（率）
特　別	推　薦	７９	７９	２９	2.7	２９	２９(100.0)	2（ 6.9)
	社会人	１２	１２	2	6.0	2	2(100.0)	0（ 0.0)
	計	９１	９１	３１	2.9	３１	３１(100.0)	2（ 6.5)
一　般	前　期	２６６	２３０	４７	4.9	４５	１０（ 22.2)	2（ 4.4)
	後　期	３０１	１３０	１０	１３.0	8	1（ 12.5)	1(12.5)
	計	５６７	３６０	５７	6.3	５３	１１（ 20.8)	3（ 5.7)
合　計		６５８	４５１	８８	5.1	８４	４２（ 50.0)	5（ 6.0)

試験教科等

区　分		教　科	試　験　期　日	出　願　期　間
特　別	推　薦	総合問題、面接	平成 15 年 11 月 16 日（日）	平成 15 年 11 月 4 日（火）～11 月 7 日（金）
	社会人			
一　般	前　期	総合問題	平成 16 年 ２月 25 日（水）	平成 16 年 １月 26 日（月）～２月４日（水）
	後　期	総合問題、面接	平成 16 年 ３月 12 日（金）	

2）特別選抜試験

①　推薦選抜

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、調査書の全体の評定平均値が４.０

以上で、各高等学校長から推薦された生徒を対象に、総合問題と面接により実施した。

② 社会人選抜

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を３年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、総合問題と面接により実施した。

3）一般選抜試験

平成 16 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程では総合問題、後期日程では総合問題と面接により実施した。

<table>
<tr><th>日　程</th><th>教科名</th><th colspan="2">科　　目　　名</th><th>教科・科目数</th></tr>
<tr><td rowspan="4">前期日程</td><td>国　語</td><td colspan="2">『国語Ⅰ・国語Ⅱ』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">４教科４科目</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td colspan="2">『数学Ⅰ・数学Ａ』、「数学Ⅱ」、『数学Ⅱ・数学Ｂ』
から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td colspan="2">「物理ＩＢ」、「化学ＩＢ」、「生物ＩＢ」
から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』</td></tr>
<tr><td rowspan="5">後期日程</td><td>国　語</td><td>『国語Ⅰ・国語Ⅱ』（近代以降の文章）</td><td rowspan="4">３教科
３科目
を選択</td><td rowspan="5">４教科４科目</td></tr>
<tr><td>数　学</td><td>『数学Ⅰ・数学Ａ』、「数学Ⅱ」、
『数学Ⅱ・数学Ｂ』から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>理　科</td><td>「物理ＩＢ」、「化学ＩＢ」、「生物ＩＢ」
から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>地理歴史
公　　民</td><td>「世界史Ａ」、「世界史Ｂ」、「日本史Ａ」、
「日本史Ｂ」、「地理Ａ」、「地理Ｂ」、
「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」
から１科目を選択</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』</td></tr>
</table>

注１）「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注２）「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位３教科を合否判定に用います。

注３）「地理歴史」と「公民」の両方を選択することはできません。

注４）前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

３－２　平成 16 年度 3 年次編入学試験状況

概　要

就業看護職員等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、３年次編入学試験を、看護系短期大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、英語、総合問題及び面接により実施した。

募集人員

学　　部	学　　科	募 集 人 員
看 護 学 部	看 護 学 科	１０人

試験の概略　　（単位：人、倍、%）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
短 期 大 学	4	2	1	－	1	0（　0.0）	0（0.0）
専 修 学 校	１６	１３	2	－	1	1（50.0）	0（0.0）
合　　計	２０	１５	3	5.0	2	1（50.0）	0（0.0）

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
英　　語 総 合 問 題 面　　接	平成 15 年 9 月 28 日（日）	平成 15 年 9 月 1 日（月）～9 月 8 日（月）

３－３　平成１６年度博士（前期・後期）課程入学試験状況

1）博士（前期）課程（修士課程）

概　要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し３年以上の実務経験がある者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	修士課程	看護学専攻	６名

試験の概略　（単位：人、倍、％）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	１８	１６	８	２.０	７	５(71.4)	２(28.6)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
英　　語 総合問題	平成 15 年 ８月 31 日（日）	平成 15 年 ８月１日（金）～８月８日（金）

2）博士（後期）課程（博士課程）

概　要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「英語・総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士後期課程	看護学専攻	２名

試験の概略　（単位：人、倍、％）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
					計	県　内（率）	男（率）
修士課程	５	５	３	１.７	３	３(100.0)	０(0.0)

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
英　　語 総合問題	平成 16 年 ３月５日（日）	平成 16 年 ２月２日（月）～２月 13 日（金）

３－４　教育

1－4－1　生体科学研究室

生体科学研究室では身体の構造と、それに課せられた機能をシステム的に理解するために、骨格系からスタートし、筋肉、循環、神経系、消化・吸収などを重点的に講義した。今年度からは、「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を副読本として使用した。復習するのに効果があり、また進級試験の基盤になるという認識が得られるように指導した。

骨格や筋系のプラスチックモデルを繰りかえし活用すること、解剖実習見学（大分大学医学部）に参加すること、あるいはプレゼンテーションソフトによるビジュアルな講義を通して、できるだけ具体的な知識を会得してもらうことを目指した。

頭蓋骨に関してはヒト、チンパンジー、オランウータン、ゴリラの違いを立体折り紙で作成してもらい、レポート材料の一つとした。かなり興味をもってくれたようで、モデルの写真を撮り、レポートした学生も散見された。

講義に実験を導入することは時間的にむずかしいが、本年度は１）赤血球細胞を低張液に暴露し、溶血現象を目で観察してもらった。２）フィブリノーゲン溶液にトロンビンを加え、凝固するまでの時間を腕時計で測らせた。観察の違いによるバラツキがあることを強調した。3）細い紙で作ったリングの一部を切り、裏表を反対にしてつないだリング（メビウス環）を用いて、裏と面の不思議を体験させ、身体の構造の整合性を理解してもらった。４）ビデオ材料（1 分以内）をパワーポイントに挿入し、生命現象の実態を目と英語で知ってもらった（例：巨核球からの血小板の生成）。英語のナレーションの理解には難しさがあった。実際実験を行うことにより、自然科学に対する興味や疑問がし易くなり、理解が深まる。これらについてはレポートの材料にさせ、自主的な勉学を心掛けた。

今年度は「シャトルカード」方式を導入し、講義の度ごとに情報交換した。講義の指針や、効果の程度、興味の方向性を把握するには十分に役立った。この方式は、学生にとって勉学の励みになったと思う。シャトルカード方式は次年度も続ける価値があると考えられた。来年度は「地図帳」シリーズに加え、「レポートの書き方」を購入させ、レポートの書き方の指導をする予定である。

1. 教育活動の現状と課題

前年度に比べ、おしなべて良く勉強する態度がみられた。「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を使用したこと、また少ない回数の実験、パワーポイントに挿入したビデオによるビジュアルな教育が少しは役立ったと思う。

大きな問題は何と言っても構造機能論（解剖生理学）を前期だけで理解させるには、時間的制約が厳しいと思う。できるだけ高効率、集中型が望まれるが、一方、時間的ゆとりも大事な勉学の要素であると思う。

構造機能論の基盤は骨格系である。骨格系の理解が他の構造と機能の理解の引き金になるため、本年度も骨格系を覚えさせるための努力をおこなった。骨の名称をアニメーショ

ンと変え歌により披露した結果、興味を引き出す効果があった。
一般に、科学の理解には必要最小限度の基礎知識を必要とする。次年度は、骨格系や筋肉系を中心とした構造機能の暗記のための（国家試験準備中の学生にも役立つ）ポケット型の小冊子を作成する。リテラシーとしての構造機能を把握してもらうため、来年度の１・２年次生を中心に配布する準備を始めた。
生体科学研究室の全講義内容をキーワード表として完成した。これをプリントし、配付した。この表は関連看護系の講義のキーワードと比較検討するために、自らが学習しながら記入できるように配慮した。
次年度は今年度の成果を踏まえ、引き続きいろいろな試みを続行し、学習の効果を期待したい。次の学年に繋がるような指導をすることが最も重要であり、それには他科目群の協力の必要性を感じた。総じて興味や好奇心をいかに引き出すかが、自律的に学習するためには特に大切であると感じている。

2. 科目の教育活動

1）生体構造機能論　　１年次前期前半～前期後半（04/16～09/24）　２単位
担当：高橋 敬、安部 眞佐子、石塚 香子
生体構造機能論では解剖生理学を基盤として身体の機能がいかに構造に依存して成り立っているのかを中心に講義した。内容の重要さは国家試験にでるものだけではなく、生命維持のためにどれだけの分子や細胞が連係しているのかを理解してもらう努力をした。時間数が足りないのが大きな障害ではあるが、できるだけコンパクトにして、いかに教育効果をあげるかが今後の課題である。そのためにはある程度の自律した学習ができるように指導することや、好奇心や興味を引き出すことが大切である。

2）健康科学実験　　２年次後期後半（10/01～12/22）　１単位
担当：高橋 敬、安部 眞佐子、石塚 香子
生体科学では血液生化学と組織学を実習した。前者は血清中の酵素活性、タンパク質の測定や分析と血糖値を測定させ、試験管内での出来事を体験させた。後者はヒトやラットの組織切片を光学顕微鏡で観察させスケッチさせた。目で見て手で触れることはもっとも基本的なものなので、光学画像のもつ意味にいても解説した。実験を通して、小さな構造の大きな機能的な役割に感嘆し、少しでも理解できるように留意した。時間的制約から１人３つのプレパラートを観察してもらったが、内容を組織化、系統化してチャレンジしてもらうのが良い方法なので今後の課題とした。顕微鏡を用いた観察の重要さと、それによるアナログ画像、デジタル画像との区別を解説した。

3）生体構造機能特論　　２年次前期前半（04/12～06/11）　１単位
担当：高橋 敬、石塚 香子
生体の構造機能論の中でもっとも基本でアップツーデイトなものをピックアップし、詳細に解説した。クローンと老化生物学、および再生医学については力点をおいた。クローンを学ぶことは、生物の多様性を理解する上にもっとも基本的である。そのために、エク

セルを用いてシミュレーションできることを体験させた。出席とレポートで評価したが、とくにクローン人間や臓器移植には興味をもったようである。またこの講義はただ理解するだけでなく、医療現場的なことがらには具体的（人工受精、クローン人間、老化問題）に触れ、自らが考えるというように努力した。今後はさらに体験させる意味でも、エクセルで簡単な数値計算を行い理解を深める努力をしたい。

4）生体科学演習　　１年次後期後半（12/01～02/28）　　１単位
担当：高橋 敬、安部 眞佐子、石塚 香子

栄養生化学的な講義の捕足とカラーリングブックを利用した構造機能の学習である。ほぼ昨年度と同じであるが、問題集やキーワード表を配付し、理解を深める努力をした。学生が真剣に取り組めば良い復習になる。出席とレポートと試験で評価した。基礎学力向上に向けて配付した問題を解答させた。また顕微鏡を講義室に持ち込んで、関連する組織を実際目で観てもらった。

5）生体代謝論　　１年次後期前半（06/16～09/30）　　１単位
担当：安部 眞佐子

タンパク質、酵素、核酸などを中心に細胞や生体の構成成分と分子機能について生化学的な解説を行った。

6）生体科学特論　　４年次前期後半（07/07～09/30）　　１単位
担当：安部 眞佐子、石塚 香子

遺伝子やゲノムの基礎と遺伝子多型現象を栄養状態と結び付けて講義した。その他栄養状態の把握と栄養補給法について解説した。

3. 卒業研究

・女子大生の食生活と血清コレステロール値との関係
・フィブリン重合の動態とそのネットワーク形成の幾何学的解析
・血液凝固線溶因子に見い出されるクリングル・ドメインの構造と機能
　－プロテイン・データバンク(PDB)を用いた生物情報学的解析－
・脂肪細胞分化過程におけるマトリックスメタロプロテアーゼの関与
・マウス rab14 の絶食による発現量の変動とタグ融合タンパク質の作製

3－4－2　生体反応学研究室

本大学の教育目標である「総合的な判断力を持つ自律した看護職の育成」のための教育の一環として、生体反応学研究室では身体の基本的なメカニズム、体の変調、病態、生体内に侵入する微生物、薬物の作用等を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。科学的に生体のメカニズムや外的・内的要因に対する生体反応を理解することによって体の変調・回復過程を科学的に捉え、これらが２年次～４年次の看護実習や将

来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。

1. 教育活動の現状と課題

本研究室では生体反応論、生体反応学演習、病態特論、生体微生物反応論、感染免疫学、生体薬物反応論の講義を担当している。国家試験の出題範囲としては「疾病の成り立ちと回復の促進」の部分である。本年度も４年次生の模試等によるこの科目範囲の点数は非常に低く、理解度が大変に悪い結果となっている。この問題は本大学だけではなく全国レベルも大変に低いことから、全国的に将来看護師になる学生の病気を学ぶことに対する重要性の意識が低いものと考えられる。本大学の看護実習等でも疾病についての理解度が低いため看護実践に結びつけられていないのが現状である。また、４年次で開講している「病態特論」では益々受講者数が減少している。看護実践を行ううえで疾病・病態を十分に理解しておくことの重要性を認識できるように、より看護の視点から本研究室が担当する講義を進めて行く必要がある。また、現在試行中の基礎学力進級試験によって２年次までの講義の範囲が学生自身で整理・理解される事を期待する。

2. 科目の教育活動

1）生体反応論　　１年次後期（10/07～02/17）　　１単位
担当：市瀬 孝道

病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。前年度に学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易いように教科書を変更（病態をカラーで図示説明されたもの）したが、足りない部分をプリントとして補い講義を進めた。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

2）生体反応学演習　　１年次後期（10/07～02/24）　　１単位
担当：市瀬 孝道、吉田 成一

(1)感染看護演習

感染看護演習として現在重要な感染症についてグループごとに１例ずつテーマを与え、その感染症の基本的な部分からそれに関わる治療法、看護援助法、予防法等の応用領域までまとめさせ、発表会を行った。更に個々の学生には全テーマについてまとめさせレポートを提出させた。演習テーマは以下に示す。結核、ウィルス性肝炎、クロイツフェルトヤコブ病、病原大腸菌感染症、エイズ、SARS、MRSA、インフルエンザ。

(2)臨床検査演習

本演習では現在行われているそれぞれの臨床検査の意義を説明し、また、その異常検査値から病態把握が（病態像がイメージ）できるようにすることを到達目標として講義を進めた。また、15 コマ目では臨床検査に関する演習問題を解答させた。講義内容は以下に示す。検体検査、各臓器の機能検査、生理・病理検査、画像診断、感染症の検査。

3）病態特論　　４年次前期（09/07，09/14，09/21）　１単位
担当：市瀬 孝道

本年度は膵臓癌、肺癌、成人Ｔ細胞性白血病と肝細胞癌の症例を取り上げて、病気経過中の臨床データや病理解剖所見を照らし合わせながらホルマリン固定された疾病臓器と他の全ての臓器の肉眼観察を行った。更に、これらの病理組織標本の観察も行った。臨床データや全ての臓器の肉眼、病理組織標本観察によって病気臓器のみでなく病態の全体像を把握させた。本講義は今迄の教科書中心で病態を理解してきたものを、実際に病気臓器に触れて、病気を肉眼、顕微鏡することによって病気をより深く理解させることを目的に行っている。４年次生の選択科目であるため年々受講生が減少して来ている。履修登録数は多いものの本年度は前年度に比べ更に受講生数が減少した。今後、開講学年時期、病気に興味を持たせる為の工夫が必要と考えられる。

4）生体微生物反応論　　１年次後期（10/04～02/21）　　１単位
担当：吉田 成一、西園 晃、三舟 求眞人

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、抗生物質。総論分野では単元毎に小テストを行い、学生の習熟度をチェックしながら講義を行った。小テストを行うことで学生が学んだ知識を直ちに整理し、理解度も上がったと思われた。

5）感染免疫論　　２年次前期前半（04/15～06/03）　１単位
担当：吉田 成一

１年次後期に行われた生体微生物反応論をもとに、病原微生物に対する生体の防御反応について理解させることを目標に講義を行った。また、免疫学の最新の知見も併せて講義した。学生にとり難易度の高い内容に関しては、異なる角度から講義することにより、理解度が上がるよう努めた。

6）生体薬物反応論　　２年次前期（04/16～09/24）　　１単位
担当：吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。また、重要項目は小テストにより再認識し、基礎知識の習熟を目指した。内容が多岐に渡るため、補講を行うことで対応した。また、他の科目で重複する内容を削除することで効率よい講義になるよう努めた。

7）健康科学実験　　２年次後期前半　（10/06～11/24）
・血液検査　　担当：定金 香里、市瀬 孝道
・ラットの解剖　　担当：市瀬 孝道、定金 香里、吉田 成一
・基礎微生物学実験　　担当：吉田 成一

3. 卒業研究

・ディーゼル排気微粒子中のエストロゲンリセプター発現低下に関する物質の探索
・卵白アルブミン(OVA)を用いたモルモットアレルギー性鼻炎モデルに対する
　黄砂の影響
・ダニ抗原を用いたアトピー性皮膚炎モデルマウスの作成に関する研究
・大気に存在する各種微小粒子のマウス生殖器への影響と内分泌撹乱作用
・黄砂と各種微小粒子の喘息病態増悪作用の影響比較

3－4－3　健康運動学研究室

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体験して感じ、また、ヒト・人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、近年では、臨地において運動処方や運動療法、運動指導が盛んになり、看護職にも運動の理解と指導能力が要求される機会が増えて来たため、それに応えられる基礎知識および実践能力を高めることを目指している。一方、一個人として自分の健康を維持・増進するため、運動習慣を身につけさせることも目指している。学生時代から健康と運動の関係を自分の問題として捉えることは将来の自分の健康管理に役立つだけではなく、これによってはじめて他者（たとえば、患者、地域住民）に対して実感を伴った健康教育や指導、助言ができるようになると考えている。

一方、高校までは科学的知見を覚えるという学習をしてきているが、科学自体については教育されていない。大学では科学教育が重要であるため、学部および大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものの見方などを学ぶ機会を入れている。

1. 教育活動の現状と課題

女性の場合、大学時代は既に体力が低下する時期であり、また、大学に入ると体育の時間も減り、一人暮らしで生活習慣も変わる学生が多い。さらに、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加が著しい。そこで、１年次の体育Ｉ・II では年度始めと終わりに体力測定を実施し、１年間の自分の体力や身体組成の変化を自分で調べた。また、体育 II では、種々のニュースポーツを体験させ、体を動かす楽しさを体験させるよう努めており、アンケートの結果から学生にも好評であった。２年次の健康運動学演習でも、日常生活を記録したり（生活記録法)、パスダイアグラムを用いて日常生活の問題点を洗い出し、改善策を立てさせた。４年次の運動指導特論では、種々の人々を対象とした運動や福祉レクリエーションを体験させ、指導のポイントを教授した。大学院修士課程の健康増進科学特論でも、加速度計により数日間の活動量を記録など、種々の ME 機器を用いた健康測定や評価を体験し、レポートにまとめさせた。今後も上述の目標を達成するため、体験を伴った授業、また、科学的知見に基づいた授業をしていきたい。

2. 科目の教育活動

1）体育Ⅰ　　１年次前期・後期（04/16～02/23）　１単位
担当：吉武 康栄、稲垣 敦

まずは受講者に対し、自らが習慣的な運動を行う動機付けになるよう、生体の運動に対する可逆性について生理学的に講義を行った。また、将来、看護職に就くことを念頭に置き、様々な生理学的条件（トレーニング、ダイエット、老化、喫煙など）と生体諸機能変化について理解させることに努めた。実技では、効果的なストレッチや簡易トレーニング法を実践させながら、その手法を習得させることに努めた。

2）体育Ⅱ　　１年次前期・後期（04/16～02/23）　１単位
担当：稲垣 敦、吉武 康栄

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため､多くのレクリエーションを体験した。福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、看護や介護におけるレクリエーションの必要性や可能性を考えた。来年度は、２年次以降も運動をするように動機づけたいと考えている。

3)健康運動論　　２年次前期（04/14～09/27）　１単位
担当：稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や運動機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する知見をもとに、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。来年度は、行動変容理論に基づいた運動に関する健康教育も導入したいと考えている。

4）健康運動学演習　　２年次後期前半（10/04～11/29）　１単位
担当：稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や運動機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護にかかわる動作を力学的に解説するとともに、筋力・パワー、平衡性、エネルギー消費量、体温の測定実習も行った。選択科目であるが受講者が多いため、実習の効率を高める努力をしてきたが、解説の時間を増やし理解を促す必要がある。

5）運動処方特論　　３年次後期前半（01/17～02/14）　１単位
担当：稲垣 敦

今年は運動処方にとどめず､広く運動療法として講義し､マスター試験の実習を行った。選択科目であるが受講者が多いため時間のかかる実習は難しいが、来年度は運動負荷試験の実習で、トレッドミルを用いて心電図計測を入れる予定である。

6）運動指導特論　　４年次前期前半（04/14～05/14）　１単位
担当：稲垣 敦、大賀 淳子、後藤 由美

精神障害者の運動表現療法、妊婦体操、子供のレクリエーション、高齢者のレクリエー

ション、ヨーガ、肩こり・腰痛体操、ネイチャーゲームなどの指導法について講義し、実習した。今後も看護職に役に立つ内容を吟味して構成してゆく予定である。

3. 卒業研究
・ 有酸素運動後における脳波（α波）および心電図 R-R 間隔の変化
・ 運動後の回復に及ぼすヒーリングミュージックの影響
・ 登山の心理的効果
・ 登山による下肢の筋損傷

3－4－4　人間関係学研究室

看護学（及び看護実践）に必要な人間関係に関わる基本的な知識や人間関係スキル、精神看護学の基礎となる知識、人間についての理解・洞察を深めるために必要な知識を身につけることを目的としたカリキュラムを実施している。具体的な教育目標と該当する科目は、（1）人が認識装置としてどのように機能しているのかについての知識、人がどのように発達するのかについての基本的な知識を習得する（「人のこころの仕組み」）、（2）人間を社会や集団の中の人間関係を通して理解する視座と対人援助に関する基本的な知識を習得する（「人間関係学」）、（3）人間関係の形成の方法について理解する（「コミュニケーション論」）、（4）対人援助技術を身につける（「人間行動論」「人間関係学演習」「心理アセスメント特論」）、（5）看護と関わる心理学的知識について理解する。（「人間関係学」「人間行動論」「心理アセスメント特論」）、（6）人間と社会について幅広い観点から学ぶ（非常勤）（「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「人間と社会」「法学入門」「経済学入門」「大分の歴史と文化」「文化人類学入門」）等である。

講義を行うにあたっては、個々の心理現象について看護実践と関連づけ、援助スキルや心理検査などは体験に基づく理解ができるように配慮している。また、毎授業ごとに学生の感想を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

1. 教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標である、（1）人のこころの基本的な知識、（2）集団・個人との人間関係、（3）対人援助技術を理解するという点では変更はない。しかし、今年度10月から新しい教員が赴任したことにより、授業内容および教育の順序性の評価と調整を行った。

看護と関連性が感じられる講義内容（看護活動との関連付けを意識させる授業）を望んでいるという学生の意見、看護教育全体から本研究室に求められる教育内容を考慮し、新しい教員の専門分野を生かした授業内容の見直しを行った。具体的には、これまで必ずしも十分ではなかった発達心理学・教育心理学領域の内容をカリキュラムに組み込んだ。しかしながら他の看護系教室との教育内容についてのすりあわせについてはまだ不十分な点

もあり、学生のニーズの把握とあわせ、この２つが次年度以後も本研究室の改善点となるものと思われる。

2. 科目の教育活動

1）人のこころの仕組み　　１年次前期(04/13～09/30)　　２単位
担当：吉村 匠平

前半部分においては「見る」「覚える」「問題解決」「動機付け」「条件付け」「学習理論」について講義した。「見る」「覚える」「問題解決」においては、人間が必ずしもありのままの外界を認識していないこと、各自がそれまでの生活体験を基盤に作り上げてきたスキーマによって積極的（自動的）に外界の情報を処理し、それを外の世界として受け取ってしまっていることを、自分自身を被験者とした小実験を通して体験的に理解させた。認識装置としての人間の特徴・限界・可能性について体感させた。

「動機付け」「条件づけ」「学習理論」においては、学生の高校までの体験を、「動機付け」「条件付け」「学習理論」という言葉で読みかえていくことを中心に講義をすすめるとともに、「人間行動論」において行動分析学的な手法を理解する上での基礎的知識を身につけさせた。

後半部分では、発達について講義した。「発達の規定因」「主な発達理論」（エリクソン、ピアジェ）「愛着理論」「発達しょう碍」を取り上げた。子どもに関する具体例をできる限り提示するとともに、理解の助けとなるような絵本を選定し講義中に読み聞かせを行った。また発達しょう碍については30分程度のＶＴＲを視聴させ、特徴に関する知識の羅列に終わらぬように留意した。

毎回、講義終了後、半分の学生に感想・質問を書いた上でノートの提出を求め、次回講義開始時に返却することを行った。これにより学生の講義理解度を確認するとともに、一対多関係に終始しがちな講義場面に「一対一」関係を持ち込むよう努めた。また、この授業での知識は別の講義に結びついていくために、基礎的な知識を習得させる目的で月に１回程度、授業開始30分を復習の時間にあて問題演習を繰り返した。

講義回数に比して伝達する情報が多く、どうしても講義が一方通行になってしまいがちであるため、授業外の時間でも学生相互、学生－教師間のコミュニケーションが展開するような仕掛け（例えばノートの回収－コメントもその１つ）を組織立ていく必要があると考えられる。

2）コミュニケーション論　　１年次前期(04/11～09/26)　　２単位
担当：関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に、３回のグループエクササイズ、行動観察の方法とまとめ方、行動観察の計画と実施、プレゼンテーションなどを実施した。なお、今年度は、これまでの箱庭作成体験のかわりにプロセスレコードの解説と作成の体験を導入した。

本科目の教育目標は看護実践において必要不可欠なコミュニケーションの基礎を理解し身につけることにある。具体的には、相手の発信している情報に気づくこと、受け取っ

た情報を自分がどのように理解しているのかを知る(自己を振り返る)、相手に対して情報を発信すること。そして、コミュニケーションは情報の受信－理解－発信（フィードバック）の繰り返しから成立していることを体験的に理解することである。

基本的な教育目標は達成されていると考えられる。しかし、来年に向けて以下のような改善点が考えられた。（１）グループエクササイズなどは１回の体験として終わってしまいがちであることへの対応が十分にできていないと考えられるため、エクササイズ体験を深めるためのまとめのワークなどを導入することが、効果的であると考えられる。（２）コミュニケーションの中に看護実践でも重要なスキルであるタッチングに関するエクササイズが入っていなかったので、新しいエクササイズとして導入の工夫を行いたい。（３）昨年の改善として、グループによる発表について、外部評価とメンバー間評価を組み合わせる方法を実施した。学生には評定方法を事前に説明した上で、方法に対して疑問や異議があれば受ける旨を伝えて上で実施した。その結果は、教員の側としては、より適切な評価に近づいたと感じられたものの、学生自身にとっての適切と感じられたかを確認をしていない。この点について、学生からのフィードバックを得る必要がある。

3）人間関係学　　１年次後期(10/05～02/03)　　２単位

担当：吉村 匠平

前半部分では、心理学において「性格」がどのように理解されているのかについて、客観的理解を目指す「実体論」と、人間関係の中での理解を目指す「関係論」に分けて説明した。「実体論」については類型論と特性論を紹介し、日常生活の具体例（血液型性格判断など）を例示するとともに、それぞれの理論に基づく心理テストを体験させた。また心理テストの種類・背景となる考え方・知識について説明した。「関係論」については、「同調」「服従」「役割取得と行動変容」といった社会心理学の知見を、具体例の紹介、作業、VTR視聴を通して説明したうえで､他者との関係によって人格が揺れ動くと言うことを理解させた。その上で、児童虐待をやめられない母親のVTRを視聴し、ケアが必要な対象を関係論的に理解することの重要性を理解させた。

その上でケアを必要としている人との関係を作るうえで必要な看護師の態度として、ロジャースの３条件を取り上げた。説明に加え、事例をあげながら問題演習を繰り返すことで、無条件肯定、共感、自己一致についての理解を図った。また、講義の雰囲気とロジャースの３条件が乖離しないよう（なおかつ講義の雰囲気を維持するよう）留意した。さらに具体的な事例をあげてケーススタディを行えば、理解が深まるものと考えられるが、今期の講義においてはケーススタディまで行う時間的な猶予がなかった。

講義終了後のノート回収、問題演習による復習も前期に引き続き行った。また授業外の学習を希望する学生には、メールで問題を配信し送られてきた解答を添削するということを繰り返した。半数以上の学生が試験前にはこのシステムを利用して学習を行った。

4）カウンセリング論　　２年次前期（04/17～09/25）　　１単位

担当： 関根 剛

カウンセリングスキル、代表的なカウンセリング理論、エリクソンの発達段階と様々な心理的な問題について解説をした。カウンセリングスキルについては、講義に続いてロー

ルプレイを実施して机上の理屈に終わらせないようにした。また、従来使用していた講堂や体育館は音が反響しすぎ、教室ではグループが作りづらく、かつ、隣の声の影響を受けやすいなど、ロールプレイには適切な環境ではなかった。そこで、今回食堂を用いたところ、一斉説明、グループでのロールプレイともに適当なものであった。

今年度は、新しい教員の着任が１０月以後であったため、内容的に暫定的なものとなった感は否めない。それでも、不足気味と考えられた発達に関する講義を導入している（次年以後は別の科目の中で解説される）。次年度は他の科目の教育内容との調整を行って、講義内容の精選を図ることが必要である。

5）人間行動論　　２年前期前半(04/16～06/04)　　２単位
担当：関根 剛

今年度の講義は、昨年度とほぼ同様の展開であった。すなわち、学習心理学の原理を応用して人の行動を変化させるための考え方の基礎と技法について７回にわたり解説した。その際には、他人の行動に影響を与える上での倫理についての第１回目の講義を必ず受講することを条件とした。行動分析学・学習心理学の観点から、人間の行動理解および効果的な行動変容の技法について学び、行動療法的なアプローチについて基本的理解をもつことを教育目標としている。他の心理療法やコミュニケーション的な人間理解とは異なり，徹底した科学的視点からの人間行動理解を行うので、理解を積み上げる必要がある。そのため、講義においても、例題を設けながら理解を進めているスタイルをとった。

来年度の改善については、昨年同様、（１）講義内容の精選。（２）ＨＰやメールなどを通じて学生の質問に回答する方法の検討の２点である。

6）人間関係学演習　　２年次後期前半(10/02～11/20)　　１単位
担当：関根 剛

カウンセリングスキルを身につけるためのロールプレイを中心に８回の演習を実施した。昨年度の改善の視点に基づき、（１）ロールプレイを繰り返す、（２）テープレコーダ等の機器を用いることを今年度の改善点とした。カウンセリングスキルの概説を最初に行った上で、ロールプレイは５回を学生同士で実施した。

展開は、ロールプレイにあたっては、毎回異なる想定状況を複数作成して実施した。想定状況は健康問題、日常的な人間関係、不快な出来事のほか、人間以外を主人公とするイヌバラ法をヒントにした状況設定など、多彩なものを用意している。ロールプレイは、教室や演習室に分かれ、互いの声で邪魔をしないような環境とし、最初は８名グループ、次に４人グループでロールプレイを行い、教員２名（関根、佐藤）が各グループを回りながら、応対に対して助言指導を行っていった。そして、最後に学生同士ではなく、クライエント役に電話相談等のボランティアを行っている方の協力を得て、学外の方とロールプレイを行うことを試み実施した。

また、カウンセリングスキルの獲得をより確実なものとするために、ロールプレイ内容はテープレコーダーに録音をして、その中の適当なものを逐語レポート（重要と感じられる部分はプロセスレコードとすることを推奨した）として随時、提出するように求めた。提出されたレポートは、応答に対して具体的に添削を行って返却をした。これによって、

単に一通りの「知識」としてカウンセリングスキルを学ぶにとどまらせず、具体的に自分の応対を振り返り、指導される機会を持つことで、より実践的な訓練となりえたと考えられた。なお、レポートは採点の上で返却をしており、よりよい評価を受けたい者は何回でも再提出をしてよいものとした。

来年度における改善すべき点としては、（１）授業目標の達成度評価：今回の改善はより実践的技術を身につけさせることを主眼としたものであるが、それが実際に身に付いているのかの検証は学生のレポート内容と感想によるしかない。そのため、続いて実施される看護実習においての学生や指導教員による評価を行うことで、達成度や改善点を見つけることが可能になると思われる。（２）テープレコーダー利用：テープレコーダの利用は自己の応答を振り返る上で非常に有効であると考えられた。ただし、今回は４人に１つのテープレコーダーとテープを準備したが、自己の録音を聞き返したり、逐語レポートを記載したりする際に、テープレコーダーの不足と、テープが１人しか持って行けないという事態が生じた。そのため、テープレコーダーの数を増やすことと、テープはレポート作成等の利便性とプライバシー（実際に自己の悩みを話すような設定は行ってはいないが）遵守を考慮して、各人に１本を割り当てることを次年度には配慮したい。（３）ボランティアの参加：学生同士では気楽に話をしてしまいがちであっても、見知らぬ第三者と話をする場合の緊張感はまったく違うという学生のコメントがみられた。これは実際のスキル向上のためにも、看護実習に出かける前のシュミレーションとしても、ボランティアの存在は非常に有用と考えられる。そこで、ボランティアの授業参加を拡大する方策を、手続き面や人材面から検討をしたい。

7）心理アセスメント特論　　２年次後期後半(12/02～01/13)　　１単位
担当：関根 剛、吉村 匠平

看護における心理アセスメントの意味について論じた上で、質問紙検査法としてＹＧ検査、MMＰＩなどを、投影法としてＴＡＴ、ＰＦ－ＳＴＵＤＹなどを、知能検査として田中ビネー、ＷＩＳＣ－Ｒなどを実際に自分自身で実施・採点を行った。授業に際しては、臨床現場で頻繁に使われる心理検査の説明と体験にとどまらず、心理検査の原理を知ることが看護における観察や問診、患者理解につながる見方など、看護との関連性を知ることができるように配慮して授業を実施した。

8）音楽とこころ　　２年次前期（04/12～09/30）　2単位
担当：宮本 修

9）美術とこころ　　２年次前期（0/12～09/30）　2単位
担当：澤田 佳孝

10）哲学入門　　１年次前期（04/12～06/11）　1単位
担当：西　英久

11）人間と社会　　１年次前期（04/19～09/30）　1単位
担当：大杉 至

12）法学入門　　１年次前期（04/12～06/11）　1単位
担当：小林 宏之

13）経済学入門　　１年次前期（06/14～09/30）　1単位
担当：合田 公計

14）大分の歴史と文化　　２年次後期（10/01～12/22）　2単位
担当：吉良 國光

15）文化人類学入門　　１年次後期（10/01～02/28）　2単位
担当：伊藤 泰信

16）保健医療ボランティア論　　３年次前期（07/22～07/23）　1単位
担当：福元 満治

3. 卒業研究
・他者テリトリースペースへの侵入時における行動・心理状態と不安傾向の関連
・看護実習における体験が看護学生の感情に与える影響について　－ＰＯＭＳを用いて
・子どもへのマルトリートメント意識と共感性との関連について
・ナースウェアの色が看護師の印象に及ぼす影響
・箱庭療法に関する文献的研究

3－4－5　環境科学研究室

本研究室では、環境科学における考え方の基礎、とくに環境保健に近い内容に重きをおいて、関連科目の講義・演習をおこなっている。また、放射線の利用や安全に関する科目、ME の原理や安全に関する科目などを担当している。これらは、通常の看護の基盤教育ではあまり行われていない科目であるが、将来、医療・保健に携わる者が基礎として学ぶべき内容として、その意義を理解させ、基本的知識を身につけられるように配慮した講義を行っている。

1. 教育活動の現状と課題

試験の際に、講義の評価（意見、感想など）を記載させている。この評価をもとに改善すべき点は次の年度にできるだけ反映するようにしている。例えば、看護との関係が理解できないという意見に対しては、講義の冒頭に社会的な話題と関連させたりして（学生の

イメージでは、看護とは臨床看護であり、保健活動を描けない)、講義に対するモチベーションをもたせるように努力している。また、環境科学演習では、環境科学における数量的な理解の大切さを学ぶために、エクセルを用いたシミュレーションや環境基準の仕組みやその問題点を理解できるような計算課題を与えている。レポートについてはグループ（2名）ごとにコメント指導を行っている。

2. 科目の教育活動

1） 環境科学概論　　１年次前期（04/15～09/28）　　１単位
担当：甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

毎回、講義内容をまとめたハンドアウトを配布し、環境科学のポイントがわかるように配慮した。講義内容は次の通りである。(1)環境科学の歴史、(2)大気汚染と水質汚濁、(3)地球環境問題、(4)健康・環境影響と環境リスク論、(5)リスクアセスメントと環境基準、(6)環境疫学、(7)環境有害物質の曝露評価、(8)生態リスク、(9)発がんの生物、(10)内分泌攪乱化学物質による健康影響、(11)化学物質の安全性試験、(12)環境リスク対策、(13)環境リスク心理学、(14)リスクコミュニケーション。

2） ME の原理と安全管理　　１年次後期（12/03～02/18）　　１単位
担当：甲斐 倫明、伴 信彦

講義は物理の基礎から ME 機器の原理から実際までをカバーするものである。講義内容は次の通りである。(1)ME とは何か、(2)電気に関する基礎知識、(3)生体情報の検出に関係する ME 機器、(4)CT の原理、(5)超音波診断装置と MRI、(6)生命維持に関係する ME 機器の実際、(7)ME 機器の安全対策。

3）生活環境論　　２年次前期　(06/17～09/30)　　１単位
担当：伴 信彦、甲斐 倫明

我々を取り巻く食環境、水環境、住環境と廃棄物についての基本的事項を解説し、健康で快適な生活を送るための食品保健・環境保健のあり方を論じた。講義内容は次の通りである。食中毒、食品添加物と食品中の残留物質、BSE 問題、上水道と下水道、室内汚染、温熱環境と気圧の影響、騒音・振動・悪臭。

4）放射線健康科学　　２年次後期（10/04～11/29）　　１単位
担当：甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

放射線の物理から放射線の生物・健康影響までをカバーして、放射線の基礎的な理解を重視した講義内容とした。講義内容は次の通りである。(1)放射線影響と放射線防護の歴史、(2)放射線とは何か、(3)放射性同位元素と放射能、(4)身近な放射線・放射線源の利用、(5)放射線と物質との相互作用、(6)放射線の線量、(7)放射線の生体応答（DNA 損傷と突然変異)、(8)放射線の生体応答（染色体異常と細胞死)、(9)放射線の健康影響（確定的影響)、(9)放射線のリスク評価、(10)安全の考え方と放射線防護基準、(12)患者のための放射線防護、(13)UV・電磁界の健康影響。

5）環境科学演習　　２年次後期（02/14～02/17）　　１単位
担当：甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

3 つの課題を課して、レポートを提出させる。そのレポート作成の作業の段階で教員が質疑応答に応じるというやり方で行った。テーマは環境科学の定量的側面の理解を深めるものを選んだ。課題は次の通りである。(1)メダカの死亡数分布によるデータのバラツキを調べるシミュレーション、(2)化学物質の毒性試験から得られる環境基準値のもつ不確かさ、(3)生命表を用いた平均余命の計算

6）現代の環境問題　　３年次後期　（12/13～12/21）　　１単位
担当：伴 信彦、甲斐 倫明

現代の環境問題の背景と複雑さ、解決へ向けた取り組み等について、社会・政策的な側面も交えて論じた。講義内容は次の通りである。概論 － 現代の環境問題、地球温暖化、環境ホルモン、エネルギー問題とゴミ問題、遺伝子組み換え食品

7）環境倫理学　　４年次前期　（09/15～09/29）　　１単位
担当：甲斐 倫明

環境倫理が生命倫理と際だって異なった考え方をしていることを理解させるために、生命倫理と対比させながら、種々の事例を用いて解説した。(1)環境倫理学とは、(2)現代の環境問題と倫理、(3)人間中心主義と生命中心主義、(4)自然の生存権の問題、(5)世代間倫理の問題、(6)地球全体主義

3. 卒業研究

・日本人女性の乳癌罹患率の将来予測と環境要因・遺伝要因の寄与
・放射線照射マウス造血細胞におけるγ-H2AX フォーカスの時間変化
・不均一集団の線量反応関係に対する統計学的モデルから推定される線量反応曲線の形状
・CT を用いた放射線診断件数の将来予測とその被ばくに伴うがん寄与リスク
・放射線誘発白血病における特異的染色体異常の起源に関する文献的考察

3－4－6　健康情報科学研究室

科学的な根拠に基づいた看護に必要な、生物統計学・疫学の理論を習得し、それらを実際に応用できる情報処理能力を身につけることを目標としている。そのために、講義科目と情報処理についての演習を連携させ、実践的な能力を獲得できるように配慮している。情報処理能力については、１人１台のパソコンを利用し、また看護の具体的事例を想定した演習を行っている。

また、必修科目では保健師・看護師として必要十分な能力水準を目標としているが、選択科目ではさらに高度なテーマについて取り扱い、学生の将来の目標にあわせた高度な情報処理能力の養成を目指している。

1. 教育活動の現状と課題

パソコンの基本的操作やインターネットの利用など､情報処理の基礎的経験については、年々学生の基礎技術が向上しているが、もう一つの基礎的能力である数学的能力、論理的な判断力については向上がみられず、どちらといえば低下傾向にある。

講義・演習の内容を調整してこの傾向に対応し、演習においては３名の教員で 40 名強の学生にきめ細かい対応を心がけている。しかし、１年次に当研究室担当の必修科目が完了する現在のカリキュラムにおいて、実際に学んだことがどのように役立つのかを実感できるようにつとめなければ、３～４年次の演習・実習でこれらの能力が必要となるときまでに、学習の効果が薄れてしまう傾向に歯止めをかけることが困難である。

現状では、演習に具体的に看護と関わる事例を取り込むようにつとめ、さらに４年次の選択科目において、これまでの学習の復習と総まとめを含んだ内容を組み込んで対応しているが、よりいっそうの効果的な教育法、カリキュラム配置が今後の課題であろう。

2. 科目の教育活動

1) 健康情報学　　１年次前期(04/12～09/22)　　１単位
担当：佐伯 圭一郎

人口統計、疾病情報や保健情報など、様々な健康情報に関して、情報の発生源から、評価の方法までを体系的に学習した。単に様々な統計指標を理解するだけでなく、それらの数値から情報を読みとり、思考する能力を養った。必要な事項についての学生の理解度は高いが、ここで学んだ内容がどのように看護実践の場面で活用されるのか、という点を１年生に理解させるためには、さまざまな実例を用いた学習が必要であると考えるが、この科目単独では時間的に十分とはいえず、以降の他の科目、特に広域看護学の科目との連続性をより高めることを必要としている。

2) 生物統計学　　１年次後期(10/06～02/21)　　１単位
担当：佐伯 圭一郎、中山 晃志

基本的な統計学の知識を実際の調査・研究の場面と関連づけながら、情報収集と分析の技法について学んだ。特に、統計的な方法論の考え方に重点を置き、統計情報の適切な解釈能力を高めることを目指した。あわせて情報の取り扱いに付随する情報モラルや倫理的側面についてもふれた。

現状の課題として、学生の基本的な数学能力のばらつきの大きさが進行上の支障となっており、さらに教育効果を高めるためには、別途基礎的な数学能力の向上を図る、個別指導等の対処を行う必要性があると考えられる。

3) 健康情報処理演習　　１年次後期(10/05～02/28)　　２単位
担当：佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立てるための知識と技術を学んだ。また、インターネットをコミュニケーションや情報収集に役立てる技法を習得した。内容は、情報機器の仕組みと機能、ネットワークの利

用（WWW,メール)、ワードプロセッサ、ホームページ作成、表計算、プレゼンテーション、統計データの分析である。

情報処理能力は、年々向上しているが、学生間の格差がますます拡大する傾向にあり、演習の進度を遅い学生に合わせているため、多くの学生にとっては余裕がありすぎる進行であろう。この点に関して、別途発展的課題を提示する、学生相互で協力し合うという方針をさらに充実させる計画である。また、これ以降も演習などで必要とされる基本的能力であるため、他の演習科目などと連携して、継続的な能力の維持・向上のための教育を考えたい。

４）応用情報処理学（選択）　２年次前期後半(06/18～09/24)　１単位
担当：佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

看護研究の場を想定し、実際のデータ例に基づいて、高度な統計手法を含みながら、一部演習形式で学習を進めた。この科目については、カリキュラムの改変により、選択科目ではあるが、実質的にはほぼすべての学生が受講することとなったため、必修科目である生物統計学および健康情報処理演習との連続性を高めている。毎回の小テストという形式に、あまり積極的に学習する態度のない学生は対応しきれていない様子であり、この点は今後の検討課題である。

５）実務情報処理学（選択）　４年次前期後半(09/06～09/27)　１単位
担当：佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

健康情報処理演習で修得した情報処理能力を看護師・保健師の実務の場を想定した具体的事例を通じて、さらに高度なものへと高めることを目標としているが、１年次の必修科目の復習が必要となる点で授業進行上支障となっている。今年度は、プレゼンテーションや印刷物のデザインについて、外部から商業デザイナーの講師を招き、演習と講評という形式の内容も組み込み、比較的少数の履修者である点をいかして教育的効果を高めることができたと考える。

3．卒業研究

・新人看護師の技術・能力の最近 20 年の推移に関する文献学的検討
・高齢者における肥満指標の経年変化と健診結果との関連
・病院給食の評価方法に関する文献的研究－職種による評価視点の違い－
・看護職のスピリチュアルケアに対する認識に関する研究
・喫煙高齢者の健診結果の特徴

3－4－7　言語学研究室

言語活動の四技能（Reading, Writing, Listening, Speaking）をバランスよく伸ばすことを目指す。将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くように、実用的で易しい英語に取り組ませる。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるた

めに、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施する。

1. 教育活動の現状と課題

英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させる。それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を理解させる。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声テープで確認し、日本人教員の発音の後について実際に反復練習を行う。課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてくることが課題となり、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行う。ネイティブ・スピーカーの教員の授業では、学生によるグループワーク形態において同じ学生が同じグループに含まれないように工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。よって、教室での活動をもとにいかに教室外での学習を継続させることができるか、すなわち学生への英語学習の動機付けと学習意欲の維持をいかに実現していくか、さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な英語学習へのきっかけ作りをいかに構築していくか、といったことが課題である。ひとつの試みとして、コンピューターを用いたウェブ学習システム（CALL システム）による TOEIC 対策のための英語学習を導入した。また、CALL システム実施の前後に、学生の学習成果を見る指標として TOEIC IP を本学にて実施した。受講した学生は熱心に取り組み、結果として学生の学習成果に向上が見られた。

2. 科目の教育活動

1）英語Ⅰ－A1　　１年次前期　クラス１：04/12～09/27　１単位
　　クラス２：04/15～09/28　１単位
　　担当：宮内 信治

食料、環境、科学などをテーマとして、個別に具体的な内容の英文テキストに取り組んだ。日常生活を営む上では気がつかないが、実は自分自身にとって非常に身近でかつ深刻な問題に意識を向けることは大切である。そうした重要な主題も比較的平易な英文で表現できることを、英文テキストの暗唱をすることにより体得できたと思う。多読による総読書量は、前期期間中一人平均 46,000 語。

2）英語Ⅰ－A2　　１年次後期　クラス１：10/05～02/23　１単位
　　クラス２：10/07～02/22　１単位
　　担当：宮内 信治

万病の元凶のひとつに高血圧が上げられる。血圧の定義付け、血圧に関係のある医療専門用語をはじめ、高血圧の原因とそれによって起こる症状、さらには予防や治療に関する知識まで、高血圧というひとつの症状に特化して英文テキストに取り組んだ。一課の文章全

体をパラグラフごとに暗唱することで､英文テキストの構成の特徴が体感できたと考える。多読による総読書量は通年で一人平均 92,000 語。

3) 英語Ⅰ－B1　　１年次前期　クラス１：04/15～09/24　１単位
　　クラス２：04/12～09/27　１単位
　　担当：Gerald T. Shirley

Basic conversation was reviewed and practiced. Listening, pronunciation and usage were also given importance. Conversation important for daily life was practiced in an interesting way.

4) 英語Ⅰ－B2　　１年次後期　クラス１：10/01～02/22　１単位
　　クラス２：10/05～02/18　１単位
　　担当：Gerald T. Shirley

Useful language at a basic level in a meaningful context continued to be practiced. Model conversations followed by guided activities designed for pair work were used to maximize speaking time.

5) 英語Ⅱ－A1　　２年次前期　クラス１：04/13～09/27　１単位
　　クラス２：04/12～09/29　１単位
　　担当：宮内 信治

人間の精神活動の中枢である脳について、様々な角度からの知見を紹介した英文テキストに取り組んだ。また、英文を読む際の音韻的特徴について、その音の流れを視覚的に捉えることができるような演習を実施し、それをもとに暗唱などの自主学習を促し、習得を確認した。音の英語らしさを具体的に捉えることに新鮮味を感じたようである。多読による総読書量は、前期期間中一人平均 35,000 語。

6) 英語Ⅱ－A2　　２年次後期　クラス１：10/07～12/16　１単位
　　クラス２：10/06～12/21　１単位
　　担当：宮内 信治

携帯電話による人体への影響の検証、CT スキャンの紹介、「書く」ことによる病気の治癒などについての英文テキストに取り組んだ。英語のイントネーションに特化した表記方法の特徴や意味について理解した後、その表記による英文テキストを繰り返し音読し音の流れを確認した。暗唱課題により、学生自らが英語らしい音の流れを再現できるようになった。多読による総読書量は通年で一人平均 59,000 語。

7) 英語Ⅱ－B1　　２年次前期　クラス１：04/12～09/29　１単位
　　クラス２：04/16～09/27　１単位
　　担当：Gerald T. Shirley

Natural language in everyday situations was practiced in order to increase students’ command of simple, spoken American English. Interesting and fun speaking

and listening activities such as role play were practiced in pairs and groups.

8）英語Ⅱ－B2　　２年次後期　クラス１：10/06～12/21　１単位
　　クラス２：10/07～12/16　１単位
　　担当：Gerald T. Shirley

Essential English for everyday conversation continued to be practiced. A wide variety of speaking and listening exercises (such as information gap activities) that maximize student interaction were used to stress conversational fluency.

9）英語Ⅲ－A　　３年次前期：04/13～07/20　　１単位
　　担当：Gerald T. Shirley、宮内 信治

（講読）医療、看護、心理に関係のある英単語に関して、ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに単語の意味の成り立ちを理解させた。
（会話）日常会話で用いる基本的英語の訓練を継続する。クラス全体を数グループに分け、それぞれのグループの中でひとつのテーマを決めて互いに話させる。
　原則として講読と会話を前半と後半に分けてどちらも受講できるようにした。今後はこの科目を自由選択科目として設定することが望まれる。

10）英語Ⅲ－B　　３年次前期：04/13～07/20　　１単位
　　担当：Gerald T. Shirley、宮内 信治

A variety of stimulating communication activities, including student and teacher-centered exercises, pair and small group work, and games and role-play that involved the whole class were used to help students improve their speaking ability.

11）言語表現法　　１年次前期（04/12～06/11）　　２単位
　　担当：日高 貢一郎

12）韓国語　　３年次前期（04/12～07/20）　　２単位
　　担当：劉 美貞

13）スペイン語　　３年次前期（04/12～07/20）　　２単位
　　担当：ホアンホセ・アルタミラノ

3. 卒業研究
・女性が日本で自分の健康と美を守るために役立つガイドブック作成
・０県内の病院における在日外国人への対応の実態調査
・臨床現場における大分方言の分析　～看護職等の大分弁体験集～
・在日外国人が安心して検査を受けるためのガイドブック作成

3－4－8　基礎看護学研究室

看護学の導入部分として、看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに、援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。具体的な教育目標と該当する科目は(1)看護とは何か､看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解する(「看護学入門」)、(2) 看護情報とは何か、看護と情報科学や情報システムとの関連を理解する(「看護情報学概論」)、(3)日常生活の援助技術及び医療に伴う看護技術の基礎を理解する(「生活援助論」)、(4) 個人、家族、地域社会のヘルスニーズを満たすための方法論である看護過程について理解する(「臨床看護総論」)、(5) 看護の対象を総合的に把握し、健康問題を明らかにするまでの過程を理解する(「基礎看護学演習」)､(6) 入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、日常生活の援助の方法を理解する(「基礎看護学実習」) (7)遺伝学の基礎及び看護者として遺伝病や遺伝子診断に関わる問題解決能力を習得する(「看護と遺伝」)等である。

講義・演習・実習を行うにあたっては、上記科目の学習進度にそって具体的な看護実践に関連づけたり、一人ひとりの学生の理解度や興味・関心について考慮しながら教授している。

1. 教育活動の現状と課題

自らの看護に対する興味や関心を高め、看護を展開する場合の基本的な援助技術を修得することに重点をおいている。また、1･2 年次での生活援助論では、3･4 年次に実施している看護技術修得プログラムについて説明し、その導入としての動機づけも行っている。但し、看護学実習室での演習指導については、担当教員により一部、指導内容が異なっていたり、技術試験での評価にばらつきがあるなど、学生が戸惑うことがあったため、次年度の課題としたい。

2. 科目の教育活動

1) 看護学入門　　１年次前期・後期前半(04/12～11/22)　１単位
担当：小林 三津子

初学者であり、抽象的な知識や理論だけでは看護に対する興味・関心を深めることができないため、できるだけ具体的な事例や基礎看護学実習でのエピソードなどを提示し、自らに問いかけるような課題を与えた。

2) 看護情報学概論　　１年次後期後半(12/03～02/18)　　１単位
担当：小林 三津子

上記科目同様、初学者のため情報とは何か、という身近な問題から、看護に関連づけて考えられるように授業を組み立て､看護実践に生かすための看護情報学のあり方について、自らが主体的に考えられるように教授した。

3）生活援助論　　１年次　前期後半（06/14～09/29）　　１単位
　　後期前半（10/01～11/19）　　１単位
　　２年次　前期前半（04/13～06/11）　　１単位
　　担当：伊東 朋子、玉井 保子、姫野 稔子、小林 みどり、
　　小林 三津子

1 年次前・後期、２年次前期にそれぞれ、生活過程、生命維持、診断治療の各 1 単位を実施した。援助技術習得のための基礎的知識の教授及び、2 人１組での看護学実習室での演習を基本的な枠組みとして２コマ続きの展開としている。本年度は、演習で担当する学生数を少なくするために、ティーチングアシスタントとして大学院生２名の協力を得ることができ、学生からも好評であった。また、3・4 年次に実施される看護技術修得プログラムの導入としての位置づけを理解させ、技術試験を科目単位終了ごとに課し、課外での技術練習を繰り返し行うように指導した。

4）臨床看護総論　　２年次前期後半（06/24～09/30）　　１単位
　　担当：小林 三津子、伊東 朋子

看護実践を展開するための基本的な問題解決技法である「看護過程」について、できるだけ平易に具体性を持たせて展開し、基本的な５つのステップについて教授した。

5）基礎看護学演習　　２年次後期（11/04～12/16）　　１単位
　　担当：小林 三津子、伊東 朋子、藤内 美保

学生が看護学実習で遭遇しやすい２つの事例を提示し、アセスメント、看護問題の抽出、計画立案までを課した。学生は 10 グループに分かれて演習を行い、その後、資料あるいはパワーポイントを用いて発表を行うようにし、グループワークした内容を共有できるように配慮した。また、基礎看護学実習を目前に控えた冬季休業中に課題事例を与え、一人で展開例を作成させた。

6）基礎看護学実習　　２年次　後期（01/13～01/26）　　２単位
　　担当：小林 三津子、伊東 朋子、藤内 美保、玉井 保子、姫野 稔子、
　　小林 みどり、吉留 厚子、大賀 淳子、安部 恭子、高橋 ゆか、
　　大津 佐知江、松尾 恭子、福田 広美、高波 利恵、木村 厚子、
　　山下 早苗、井上 和美

患者１名を受け持つ本格的な実習としては初めてのため、学内オリエンテーションでは、実習施設である県立病院及び赤十字病院の看護部長より、看護職として大切にしている事や看護学生時代のエピソードなどについての講義を依頼し、実習に対する動機づけを行った。また、２施設 14 病棟での実習がより効果的に展開できるように、グループ編成については、学生の個別性や担当教員の指導経験を考慮し、よりグループダイナミックスが活かされるようなグループ配置を行った。結果として、実習目標の達成度は極めて高かった。さらに、赤十字病院の備品・消耗品等の整備にも努め、実習環境を整えた。

7）看護と遺伝　　２年次　前期後半(06/17～09/30)　１単位

担当：佐渡 敏彦、吉河 康二

非常勤講師による専門の講義や臨床での実践例を紹介し、毎回、簡単な練習問題をだし、理解の程度を確認した。

3. 卒業研究

・介護サポータ装着による腰部負担軽減に関する検討
　－車椅子移乗動作を対象として－
・カルテ開示に向けての看護記録に関する職員教育の実態と課題
・便秘に対する腰部及び腰背部温罨法の生理学的効果に関する比較検討
・ターミナル期に携わる看護師の患者ケアに対する満足度
・看護学生の骨密度と食・生活習慣との関連
　－１年次生と４年次生との比較－
・わが国におけるドナーカード普及の現状と背景に関する文献的検討
・注射前の注射部位の皮膚消毒に関する科学的根拠－文献研究から－

3－4－9　看護アセスメント学研究室

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目的としている。看護学の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的・心理的・社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「看護アセスメント方法論」「看護アセスメント学実習」である。主にフィジカルな部分を中心としており、主要な疾病の理解や病態の理解に加え、これらの知識をもとにどのような方法で健康問題をアセスメントするか具体的な方法論を教授している。

1. 教育活動の現状と課題

対象の健康問題をアセスメントするための能力を高めるには、疾病や病態などの基本的・専門的な知識が必要である。人間科学講座での生体科学、生体反応学などの知識を想起させ、さらに成人・老人看護学へつなげられるための内容を教授するように配慮している。

看護疾病病態論は週に４コマのペースで講義を行うため、過密に専門的知識を教え込まなければならず、学生は専門用語の理解から困惑しているようである。そのため単元ごとに中間試験を実施し、知識を整理、復習できるようにした。また、最終的には単位認定の総合テストを実施している。何度も復習することで基本的知識の確認ができると考えている。試験問題の作成、採点など、手間がかかるが、その分の教育効果はあると感じている。

看護アセスメント方法論は、病態のメカニズムの基本的知識について講義形式で教授し

た後、病態の正常、異常をどのように判断するのか具体的方法論についての教授を学内実習形式で行っている。また、看護アセスメント学で教授している科目は、専門領域のベースとなる重要な基礎的知識であるため、厳しく評価するようにし、また自ら学ぶという姿勢の重要性を強調している。今年度は学内実習での指導が行届くように、TA２名にも指導協力してもらった。

2. 科目の教育活動

1）看護疾病病態論Ⅰ　　１年次後期後半（12/02～02/24）　　２単位
担当：藤内 美保

看護疾病病態論Ⅰは、循環器系、呼吸器系、血液造血器系、腎、代謝・内分泌系の疾患を教授した。各系統の解剖学、生理学を復習し想起させながら、疾患の概念や病態、症状のメカニズム、検査、診断、治療を中心に教授した。可能な限り図式化して理解を得やすいように配慮した。後期後半の３ヶ月間、週に４コマのペースで専門的な内容が膨大となり混乱しやすいため、各系統別の講義が終了するごとに中間試験を計５回実施するとともに最終の総合試験を実施した。中間試験を行うことで、知識の整理ができ、学生からも好評であった。

2）看護疾病病態論Ⅱ　　２年次前期前半(04/13～06/10)　　２単位
担当：藤内 美保、安部 恭子、高橋　ゆか、法化図 陽一、
今泉 雅資、津江 裕昭、山崎 透、須小 毅、石神 崇

看護疾病病態論Ⅱは、筋骨格系、脳・神経系、肝・胆・膵系、消化器系、アレルギー疾患、自己免疫疾患、感染症、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科の疾患を教授した。専門性の高い疾患については、県立病院の医師による講義をお願いした。臨床医の講義は治療法や症例など具体的な提示もあり刺激になっている。

講師陣が入れ替わり立ち代りで教授方法もそれぞれ異なるため、一部戸惑う学生もいたが、中間試験を実施し、知識の整理ができるように配慮した。

3）看護アセスメント方法論　２年次前期後半(06/17～09/30)　　２単位
担当：藤内 美保、安部 恭子、高橋 ゆか

看護アセスメント方法論は、フィジカルアセスメントの基礎知識、健康歴聴取、全身状態の観察、消化器系、循環器系、呼吸器系、感覚・運動系、脳・神経系の患者のアセスメントを中心に教授した。３コマ連続の講義で前半は病態の説明、後半は実習室でフィジカルイグザミネーションとした。これまでは３人の教員で 80 人の学生を指導するにはきめ細かな指導が困難であるため、今年はＴＡ２人が加わり５人体制で指導ができた。フィジカルイグザミネーションのデモンストレーションでポイントを強調するように配慮するとともに、学内実習の終了時にまとめを行い、学生全員の理解が深まるよう工夫している。

また臨床現場で遭遇しやすい事例を７つ提示し、２グループが同様の事例を検討する演習を行った。発表では演習したプロセスの違いが見えやすく、学生の気づきも大きい。最後に病態に関する筆記試験を実施した。

4）看護アセスメント学実習　２年次後期（01/31～02/10）　２単位

担当：小林 三津子、伊東 朋子、藤内 美保、安部 恭子、井上 和美、大賀 淳子、大津 佐知江、木村 厚子、小林 みどり、高波 利恵、高橋 ゆか、玉井 保子、姫野 稔子、福田 広美、松尾 恭子、山下 早苗、吉留 厚子

看護アセスメント学実習においては、県立病院 10 病棟と赤十字病院 4 病棟に学生５～６名をそれぞれ配置し、患者１名を受け持たせ、アセスメントのプロセスを学ぶための実習を行った。ほぼ全員実習目標を到達したが、アセスメントの段階で解剖学や生理学の力不足のためにアセスメントが困難な学生も一部に見られた。アセスメントのプロセスにおいて、思考が整理できるよう、記録用紙の様式を改善し、基礎看護学演習で試用して臨地実習に臨ませた。実習終了後に担当教員を含む看護系教員で反省会を実施した。この内容をふまえ次年度改善を加えていきたい。

3. 卒業研究

・三次元解析装置を用いた起き上がり介助動作のアセスメント
　－熟練度の違いに着目して－
・臓器提供の意思とセルフ・エスティームにおける関連性の検討
・においセンサーを用いた病床における臭気変化の分析　－オムツ交換と経時的データに着目して－
・女性の骨密度と朝食・運動との関連　－年代による骨密度変化に着目して－

3－4－10　成人・老人看護学研究室

成人・老人看護学研究室では、成人・老人看護の実践に必要な専門知識・判断能力と援助技術を身につけさせることを目的にしており、そのために概論、援助論、演習、実習の各教科を設定している。そして、臨地実習において必要となる技術を確実なものとするために可能な限り学内実習を組み込むことに配慮している。

1. 教育活動の現状と課題

これまで、援助論の学内実習では、1 教員の担当する学生が多く、個々の学生の細かな手技の指導・確認が困難であることが問題であった。そこで一昨年度は一部ティーチングアシスタントの導入を試みたが、すべての実習に対応することができなかったため、昨年度はクラスを２分して同じ授業を２回繰り返すことにした。その結果、１教員は８名程度の学生を担当することになり、当初の問題が解決したことから、今年度もクラスを２分する方法を継続して学内実習を実施した。しかし、授業内容の進行に沿って学内実習を計画することについては、後期の臨地実習の時期と重なる期間は教員の配置に困難があるため、今年度も前期に学内実習を計画した。学内実習の展開では、今年度新たに学生の自主的学習方式を取り入れ、事例に関する事前の自己学習とグループワークを行った後に、ロール・プレイによる発表を行った。これは、学生が発表を通して、視点の相違や援助方法の多様さについて討議することで、理解をより深めることを意図した。

2. 科目の教育活動

1）成人看護学概論　　２年次前期前半（04/16～ 06/11）　　１単位
担当：粟屋 典子
2）老人看護学概論　　２年次前期前半（04/16～ 06/11）　　１単位
担当：粟屋 典子
一連の成人・老人看護学を学ぶための基礎となる内容として、成人期・老年期における身体的・心理的・社会的特徴や、健康問題の特徴などを教授した。

3）成人・老人看護援助論Ⅰ　２年次前期後半（06/15～ 09/29）　２単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、松尾 恭子、福田 広美
4）成人・老人看護援助論Ⅱ　２年次後期　（10/05～ 02/21）　２単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、松尾 恭子、福田 広美
成人・老人看護援助論Ⅰ・Ⅱにおいては、看護実践において膨大な範囲の知識・技術を求められる中､限られた時間を効果的に活用する必要がある｡そこで身体機能別に大別し、それぞれに関する健康問題をもつ対象の急性期と慢性期に必要な看護援助について教授した。それらに関連した援助技術の学内実習については、確実な技術の修得を目的に今年度もクラスを２分し、同一内容で２回ずつ実施した。また、学内実習の展開では、提示した事例に対する援助について学生がロール・プレイによる発表を行う形を採り入れ、総合的な判断力と主体的な学習能力の向上に努めた。

5）成人・老人看護学演習　３年次前期（05/27～07/12）　　１単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、松尾 恭子、福田 広美
演習においては、臨地実習で必須となる看護過程について事例を用いて展開させ、最終日にはディベート形式の発表会をもった。本年もグループ分けは行っているが、展開技術の確実な習得を目指して学生個々で行うこととし、演習時間の後半にグループ内でお互いの進行状況や疑問点を話し合うこととした。また、展開の困難な学生には個別指導を行った。

6）成人看護学実習　　３年次前期後半、後期前半（09/06～11/26）　４単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大村 由紀美、姫野 稔子、木村 厚子、
高波 利恵、高橋 ゆか、安部 恭子、大津 佐知江、時松 紀子、松尾 恭子、
玉井 保子、福田 広美、粟屋 典子
7）老人看護学実習Ⅰ　　３年次前期後半、後期前半（09/06～11/26）　２単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大村 由紀美、姫野 稔子、木村 厚子、
高波 理恵、高橋 ゆか、安部 恭子、大津 佐知江、時松 紀子、松尾 恭子
玉井 保子、福田 広美、粟屋 典子
成人・老人看護学実習においては、10 病棟に学生４～５名をそれぞれ配置し、担当教員と臨床側の実習指導者の指導のもと、学生に 1～２名の対象者を受け持たせ、看護実践を体験させた。援助技術の確実な習得と拡充を図るために、これまでも臨床側と検討を重ね

てきたが、本年度も再度拡充に向けての協議を行った。また、実習に際して学生は、受け持ち対象者に限らず体験あるいは見学できる援助技術について指導者あるいは教員の指導の下で実践や見学を行った。昨年の課題であったカンファレンスの時間短縮については、いくらかの改善はあるが、今後も大学側と臨床側双方で努力することとなった。

8）老人看護学実習Ⅱ　　４年次前期前半（05/12～06/13）　　１単位

担当：赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、松尾 恭子、福田 広美、粟屋 典子

介護特別養護老人ホーム、介護老人保健施設において、入所者の生活支援を通して対象者を理解し、これらの施設における看護専門職の役割と課題を学び、その内容について実習最終日に学内で発表会をもった。次年度に向けた課題は、学生に対するケア計画立案に必要な入所者の情報の取り扱いが施設により相違があることから、施設選択を再検討することである。

3．卒業研究

・養護学校に在籍する医療的ケアを要する児童生徒の現状と看護職に求められる役割の検討
・実習ユニフォームの清潔と手洗いに関する看護学生の現状と課題
・新人看護師の困ったことに対する対処過程
・看護学生の性に対する認識
　－看護学生の性役割パーソナリティによるセクシュアリティに対する態度への関連－
・終末期病棟における看護師のタッチングの実態
・無菌室における看護場面で看護師が感じるジレンマとその対応
・施設入所者の笑いを引き起こす援助の検討
　－ポジティブな感情を伴う笑いに注目して－

3－4－11　小児看護学研究室

小児看護学は、基礎看護科学講座で看護理論や技術を学んだ学生に対して、小児保健の立場で発達理論を学び、小児各期の発達・成長を理解する。つぎに、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する小児看護の特殊性を学ぶ。さらに小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶようにカリキュラムを構成している。

小児看護学は母性・成人・精神看護学とともに専門看護学講座の４科目群の１科目として重要な役割を担っている。講義は、２年次前期に概論で導入を行い、３年次前期前半より１年間で集中的に講義が展開される。最近は少子化の影響で兄弟も少なく、周囲に小児がいなかった、また接したことがないという学生が少なくない。そこで、糖尿病のサマーキャンプや子どもの健康週間などの地域活動にも参加を促し、体験学習の場としている。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どもイメージを持たせるように配慮している。また､毎回講義の終了時に学生の意見や質問を求め､次の講義で質問に答えるようにして、学生の疑問を残さないようにしている。３年次後期前半の小児看護学実習では、特に子ど

もの理解に焦点をあてている。学生が、保育所実習と小児病棟の実習を通じて、健康・不健康に関わらず小児にかかわる援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築するように配慮している。

1. 教育活動の現状と課題

小児看護学では、学内で学んだ理論を実習で実践し必要な専門知識・判断力と援助技術を身につけることを目的としている。また、小児看護学では発達過程にある小児の保健と看護を理解することをねらいにしている。そのために必要な事象を教授し、２年次の概論から学生個々の「子ども観」が育つように配慮している。３年次の小児の発達と援助論、演習、実習という流れのなかで、看護者、大人としての役割を意識し、行動できるようにカリキュラムを設定している。講義において学生は多量の小児に関する専門的知識を学ぶことになる。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見をメモしてもらい、次の講義で質問に答えるようにしている。小児看護への適応と学習の定着を期待して、講義期間中に小テストを行い重要なポイントの理解を促した。実習前までに合格ラインに達していない学生には、再試験を実施するなどフォローした。次年度の改善策としては、これまで使用していたテキストの大幅な改訂に伴い、講義の構成を見直しする必要がある。従来の多量の資料の提供をやめ、学生が能動的にテキストを活用する講義にするために全体の見直しを行う必要がある。

2. 科目の教育活動

1）小児看護学概論　　２年次前期前半（04/12～06/11）　　１単位
担当：高野 政子

小児看護の特質と概要を理解するための基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と環境の関わりを考え小児保健・小児医療の動向を述べ教育・福祉の視点から小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1.小児看護学の変遷と小児看護の特殊性､2.世界の子どもの健康と医療､3.子ども観の変遷と子どもの権利、4.日本の母子行政・母子保健と母子福祉、家族と親子関係（虐待）、5.小児の成長・発達総論、6.形態・機能的発達、7.心理的・社会的・言語的発達。最後の講義時間に、フィールドワークを通して書いた子どもの観察レポートを発表し意見交換する。これまで目を向けることの少なかった子どもの発見が学生から報告され共有することにしている。これまでの学生の反応（コメント）からは講義の目的を達成していると考えている。

2）発達と援助論（演習含）３年次前期前半（04/12～06/11）　　２単位
担当：高野 政子、山下 早苗、井上 和美

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき､小児の行動を多面的に捉え、発達過程に応じた日常生活の援助方法と保育方法を講義し演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義の内容は、1.小児期の主要な発達理論、2.小児各期の発達アセスメント、3.乳児期、幼児期の保育理論と技術、4.学童、

思春期の保健と看護、5.病気の子どもと家族、6.小児の健康障害（病態と治療）の看護、7.障害のある子どもと療養生活の援助、8.親子関係に問題のある場合の看護ほか。小児の学内演習は、実習に関連した看護技術たとえばバイタルサイン等諸計測、沐浴、離乳食の実際などを行っている。学内演習では、一人の教員が 20 名を受け持つので、習熟度に差が生じないように、チェックリストで自己評価させたものを、演習終了後に教員に提出させ確認している。演習時間が少ないので、演習の項目と数は毎年見直して、効果的な演習に改善することを心がけている。

3）小児看護援助論（演習含）３年次前期後半（06/16～07/15）　　１単位

担当：高野 政子、山下 早苗、井上 和美、小林 みどり

前半は、小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説し、後半は、学生による調べ学習のレポート発表形式ですすめている。これは学生からも積極的に講義に参加できると好評で、次年度もこの方式で続ける予定である。また、講義の終盤は演習形式で行っている。臨地実習でよく出会う事例を紙上患児として５事例提供しグループワークで１グループが１事例の看護過程をまとめ発表する。発表日は１事例について２グループが発表し、それぞれのまとめた内容について意見交換した。今年度は早めにグループメンバーを決定して、事例も提供して学生個々に展開したものを提出させ、傍観者的な学生を作らないことを目指した。次年度も学生個々の能力を高めることと、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する予定である。また、展開の困難な学生には個別指導を行う必要がある。

4）小児看護学実習　　３年次後期（09/06～11/26）　　２単位

担当：高野 政子、山下 早苗、井上 和美、小林 みどり

小児看護学実習においては、大分県立病院小児病棟に学生 10 名、大分こども病院に学生４名を配置し、担当教員と臨床側の実習指導者の指導のもと、学生に１名の対象児を受け持つよう配慮し、小児看護を体験学習させている。小児看護学の実習日数は２週間と短期間であり、看護学生としてもはじめて子どもに接するという者も多く、対象とのコミュニケーションの段階から戸惑うことも少なくないので、教員は学生が援助技術を実践することに苦手意識を持たないようにすることが、まず、第一の課題と考えられた。

本年度の実習では、実習学生数と教員の配置の関係から、基礎看護学研究室の助手１名の応援を得て、学生の実習を十分に指導できるように配慮して実施した。実習は保育所３日間保育実践に変更したが、台風が多く２日間の保育所実習では学生の実習の達成感が少なかった。病院では７日間の小児看護を実施するため、子どもにも慣れることができ、小児看護の動機づけとなり良い実習になっていると思われる。子どもは大人が護り育てる対象であるという認識をもつ学生が育っていると考える。実習ではパンフレット作成や、遊びの必要性を理解して、子どもの発達にあった遊具の開発などに取り組む姿が見られた。

実習終了後、実習施設の各病棟教育担当者全員と担当教員で実習反省会をもち、意見交換を行った。次年度の課題として、実習施設を大分こども病院から別府発達医療センターに変更予定である。

3. 卒業研究

・外来通院している小児がん患者への告知に対する親のコーピング
・ペリネイタルビジットの実際と母親の育児に対する期待感・予期不安感に関する研究
・口唇・口蓋裂児をもつ母親の離乳食に対する困難感
・唇顎口蓋裂児の咀嚼能力と構音機能に関する研究　－発色ガム法による評価－

3－4－12　母性看護学・助産学研究室

母性看護学では、女性のライフサイクル及びマタニティサイクルにある母性各期・新生児の健康現象に対する援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。助産学は選択科目となっており、本学では10名程度選考している。保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正で、実習中分娩の取り扱いについて、助産師又は医師の監督の下に学生一人につき､正期産を10回程度直接取り扱うことが定められており本学では９例以上を目安とすることを基本的考え方としている。助産師教育は、卒業時点までにどこまでできることが望ましいかを基本にすえ、最小限、社会ニーズの変化に対応でき、母子の安全性(正常・異常の区別)が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。

1. 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論を、実習で実践し理論と実際を結びつけることを目標としているが、今年度は正常分娩の少ない施設で実習を行った学生は産褥の看護技術経験（例：産褥期の乳房の変化への対応等学生の状況アセスメントを質問により確認するが実践と結びつかないなど）が非常に少ないことが上げられた。正常褥婦のケアを学ばせようと思えば実習スタイルを変更するか、自然分娩数の多い実習施設（診療所）の確保が上げられ、今後の検討課題である。

今年度の助産学専攻者は８名である。助産学教育は先ず、３年次から母性看護学援助論と同時並行で、助産学概論、助産診断・技術学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの講義が行われ、第４段階実習（母性看護の実習）を終え、引き続き助産診断・技術学、助産過程および分娩介助の演習が組み込まれている。本年度も昨年のやり方を踏襲し助産学実習を行ったが、６単位の実習期間では１人で安全性の判断をし、実施できるところまでは無理であり、目標をどこに置くかが大変難しい。また、分娩介助を10例程度（９例以上）取りあげるために実習期間が夏休み休暇に20日間延長したこと等､助産学教育が非常に過密であることは例年と同じく大きな課題である。

2. 科目の教育活動

1）母性看護学概論　　２年次前期（04/15～09/29）　　１単位
担当：宮崎 文子、林 猪都子

母性看護学の基本概念として、人間の性と生殖（種族保存）の側面から女性の全生涯を

通じた健康生活の促進と健康問題への対応に視点をおき、母性看護の役割と重要性について系統的に教授した。実施状況は次のとおりである。1.母性とは・母性看護とは（倫理面の強化）、2.母性看護の変遷、3.人間の性と生殖の概念と意義、4.リプロダクティブヘルス・ライツの概念、ジェンダーと Sex 、5.家族関係の理論とサポートシステム、6.母性看護の理論と実際、7.胎児の成長・発達（母子の歯科保健を含む）、8.母性愛着行動と母子関係、9.思春期の特徴とその対応、10.家族計画と受胎調節、11.人工妊娠中絶の諸問題、不妊症、12.更年期・老年期の特徴とその対応、13.母性の環境と諸問題（労働・環境汚染・文化）、14.母子保健に関する諸制度。
本年度の改善点：母性は学生自身であり極力学生参加型の授業となるように、質問形式の授業展開を心がけた。今後の課題としては教授内容の精選と判断力・思考力に重点を置いた教授法の検討である。

2）母性病態論　　２年次後期（10/01～12/22）　　１単位
担当：肥田木 孜、谷口 一郎、吉留　厚子、宇津宮 隆史、
堀永 孚郎、上野 佳子、江上 佐枝子

母性のライフサイクルにそった主要疾患についての病態・生理、症状、治療、看護への視点から講義をすすめた。対象とした疾患名は次のとおりである。月経異常の鑑別診断、無月経、思春期貧血、子宮内膜症、子宮癌、ＳＴＤ、異常妊娠、異常分娩、異常産褥、閉経症候群と治療、不妊症と治療、胎児・新生児の異常である。近年、不妊症に関して検査・治療がめざましく進歩していることを鑑み、今年度より不妊症についての授業の充実を図った。特に不妊の病態のみに焦点を当てず、不妊症の患者の心理について、臨床現場で担当している臨床心理士からの講義は興味深いものであった。

3）母性看護援助論Ⅰ　　２年次後期後半（12/01～12/22）　　１単位
担当：吉留 厚子

シラバスの内容を看護師国家試験出題基準にそって変更した。母性看護の対象は母子のみではなく家族を含むことを認識し、妊娠から分娩の生理的変化ついて教授した。授業の基本方針として、前回の授業で教授した内容について、授業の最初に、学生と質疑応答を行い確認作業し進めていくように前年より努めた。特に、分娩における児頭の回旋等の話やプリントの図だけでは理解し難い内容は、模型を頻回に利用して、目でみて学生がよりわかりやすいようにした。

4）母性看護援助論Ⅱ　　３年次前期前半（04/12～06/11）　　１単位
担当：吉留 厚子

シラバスの内容を看護師国家試験出題基準にそって変更した。異常分娩、正常産褥、異常産褥、新生児の看護について教授した。学生に授業内容について興味を持たせるために、特に異常分娩や異常産褥について事例を提示しながら授業を進めていった。前回の授業の内容について確認したほうが、より授業の内容の理解に効果的であると思われた場合には、授業開始時に学生と質疑応答を行った。

5）臨床母性看護総論　　３年次前期前半（04/12～06/11）　　１単位
担当：吉留 厚子、梅野 貴恵、後藤 由美、大神 純子

母性看護学実習で実施する母性看護特有の援助の実際を教員の指導のもとで演習した。実習直前に自己学習で沐浴を実施させた。また、母性看護の特色のある症例をもとに看護過程のペーパートレーニングを行い、母性看護実習の実践で応用できるように教授した。しかし、実習での受け持ち患者に対する看護過程がアセスメントの段階にとどまり、具体策の実施･評価が十分に展開されないと反省があったので､昨年度は実習前の課題として、夏休み中に産褥期の看護の視点であるウエルネスの問題について事前にまとめるように提示し､提出させた｡その結果､学生は母性看護技術について以前よりも積極性がみられた。看護過程の展開についても比較的対象をとらえる視点ができていた。

6）助産学概論　　３年次前期前半（04/15～07/05）　　１単位
担当：宮崎 文子、吉留 厚子

助産および助産の基本概念について、歴史的変遷から概説し、助産師の責務と社会変化の中で期待される役割の重要性について、更に助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。内容は次に示すとおりである。1.助産学の構成、2.助産の本質・意義・対象、3.助産の原理原則、4.助産の歴史とあり方、5.助産風俗、6.母子保健の動向と諸制度、7.助産師の職制と業務（諸外国と日本)、8.助産師教育（諸外国と日本)、
9.助産学を構成する理論・助産過程の基本、10.助産師と倫理、11.諸外国の助産師活動、12.ICM（国際助産師連盟）の活動、13.日本の助産師の現状と課題、14.助産学と研究。

本年度の改善点：昨年同様課題を与えレポートを課し、文献検索・思考力の訓練の強化を図った。課題は情報化時代の講義内容の精選である。

7）助産診断・技術学Ⅰ　　３年次前期後期（05/13～02/17）　　１単位
担当：林 猪都子

助産診断に基づいて、助産を実践するための基本的な知識と技術を理解するために、妊娠期、分娩期の助産診断、援助技術、保健指導について講義と演習を行った。今年度は妊娠期の確定診断、時期診断、経過診断の内容を充実させた。また、妊娠期の超音波診断ができるように、助産院で妊娠期の超音波診断の演習を行った。今までは、超音波診断は実習時の見学だけであったが、実際に超音波で測定を行い学習内容の理解が深まった。分娩期は分娩経過診断ができるために、分娩経過と児頭回旋、内診所見の関係が理解できるように骨盤模型や内診モデルを使用して講義を行った。来年度は、妊娠期の超音波診断の演習前の講義を充実させて演習に臨みたいと考えている。

8）助産診断・技術学Ⅱ　　３年次前期後期（05/13～02/18）　　１単位
担当：小西 清美、大神 純子

女性のライフサイクルで、特に更年期に関する知識が弱い（国家試験の正答率の結果）ということから、更年期の授業内容を増やし、更年期についてレポートを課した。また、新生児の異常や看護は、学生が不得手とするところなので、ビデオや絵図の多い資料を用いて講義をするとともに､実際に演習室で､出生直後の新生児の取り扱いや新生児の蘇生、

計測など全員が体験できるように教材を工夫した。また、新生児の観察が系統的にできるために、ビデオ学習および演習を実施し、助産学実習でもすぐに活用できるようにした。さらに、産褥期の退院指導内容は、すべての項目に対し保健指導が実施できるようにパンフレット作成し、それに必要な知識の資料を作成させた。次年度は効果的な教育技法を探求していきたい。

9）助産診断・技術学Ⅲ　　３年次前期後期（05/12～02/16）　１単位
担当：松本 英雄、飯田 浩一、室 康治、馬場 真澄、
豊福 一輝、宇津宮 隆史

周産期における女性の医学的管理について、国家試験の出題傾向を意識して、教科書に沿った講義が行えるように調整をした。今回、助産診断・技術学Ⅲの科目の内容で、重複している内容を整理し、新生児医療の講義項目を２コマから４コマに増やして、新生児の医療に関する知識が深まるように強化した。

10）助産診断・技術学Ⅳ　　４年次前期前半（04/15～05/11）　１単位
担当：林 猪都子、小西 清美、後藤 由美、大神 純子、
梅野 貴江

分娩期の助産診断の講義と実際の症例を用いて、入院時から分娩経過の予測と助産診断が行えるように､助産過程の展開を行い､実際に助産学実習で活用できるように教授した。「助産診断システム研究会」の助産診断の概念枠組みを用いて､時期診断､状態適応診断、経過予測診断が行えるように、看護過程の展開では臨床１事例をグループ学習で展開し、その後、臨床１事例を個人課題として取り組んだ。今年度は、助産実習記録を修正し、産褥期は経過表を使用した。

分娩介助の演習では、ストレスが最も高いとされている分娩介助の方法を体得することを目的としている。側面介助法、正面介助法の２通りの介助法を繰り返し練習させ、助産学実習に臨ませた｡その結果､実習場面では必要物品の準備や手順は適切に実施できた。

11）地域助産活動論　　４年次後期前半（10/12～11/30）　１単位
担当：宮崎 文子、小西 清美

助産管理の概念について、その本質と機能、助産管理（経営）の歴史的変遷、開業権を持つ専門職業としての概括的な知識・考え方および地域助産活動に必要な理論について教授した。改善策は、特に助産師の自立の視点から助産所の経営管理の中でマーケティング手法と財務管理に焦点を絞り事例演習を強化した。課題としては、今後は経営管理の理解を深めるためには実習との関連性を強化し、助産所実習期間（現在３日を１週間に）の延長の検討である。

12）母性看護学実習　　３年次前期後半、後期前半（09/06～11/26）　２単位
担当：大神 純子、梅野 貴恵、緒方 生久美、宮崎 文子、
吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美

母性看護学実習の実習施設は２施設である。施設毎に１グループ４～10 名の学生と 1～

２名の担当教員という組み合わせで、２週間（延べ 12 週間）の実習を行った。

実習は学生に１名の妊産褥婦を受け持つように配慮し、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開の実際を体験学習させた。問題として母性看護学実習は２週間と短期間であり約半数の学生が少子化のため正常褥婦を受け持つ事例がなく、異常妊婦を受け持つ実態である。そして、例年すべての学生が分娩見学が出来ず妊娠・分娩・産褥という経時的変化を捉えた援助技術を実践することは難しいことが問題に上げられている。本年度の実習では、ほとんどの学生が幸いにも１回は分娩見学の機会を得ることが出来た。生命誕生の場面を通して自己を振り返ることで母性看護の概念を認識できた実習となったと思われる。また母性各期の保健指導もそれぞれ工夫した取り組みが出来た。

来年度の課題として、大分県立病院産婦人科病棟が周産期センターになるため、実習方法の再検討が必要となる。

＜実習施設と学生数＞（実習延べ期間 12 週間）

(1)大分県立病院４階東病棟、産科外来（学生数 57 名）

(2)堀永産婦人科医院（学生数 24 名）

13）助産学実習　　４年次前期（06/21～09/17）８単位（総合実習２単位含む）

担当：後藤 由美、大神 純子、梅野 貴恵、宮崎 文子、

林 猪都子、吉留 厚子、小西 清美

助産学実習においては、妊娠中から産後までの家族を含めた継続的な援助および、安全で安楽な「いいお産」が出来る助産能力を身につけるための実践実習を行った。

本年度の助産学専攻学生は８名である。実習施設は、分娩状況からみて以下の５施設で学生、担当教員、専任教員の組み合わせで指導に当たった。少子化が急速に進行する現状での分娩介助 10 例程度（規定：９例以上）は助産学実習の課題である。今年度も実習期間中の分娩件数不足が予測されたため夜間実習を余儀なくした。また学生の希望実習（夏休み 20 日間）により８名が達した分娩介助件数は９例から 11 例であった。昨年の反省から産褥期の記録物の簡易化を図り、大幅な記録物提出の遅れは見られなかったが、分娩進行におけるアセスメントが弱い傾向にあり、今後の課題である。

＜実習施設と学生数＞

(1)大分県立病院４階東病棟（１学生母体搬送・帝王切開受け持ち１例含む)、

産科外来で１学生８日間、延べ２週間：学生数８名

(2)堀永産婦人科医院（６週間）１学生分娩介助９例以上・家庭訪問含）：学生数６名

(3)くまがい産婦人科医院（６週間）１学生分娩介助９例以上・家庭訪問含）：学生数２名

(4)生野助産院（１学生２日間　延べ２週間）：学生数８名

(5)友成助産院（１学生１日間　延べ８日間）：学生８名

3. 卒業研究

・妊娠期の女性における冷え症の実態と不快症状の関連

・産後１ヶ月間の家事支援に関する研究　－夫婦の家事行動と家事支援の検討－

・マタニティウオーキングが妊婦の体脂肪に与える影響

・カンガルーケア前後の対児感情および母乳栄養に関する意識の変化

・成乳における授乳および乳房マッサージ前後の中性脂肪、カルシウムの比較
・会陰障害による産後の日常生活動作への影響と持続時間
・分娩介助時の作業姿勢と緊張度の検討　－助産学生と助産師の比較－
・早期新生児への頻回タッチングが初産婦の愛着形成に及ぼす影響
　　－不安と愛着形成の関連－
・分娩介助時における助産学生および助産師のストレス反応

3－4－13 精神看護学研究室

本科目群では関連する４科目（概論、援助論、演習、実習）を一連の教育の流れと意識し、統一的に構成している。精神看護学に関する学習は、基本的知識を得る座学としての概論、援助論に始まり、臨床場面での応用を意識した演習に進み、臨床での実践を行なう実習を最終段階としている。

講義内容としては、臨床場面での実践を常に意識し、学生がイメージし易くまた問題解決の手助けとなるような具体的事例を豊富に取り入れるように努力している。

1. 教育活動の現状と課題

あらゆる領域で働く看護職に精神看護学の専門的知識・技能が求められる時代となっている。本科目群で学ぶ項目は、専門領域の一つであると同時に共通・基本領域でもある。そこで教育の目標を以下とした。

(1)学生の精神障害に対する偏見を是正する。
(2)全学生が積極的に興味と関心を持って取り組めるような活動とする。
(3)時代の流れに合うインパクトのある内容・方法を工夫し、学生が「自分の役に立つ」、「もっと学びたい」と感じて自律的に学習する契機とする。

本年度は教育の介入効果をみるために３回の簡易調査を試みた。調査結果は授業改善の資料とすると同時に、学生による授業評価の一助になると考えられる。

2. 科目の教育活動

1) 精神看護学概論　　２年次後期（10/01～12/22）　　１単位
担当：影山 隆之

本科目では、a)心の健康について理解するために活用されるモデル（考え方）、b)精神保健看護の歴史、c)精神看護のアセスメントに必要な症状と状態像の知識、d)主な精神疾患の疾病論の四部について講じた。前年度から作り始めた冊子体テキストを、改訂して開講前に配布した。テキストには、理解の助けになるような事例（文章記述）や例題を、できるだけ多く取り入れた。受講者が精神看護に興味を持ち、精神障害者に対する偏見を払拭できるよう、CD・OHC・ビデオで芸術作品や当事者の生活を提示した。毎回の講義の初めに短い発問を記した A4 または A5 の用紙を配布し、授業中に記入・回収して、その時間内に

「回答」の一部を例として取り上げ議論の材料にするとともに、翌週までに朱入れして返却することで受講者が理解不十分な点を解消する工夫とした。授業内容を精選することで時間不足の傾向はやや改善した。人間関係学で学んだ内容を学生が確実に身につけていれば「復習」の一部はさらに割愛できるので、人間関係学との連携を引き続き検討してゆく予定である。

2）精神看護援助論　　３年次前期（04/13～06/08）　　１単位
担当：河島 美枝子、影山 隆之、大賀 淳子

本科目は精神看護学概論で学んだ基本的知識を踏まえ、臨床の場により近づけた知識を、講義形式の座学として、出来る限り具体的に学んで次のステップである実習につなげる位置にある。

a）主な教育内容：

精神科医療施設をはじめとする様々な臨床の場で、精神的な問題を持つ人々に対する看護を実践するための実践的な知識である。

講義テーマ　精神看護の役割、精神看護をめぐるもの
精神看護とコミュニケーション
精神科への入院をめぐるもの
入院生活を整える援助
治療の効果を高めるための援助
症状マネジメント技術
退院に向けての援助
地域精神保健

b）教育方法の工夫：

・臨床場面での具体的なイメージを学生が持てるように、実習施設での事例や実習生の体験例を豊富に取り入れた。
・毎回、学生に中心課題に関するミニテストやレポートを課し、次回までに教員がメッセージやコメントを赤字で記入して返却した。クラス全体の教育目標の達成度の確認、個別の状況の把握、教員の教育方法の評価、および学生の理解不足点の補充、学生が示した興味・関心点の拡大を次回の講義で行なった。

c）次年度への課題

・限定された講義時間を有効に利用するための教育項目の整理と絞込み
・講義形式で可能な参加型教育の工夫
・各回に実施するミニテストやレポートによる個別指導の強化

3）精神看護学演習　　３年次前期後半（06/18～07/09）　　１単位
担当：河島 美枝子、大賀 淳子、影山 隆之

a）主な教育内容（全７回）：

・コミュニケーションについての体験的学習
・ ペーパー・ペイシェントを用いた精神看護アセスメントおよび看護計画の作成
・当事者、スタッフの皆様を招いての学習

b）教育方法の工夫：

・６～７名の学生からなるグループでの学習を行なった。

・内容に応じて、グループワークの時間と個人作業の時間を組み合わせ、あるいは教員がファシリテーターとなり、クラス全体で分かち合いの時間を持つなど柔軟な構成で進めた。

・毎回時間内に提出されたレポートは、次回までにコメントを記入して返却するとともに、多くの学生に共通する課題と思われる点について資料を作成し次の回に補足した。

c）次年度への課題

・学生に経験させたい内容には限りがない一方で時間や場所、スタッフ数の制約があるため、内容、方法の一層の工夫を要する。

4）精神看護学実習　　３年次後期前半（09/06～11/26）　　２単位

担当：河島 美枝子、影山 隆之、大賀 淳子、八代 利香、秦 桂子

a）主な教育内容および方法の工夫：

・大分丘の上病院において、３病棟（ストレスケア・思春期、急性期、療養）、及び外来・デイケア・訪問看護の各部門に学生を配置し実習を行なった。各部門での看護実践を通して、精神科医療施設での看護ならびに社会の中での精神看護の役割について実践を通して学習させた。

・今年度は昨年度に引き続き、学生自身による実習病棟の選択に加え、1.初日午後に院内でオリエンテーションを実施することによる実質0.5日の実習日数増、2.ストレスケア・思春期病棟への学生の配置、3.「院長への質問」と中間カンファレンスの実施、4.異なる病棟の実習生の組み合わせによるシャッフル･カンファレンスを実施した。

b）評価および次年度への課題

本年度の最終レポートで学生に求めた「大学、病院への要望」に記述された代表的な意見は以下であった。

・「院長への質問」（病院長が精神科医療・看護をめぐる学生の質問に直接答える時間）が貴重な学習の機会となった。

・病院の全部門で実習をしたかった（病院側の都合で、一部に外来・デイケア・訪問看護部門での実習を病棟実習に振り替えた学生があった）。

・実習期間が２週間ではあまりにも短すぎる。

3. 卒業研究

教員は研究テーマの選択･決定から論文の作成までのプロセスを、各学生の興味･関心、自主性、能力に十分配慮して支援した。以下に研究タイトルを示す。

・保健所精神科デイケア利用者の満足度と QOL に関する調査

・自殺に関する地方公務員の知識と態度

・精神科における禁煙についての看護師の意識調査

・一地区の健康づくり推進員における不眠・眠気および抑うつ症状の関連

・勤労看護学生の職業性ストレスと眠気に関する研究

本年度に引き続き次年度への課題は、限られた時間・人的資源という条件下での以下３条件の達成である。ａ）学生自身が意欲･満足感を持って取り組めるテーマの選択、ｂ）学生の自主・自律性を重んじた教育方法、ｃ）公表が可能な研究レベルの達成。

3－4－14　保健管理学研究室

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識とスキルの習得を目的として、学生自らが考え実践することを重んじた教育プログラムを組み立てている。１年次は、健康という概念を理解するとともに、講義と実習を通じて看護職者の活動する領域と各領域における対象者の多種多様な健康ニーズを学び、２年次には、保健・福祉・医療に関する諸制度・法体系の構造とその活用に必要な基本的な考え方を、３年次では、専門職に求められる行動原則としての倫理および、地域・学校・産業などの具体的な場面における保健活動の実際を学ぶとともに、演習を通して実践に必要なノウハウを体験的に習得することを目標にしている。

1. 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の内容を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容を検討している。他の講義や実習との結びつきを考えて講義・演習の内容を組み立てており、３年次の演習で、具体的な事例検討を通して実践能力を養うとともに、４年次の地域看護学実習に持参して活用できる資料の作成など、課題の構成に配慮したことはその一環である。

2. 科目の教育活動

1）健康論　　１年次前期前半（04/13/～06/08）　１単位

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、専門職として積極的に取り組む姿勢を養うための講義を行った。

担当（講義回数）と概要
草間 朋子（２）大分県立看護科学大学における教育方針、看護の視点から健康を考える
坪山 明寛（１）医療における感性とその役割
平野 亙　（３）健康の価値、健康の評価、健康づくりと健康日本 21 の展開
桜井 礼子（３）ライフサイクルと健康、生活習慣と健康、運動と健康・こころの健康
高波 利恵（１）環境と健康

木村 厚子（１）健康と栄養
宮崎 文子、河島 美枝子、粟屋 典子、高野 政子、中村 喜美子、金 順子
各専門分野における健康課題と看護職の関わり

2）保健福祉システム論　　２年次後期（10/02～12/21）　　２単位
担当：平野 亙

憲法に謳われた国民の「権利」について示し、権利を実現するための制度的保障すなわち社会保険、社会福祉、国家扶助および公衆衛生（保健・医療）を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。関連する法体系・制度は膨大だが、少子高齢化や感染症の動向など今日の社会変化に対応する項目に重点を置き、今年度からは、とくに国家試験の出題傾向に対応するよう講義内容を構成した。加えて、システム・マネジメントに必要な事業評価とリスクマネジメントやインフォームド・コンセントを中心に患者・障害者の諸権利の諸相について論じ、専門職としての判断に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

3）保健活動論　３年次前期（06/17/～07/15）、後期（11/29～12/20）　２単位

地域、学校、産業における法令に基づく保健活動のあり方と実際を教授した。看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践ができるよう演習を行った。

担当	（講義回数）	概要
草間 朋子	（２）	看護職の活動、看護職と法令
平野　亙	（２）	健康教育の進め方
桜井 礼子	（７）	災害看護活動、学校保健活動、地域保健活動（保健所・市町村）
高波 利恵	（２）	産業保健活動
遠藤 俊子	（２）	産業保健活動の実際
大神 貴史	（２）	保健所の役割と活動の実際
日本赤十字社	（４）	救急救命処置の基礎（講義１、実技３）

4）看護の倫理　　３年次前期前半（04/16～05/14）　　１単位
担当：平野　亙、大林 雅之

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的に、５時限の講義と３時限の事例演習を行った。
講義は、「Bioethics・新しい医療倫理の展開」「生命倫理の方法」の２回を大林、「Professionと倫理」・「患者の権利」・「看護職の責任と倫理規定」の３回を平野が担当した。事例演習は、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに、志願者を募って９題の発表・討議を行った。事例の発表者についてはグループ・レポート、その他の学生については課題に対する個人レポートにより成績評価を行った。

5）保健看護学演習　　３年次後期後半（01/13～02/28）　　１単位
担当：草間 朋子、平野　亙、桜井 礼子、高波 利恵、
木村 厚子

保健活動の領域で実際に直面する可能性のある事例に対して、グループワークを通して、さまざまな視点から問題解決にいたる筋道を検討するとともに、プレゼンテーションと議論の訓練を行うことを目的とした。産業、学校、地域の領域における保健活動、対象者支援の企画･実践･評価に関して、国試状況問題も視野に入れた状況設定事例を 12 題提示し、１グループ６～７名の 12 グループを編成、各グループが個々に課題に取り組んだ。グループ・ワークにより、各課題に示された設問に対するレポートを作成し、さらに発表会でプレゼンテーションを実施した。また 12 グループのうち２グループは、健康教育のロール・プレイを行った。発表を通して、問題解決方法の多様性、視点の違いなどを議論した。評価は、問題解決のための能力ばかりでなく、議論への参加態度にも着目した。

6）初期体験実習 Early Exposure　１年次前期後半（07/12～07/20）　１単位
担当：赤司 千波、安部 恭子、井上 和美、大賀 淳子、大津 佐知江、大村 由紀美、
木村 厚子、工藤 節美、小林 みどり、桜井 礼子、秦　桂子、高波 利恵、
高橋 ゆか、玉井 保子、時松 紀子、姫野 稔子、福田 広美、松尾 恭子、
山下 早苗、八代 利香、平野 亙、草間 朋子

看護職の活動する保健・医療・福祉の場において、３日間の施設実習で看護活動の実践を体験し、対象の健康ニーズと看護職の活動を知ること、看護職と協働する他の専門職の役割や人々の健康を支えるためのシステムを知ること、さらに学内カンファレンスを通して、異なる施設での実習体験を共有することで人々の多様な健康ニーズを知り、人々の健康を支えるための看護職の役割を知ることを目的とした。

実習施設：
事業所：株式会社大分銀行、新日本製鐵株式会社大分製鐵所、
九州電力株式会社大分支店、昭和電工株式会社大分事業所健康管理センター
保健福祉施設：大分県精神保健福祉センター
検診センター：大分県地域保健支援センター、大分県地域成人病検診センター
学校：大分大学教育福祉科学部附属養護学校
病院：大分県立病院、大分赤十字病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、
湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、緑ヶ丘保養園
介護老人保健施設：わさだケアセンター、陽光苑、健寿荘
特別養護老人ホーム 百華苑
市町村：大分市、野津原町

3. 卒業研究
・多発する可能性のあるインシデントへの組織的な対応と看護師の意識に関する実態調査
・高齢者の体脂肪率の簡易的な測定法に関する検討
・高齢者の基本健康診査における貧血検査の必要性の検討

・大腿の筋力を高めるための継続可能なトレーニング方法の検討
　　－日常生活の中で容易に実施可能な内転筋の強化方法－
・看護師の診療放射線業務への関わりの程度とそれに対応するために求められる知識
・高齢者の全身持久力の指標としての３分間足踏み歩行の検討
・高齢者の健康に対する認識度を高めるためのノートＰＣの活用に関する研究

3－4－15　地域看護学研究室

個人、集団、地域へと視点を広げ、地域を包括的に捉えた看護活動を行うために必要な基本的な考え方、援助方法を身につけることを目的に、地域看護学概論、在宅看護論、家族看護学概論、地域生活援助論Ⅰ、地域生活援助論Ⅱ、地域看護学実習の科目を設けている。特に、講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習内容や実習方法等を工夫している。

1. 教育活動の現状と課題

実習の場において、個人、集団、地域を対象とした看護展開ができるよう、学内演習では、実習場面を意識した課題を取り入れている。例えば、実習直前の演習では、地域の健康問題を踏まえた活動内容を理解できるよう、実際の実習地域の既存資料をもとに、地域看護診断を行った。また、個人を対象とした援助では、ペーパーペイシェントを用いた看護過程の展開、家庭訪問場面におけるロールプレイ、入浴、移動の基本的技術を取り入れ、地域における看護活動の視点や、具体的な援助技術について理解できるよう工夫した。今後は、社会や地域の動向も踏まえ、演習内容、形態を吟味する必要がある。

2. 科目の教育活動

1）地域看護学概論　　２年次後期前半（10/05～11/30）　　１単位
担当：中村 喜美子、工藤 節美

地域における個人や家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視した地域看護学の基本的事項について講義した。主な内容としては、地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人と家族、集団と地域）、大分県の地域看護活動、地域看護の変遷である。学生が、個人、集団、地域へと視点を広げるための工夫として、現在、生活している大分県における地域看護活動の具体的な紹介やビデオを活用し、地域看護活動のイメージづくりを行った。

2）在宅看護論　　３年次後期後半（11/30～12/22）　　１単位
担当：中村 喜美子、工藤 節美、秦 桂子、時松 紀子、
大村 由紀美、河野 智美

疾病や障害をもち地域で生活する人々に看護を行うために、在宅看護の基本的な考え方

と援助方法について講義と演習を行った。主な内容としては、在宅看護の概念、在宅看護の活動の場と特性、社会資源の種類と活用、ケアマネジメント、公的介護保険制度におけるケアマネジメント、訪問看護ステーションにおける事業経営、生活支援の方法、医療依存度の高い人のケア、在宅終末期ケア、在宅看護過程（演習）である。在宅看護過程の演習では、グループワークの方法を用いて、自宅で療養生活を行っている療養者の事例（ペーパーペイシェント）に対する具体的な看護計画を立案した。さらに、在宅看護の実際を理解できるように、地域で訪問看護活動を行っている看護師を講師として招き、大分県における訪問看護活動の実際や訪問看護ステーションの事業経営について講義を取り入れた。

3）家族看護学概論　　３年次前期前半（04/12～05/10）　１単位
担当：中村 喜美子、工藤 節美

家族が健康的なライフスタイルを獲得することや、健康問題を主体的に解決していくために、家族のセルフケア機能を見直し、家族にどのような看護援助が必要であるかについて講義と演習を行った。主な内容としては、家族看護学の概念、家族の構造と機能、家族を理解するための諸理論、家族看護過程、家族看護における看護職の役割である。

特に、演習では「家族を一つのユニット」として捉え、看護を展開するためにカルガリー家族アセスメント・介入モデルを活用して学びを深めさせた。

4）地域生活援助論Ⅰ　　３年次後期後半（01/08～02/26）　２単位
担当：中村 喜美子、工藤 節美、秦 桂子、時松 紀子、 大村 由紀美、江藤 清子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習を行った。主な内容としては、地域看護活動の展開、健康相談と家庭訪問、対象別地域看護活動、母子保健活動、成人保健活動、障害者保健活動、高齢者保健活動、地域精神保健活動、感染症保健活動、難病保健活動、地区組織化活動における保健師の役割、災害看護活動、市町村の保健師活動である。特に、地域看護活動の展開の演習では、架空の町の事例をもとに地域看護診断を行うことにより、既存資料の分析、地域の健康問題の抽出、生活する場としての地域の捉え方を学ばせた。感染症保健活動では、ペーパーペイシェントを用いた看護過程の展開を行い、問題解決のための具体的な支援方法について学びが深まるよう工夫した。さらに、各演習のまとめを行い学生に演習内容の評価をフィードバックすることで、地域看護学実習に向けた自己学習につながるよう配慮した。

また、市町村の保健師活動では県内の町保健師を講師として招き、町における地域看護活動の実際について講義を取り入れ、具体的な活動をイメージし、学びを深めさせた。

5）地域生活援助論Ⅱ　　４年次前期前半（04/13～04/27）　１単位
担当：中村 喜美子、工藤 節美、秦 桂子、時松 紀子、大村 由紀美

地域看護学実習前の演習として位置づけ、既存資料を用い実習地域の地域看護診断、家庭訪問におけるバイタルサイン測定、移動・入浴援助の実技、ペーパーペイシェントを用

いた看護過程の展開を行った。各々の演習では、グループワークを中心として担当教員が巡回し、きめ細かな指導を行った。

6）地域看護学実習　　４年次前期（05/17～06/18）　　４単位

担当：安部 恭子、井上 和美、大賀 淳子、大村 由紀美、木村 厚子、工藤 節美、小林 みどり、桜井 礼子、秦 桂子、高波 利恵、高橋 ゆか、玉井 保子、時松 紀子、姫野 稔子、八代 利香、山下 早苗、中村 喜美子、平野 亙

大分県下全域の保健所及び支所14、市町村39、訪問看護ステーション29の施設で、それぞれ１～２週間の実習を同一保健所管内において行った。学生をそれぞれの施設に２～４名配置し、施設の看護職が臨地での直接的な指導を行い、担当教員は各施設を巡回して、カンファレンス指導や実習施設との調整を行った。実習内容は、訪問看護ステーションと市町村ではそれぞれ少なくとも１名の訪問指導、また市町村では地区視診と集団を対象とした健康教育を必ず体験することとした。

3. 卒業研究

・在宅脳血管疾患患者を介護する高齢主介護者の心理的負担感に関する研究
・HIV/AIDS教育に関する文献的検討
・居宅支援における介護支援専門員による介護サービス計画作成上の工夫
　－文献的検討－
・痴呆高齢者と寝たきり高齢者の主介護者が感じる介護負担感の相違
・文献からみた医療機関糖尿病教室における患者教育のプログラム
　－生活習慣改善に向けて－
・女子大学生における喫煙の動機と実態
・在宅高齢者の療養生活における「たのしみ」とその構成要素

3－4－16　国際看護学研究室

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, develop an understanding of global health issues and strategies; realize roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context; the impact of international aids and cooperation during war and disaster and develop fluency in the use of global health and nursing terms.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out. Two elective courses for post-graduate students, one each for master’s and doctorate, are open.

1. 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities:
Texts, presentations and Q and A are carried out in English.

To promote the understandings, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual presentations, followed by tests on the previous texts one week after each presentation.

English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study;
For the Seminar, detailed-orientation programs; on the themes of self-studies, references, method of presentations, and locus of group-studies were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-studies and choice of the themes are assigned to the students, for the autonomy of the class-leader.

Students are reluctant and passive in participation in the classroom activities, even in question and answer are limited to the ones assigned by the faculty. Active and autonomous participation by the students are to be promoted.

Evaluation of the courses by the students;
Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

Junior students, though very small percentage, demanded that the faculty to be proficient in Japanese and present the contents with Japanese explanations. This notion is to be taken for serious consideration.

2. 科目の教育活動

1) **International Nursing I, Introduction** ２年次後期（10/05～11/30） １単位
担当：Kim Soon Ja, Professor, Yatsushiro Rika, Assistant Professor

Objectives and contents;
1. to develop an understanding of the concept of, and, to define international health and international nursing.

2. to describe the background, course and trends of international cooperation in, and globalization of, health care.
3. to understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4. to develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5. to develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents ;

1. Orientation to the course, International Health Quiz (Basch)
2. International health and international nursing
3. International cooperation and Globalization in health and nursing
4. Global health issues, challenges and strategies; communicable diseases
5. Global health issues, challenges and strategies; NCDs, Injuries
6. International Health Networks; World Health Organization
7. International nursing networks; International Council of Nurses
8. Wrap-up, evaluation of the Course

2) **International Nursing II, Comparison** ３年次後期 (01/17～02/28) １単位

担当：Kim Soon Ja, Professor, Yatsushiro Rika, Assistant Professor

Objectives:

1. to develop an understanding of the context, scope and approaches of international health and international nursing.
2. to develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. to develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. to develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents ;

1. Orientation to the course
2. Global health issues, challenges and strategies; review and summary
3. Human resources; planning and development for global health and nursing
4. International relief organizations; activities during war and disasters
5. Culture, Health and Nursing
6. Global Nursing Workforce; status, issues and strategies (10/30)
7. Global Nursing Workforce; status, issues and strategies (10/30)
8. Wrap-up, evaluation of the course

Evaluation;
Written test on the course content.
Written Reports submitted by the students of the 6th International Nursing Forum

3) International Nursing Seminar　　３年次後期 (01/11～02/22)　１単位
担当：Kim Soon Ja, Professor, Yatsushiro Rika, Assistant Professor

Objectives of the Course:
1. to develop an understanding of the concept, context, scope and approaches of international health/nursing in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. to develop understanding of the system of, and the need for planning and development of the human resources for global health.
3. to develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networking and the impact of international aids during war and disaster.

Activities:

Orientation to the course activities includes;
Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themesof the group studies and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard aid and equipment for the study and presentation.

Group-works / studies:
Carried out by students; grouped into 4-5, according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;
Ⅰ. Health issues and strategies; of a population group
Ⅱ. Health issues and strategies; of a nation, a group of nations
Ⅲ. Human resources for health or/and nursing of a nation / group of nations
Ⅳ. Impact and context of aids of JICA

Evaluation;
Group-work; contents (reports), participation, presentations in the class room (verbal, visual aids)

3. 卒業研究
・中学校における性教育　－日本・韓国・中国の比較－
・在日留学生の健康認識と健康行動

3-5　共通科目

1）自然科学の基礎　　１年次前期　(04/15～09/29)　　２単位

自然科学の基礎として何が求められているかを理解させ、学ぶべきポイントを教授することを目的として行っている。人間科学講座の教員（甲斐、品川、吉田、定金、石塚、佐伯、中山）で分担して行った。講義内容は次の通りである。(1)20 世紀の自然観革命、(2)なぜ、天気予報の単位は変わったか（SI 単位系）、(3)熱と圧力、(4)情報とは何か、(5)化学の基礎、(6)有機化合物の構造、(7)有機化合物の反応性-1、(8)有機化合物の反応性-2、(9)生命の誕生と遺伝子の起源、(10)生物の多様性と進化、(11)体細胞分裂と DNA の複製、(12)配偶子形成と個体発生、(13)確率の基本-1、(14)確率の基本-2、(15)数学における 2 つの重要な記号、(16)微分・積分法の話

2）健康科学実験　　２年次後期　　１単位

本健康科学実験では、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的として、以下の１０テーマからなる実験を行った。

1. 組織学実習　　実験日：10/15, 10/22, 10/27, 11/12
担当：岩崎 香子、高橋 敬

実験内容：組織学実習は光学顕微鏡（オリンパス CH30）をもちいて、ネズミやヒトの様々な組織切片を観察させスケッチさせた。切片ではあるが、それがかっては生体の組織や器官の一部として、どのようになりたって、どのように機能していたかに思いや考えを促すように注意した。また顕微鏡を使用するにあたり、その基本的な成り立ちと使用方法を説明し会得してもらった。とくにアナログ画像とデジタル画像の違いの理解を得るための適切な解説を今年度はさらに追加し実習書を書き換えた。パソコンを実習室に設置し、写真入りの解剖テクストをデモンストレーションした。スケッチすることは特に重要であり、観察した各部位の名前を参考書で調べさせた。これにより、ミクロな構造とそれに課せられた機能を実体験から修得できるだけでなく、観察を通してより深い理解と感動が得られた。すなわち、ミクロの世界を微細に観察することにより、小さな構造が集合することにより、大きな機能を果たしていると言う理解が得られるように注意した。尺度はマイクロメータを用いて計測させ、同じ対象でも倍率を変えることによりさらに詳細な観察ができることを体験させた。

2. 血液生化学実験　　実験日：10/6, 10/7, 10/8, 10/13
担当：安部 眞佐子

実験内容：まず、生化学で用いる基本的な器具の使い方を指導した。次いで、マウス血清中のグルコース濃度をグルコースオキシダーゼ法によって測定した。既知の標準物質の濃度と比較して未知の濃度を測定することを説明した。また、同じ測定原理に基づく自己血糖測定器で自分の血糖を測定した。自己血糖測定器の使い方、血液の付着物の処理法などを説明し、血糖の変動要因についてグラフを用いて講義した。別に、マウス血清トランス

アミナーゼを測定した。同時に、臓器ホモジネートの作り方を説明し、臓器ホモジネート中の酵素活性を測定し、どのような臓器に由来する可能性があるかについて学生が測定して確かめた。これらの酵素が高くなる病態を説明し、また、マウスとヒトの臓器分布の違いをレポートにまとめた。さらに、血清タンパク質の分離を行った。感染性の危険の無いマウスの血清を電気泳動に依って分離し、染色液で染めて可視化し、アルブミンとグロブリンの違いについて、説明した。また、血清タンパク質の概略や、いろいろな病態でパターンが変動することについて解説した。

3. 血液検査　　実験日：11/10, 11/17, 11/19, 11/24
担当: 定金 香里、市瀬 孝道

実験内容：ヘマトクリット値、赤・白血球数の測定を行った。CRP 検査では原理を学び、感染症の有無を調べた。塗抹標本を作製し、染色後、8 種類の血球をスケッチした。これら検査の手技は、学生一人一人が行った。またデータから貧血に関する考察を行った。工夫した点:検査項目ごとに、最も簡便で精度の高い手技を選び、教員がまず実技を行った。過去の事例から学生が間違えやすい手技については特に丁寧に指導した。図、写真、見本試料を各検査でそれぞれ用意し、学生全てが手技を理解し、容易に実施できるようにした。血球のスケッチでは、各血球の見本をスケッチするのではなく、学生が標本の中から好酸球やリンパ球などを自分自身で見つけるようにしている。そのため、血球の特徴を詳しくわかりやすく説明している。

4. 基礎微生物学実習　　実験日：10/13, 10/14, 10/15, 10/27, 10/28, 10/29
担当：吉田 成一

実験内容：環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

5. ラットの解剖　　実験日：10/6, 10/8, 10/14, 10/15
担当：市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

実験内容:ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。本年度の改善点としては、スムーズに解剖が進行するように、デモンストレーション時に解剖法を十分に説明した。工夫した点としては脈管系の図を白版に詳しく描き、実物と比較理解させた。

6. 放射線　　実施日：10/22、10/29、11/5、11/12
担当：小嶋 光明　甲斐 倫明

実験内容：我々は常に身の回りに存在する放射線源から微量の放射線を被ばくしている。

そこで、本実験ではバックグラウンド放射線の測定を通して、身の回りの放射線源の存在およびこれによる被ばく線量の程度を学んだ。また、医療の現場で一般的に用いられている移動型X線装置使用時の装置周辺の線量率測定を行い、医療現場での放射線防護のあり方について考察した。

7. 水質汚染と室内空気汚染　実施日：10/22, 10/27, 10/28, 10/29
担当：甲斐 倫明

実験内容：水道水中の残留塩素濃度、河川水（大分川）および生活排水の COD を測定することで水の環境汚染について理解することを目的とした。室内汚染としては、人間の嗅覚を用いた空気質評価を取り入れ、三点比較式臭袋法によってニオイによって汚染の程度を判定する測定を行った。室内汚染測定を通して発生源の理解とシックハウス症候群などの身近な環境問題との関連がわかるような工夫をし た。

8. 染色体異常　実施日：12/3, 12/8, 12/10, 12/17
担当：伴 信彦

実験内容：放射線によって誘発した染色体異常の標本を検鏡し、染色体の構造的異常について学んだ。また、ダウン症の核型分析と慢性骨髄性白血病細胞の標本写真の観察を通して、疾病と染色体異常の関係について考察した。レポートの考察課題を通して、遺伝子変異や染色体異常が原因となっている疾患について広く学ぶ機会となるよう配慮した。

9. 最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定
実験日：11/15, 11/19, 11/26, 12/1
担当：稲垣 敦

実験内容:自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、最大酸素摂取量および PWC170 を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被験者と検者の両方を経験できるようにした。また、テキストに加えて、レポートを一人で作成できるように説明を加えたレポート用紙を準備した。運動指導を想定して、指導者として注意すべき点を含めて説明した。実施にあたっては、学生の年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。

10. 筋電図による神経・筋活動評価　実験日：10/13, 10/20, 11/10, 12/15
担当：吉武 康栄

実験内容：筋電図の発生機序・意義を学習した．その後，最大下負荷運動中に主働筋である大腿４頭筋（外側広筋）から実際に筋電図を測定し，筋電図振幅値変化と運動負荷の関係から神経筋疲労閾値を評価した．さらに，将来の卒論執筆を念頭に入れ，提出レポートは科学的（論理的）に書くように例を示しながら指導した

3）総合人間学　４年次後期　(10/04～12/13)　２単位
担当：粟屋 典子（学部長）

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師のものの見方や考え方を通して、人間

として、また医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。
なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を出して参加を促している。本年度の学外からの参加者は延べ 294 名であった。講師とテーマは以下の通りである。

見藤 隆子　（前長野県看護大学 学長）：看護政策と展望
嶋津 義久　（大分県医師会 会長）：医学医療の潮流
東保 みづ枝　（大分県中央児童相談所 所長）：児童虐待への対応の最前線
小玉 香津子　（聖母大学 教授）：看護を問う
釘宮 史子　（大分エアビジネス学院）：看護職の接遇マナー
石川 公一　（大分県副知事）：医療と情報管理
陶山 博生　（大分地方裁判所・家庭裁判所 所長）：新たな時代の司法制度について
中村 多美子　（リブラ法律事務所 弁護士）：「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」について
柴本 崇行　（カリフォルニア大学デイビス校　学部長）：アロマの生理作用

3）総合実習（第５段階）　４年次前期後半(06/28～07/09)　２単位
担当：粟屋 典子（学部長）

本科目は実習教育の最終段階に位置づけられており、学生の自律性と総合的な判断力を育成することをねらいとしている。学生は第４段階までの実習体験から各自の到達度を踏まえて課題を明らかにし、自らが希望する実習施設と領域を選択する。各施設（部署）には原則として学生１名の配置とし、自ら実習目標・計画を立て、主体的に実習を展開する。

総合実習の具体的な準備については、教育・実習小委員会所管の総合実習 WG が担当した。実際の実習では看護系教員全員が学生を分担して、数ヶ月前から実習目標・計画立案の過程で個別的に指導・助言を行った。実習の状況については学生に同伴はしないが、施設側との情報交換を十分に行い、学生の実習目標達成を援助した。実習は大分県内の 39 施設で行った。

３－６　大学院の教育活動

3－6－1　博士（前期）課程

1）看護アセスメント特論　１年次前期後半（08/20～08/22）　２単位
担当：内布 敦子　伊東 朋子　高野 政子　藤内 美保

３日間、１日５コマの集中講義とした。前半は看護アセスメント特論の講義をし、看護ヘルスアセスメント、看護と判断、症状マネジメントなどを取り入れている。またフィジカルアセスメントイグザミネーションを実習室で行ったり、看護ヘルスアセスメントを戦略とするモデル開発に関するグループワークおよび発表を実施した。今後も院生の能力を発揮できる授業方法を工夫していきたい。

2）看護管理学特論　　１年次前期（06/15～09/28）　　２単位

担当：粟屋 典子、小林 三津子、平野 亙

看護に関連した法制度、施設における看護管理の基本的理論、看護業務の安全管理、看護職の専門性と倫理責任、看護に関連した諸問題の解決に必要な基本的事項などについて教授した。

3）精神保健学特論　　１年次前期（04/21～06/09）　　２単位

担当：河島 美枝子、影山 隆之、大賀 淳子

a）主な教育内容

・産業精神保健（Occupational Mental Health）分野：産業精神保健の変遷と現代的課題、職場とストレス、職場と精神障害（職場での問題化、職場と自殺、疾病性と事例性、労災認定）、職場の精神障害への対策（事業場における労働者のこころの健康づくりのための指針、労災認定、事業所における対策）

・精神看護学の調査方法：評価尺度、疫学的診断基準、調査計画、実験計画

・精神科看護分野：精神科看護における事故とリスクマネジメント、精神科看護師が苦手と感じやすい疾患、地域精神保健（バンクーバー）、コメディカルスタッフとしての知識

b）教育方法の工夫：

受講生の興味・関心・希望を中心に内容を選択し、内容により、知識を伝達する講義型教育、学生との対話型、教員がファシリテーターとなるグループワーク型など適宜、少数教育の利点を生かした教育方法を実施した。内容も随時、拡大・発展させた。

c）評価および次年度への課題

看護以外の領域を専門とする院生も混じる受講生に、興味と関心を持ち積極的に幅広い分野にわたる精神看護学の最新専門知識を学習してもらうことが出来た。次年度も時代の流れに即した内容・方法の導入に努めたい。

4）成人・老人看護学特論　　１年次後期前半（10/06～11/24）　２単位

担当：赤司 千波

成人・老人を対象にした原著論文講読、課題発表等を通して、老年看護学と他領域との関係や成人・老人期の発達課題・健康問題への理解を深めるために教授した。

5）生殖看護学特論　　１年次後期前半（10／07～11／25）　　２単位

担当：宮﨑 文子、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美

今年度は夜間を中心に行った。課題は「性教育」を取り上げ、性教育概論、基本的人権としての性、ライフステージに見る性の健康問題と看護について教授した。また、性教育先進国スエーデンの性と性教育について取りあげ、テキストの抄読をし、日本との比較においてディスカッションを行い理解を深めた。更に、今年度は思春期の性教育について、実際に性教育の指導案を作成し、許可を得た学校の小学生・中学生を対象に実施し、評価を行い実践力を身につけることをねらいとした。

6) 地域看護学特論　　１年次前期後半（06/17～09/30）　　２単位

担当：中村 喜美子、工藤 節美

前半は、ヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域看護の場や活動対象の捉え方、地域看護活動と法・施策との関連等を中心に講義を行った。後半は、地域看護活動を行う際に重要となる健康情報の整理、分析方法について教授した。また、受講生は昼間それぞれのフィルードで実務に就いていたので、実務と地域看護学との関連性の理解を促すために個人やグループ毎のレポート作成、成果発表の時間を設けた。

今後も受講生の背景や研究テーマをふまえた上で、受講者のニーズにそった講義内容や授業方法の工夫等を行っていきたい。

7)International Nursing, Advanced I 後期（12/02～02/24）　　２単位

担当：Kim Soon Ja, Professor,
Sakurai Reiko, Associate Professor,
Yatsushiro Rika, Assistant Professor

Objectives;

1. to describe the issues and the strategies of health and nursing of nations/group of nations.
2. to describe the system of the human resources for health and nursing practice.
3. to develop an understanding of the impact and the context of aids of Japanese International Cooperation Agency in the developing countries.

Scheduled Activities:

1. Orientation to the course, International Health and International Nursing
2. International Cooperation and globalization in Health
3. International Net-works in Health (WHO)
4. International Net-works in Nursing (ICN)
5. Global health; Issues and Strategies
6. Human Resources in Nursing; trends and issues
7. Impact & context of aids of Relief Organizations; Japanese International Cooperation Agency
8. Impact & context of aids of Relief Organizations; International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies
9. Issues of Nursing Education in Central Asia
10. Global health; Issues and Strategies; a group of population; self-study
11. Global Health: Issues and strategies; a nation, group of nations; self-study
12. Health & Nursing Work-force of a nation/group of nations; self-study
13. Impact & context of aids of Relief Organizations：self-study
14. Presentations and discussions on Theme Ⅰ
15. Presentations and discussions on Theme Ⅰ

16. Presentation and Discussions: Theme Ⅱ
17. Presentation and Discussions: Theme Ⅲ
18. Wrap-up

Themes for the Self-studies and Presentations;
Theme Ⅰ: Strategic Plan; a specific health issue, a population group, a nation / a group of nations
Theme Ⅱ: Health/nursing Workforce; issues and strategies of a group, a nation / a group of nations
Theme Ⅲ: Impact and context of aids of relief organizations of a nation, a group of nations

Evaluation:
Participation: presentation and discussion.
Term paper submitted by each student; deadline of paper submission Feb. 28, 2005.

8) 放射線保健学特論　　１年次前期前半　　２単位
担当：草間 朋子、甲斐 倫明、伴 信彦

放射線保健学に係わるトピックスを中心に講義を行ったが、随時、基本的な事項を補足して理解を深めるように配慮した。内容は次の通りである。(1)放射線の物理と利用、(2)放射線の健康影響、(3)放射線従事者の健康診断、(4)労災補償、(5)妊娠と放射線、(6)緊急医療と防災、(7)医療放射線のリスクベネフィット

9) 生体機能学特論　　１・２年次前期後半(06/14～09/27)　２単位
担当：高橋 敬、安部 真佐子

修士２年度の院生の研究に関しては研究過程の検討と発表に関する検討を行った。特に「乳腺組織のリモデリング」について文献考察を行った。

10) 病態機能学特論　　１年次前期（06/14～09/30）　　２単位
担当：市瀬 孝道、吉田 成一

生体の防御システムについて、特に免疫やアレルギーのメカニズムについて詳しく講義した。また、看護研究の中の実験的研究の進め方について講義し、生体反応学研究室で行われている研究成果を紹介し、研究を行う意義について理解させた。また、実際に組織切片サンプルの顕微鏡観察等を取り入れて病態や様々な事象を理解させる講義も行った。

11) 健康増進科学特論　　１・２年次前期後半（10/05～11/30）１単位
担当：稲垣 敦

健康増進科学を進める上で基本的な指標の解説と測定実習をおこない、レポートを作成した。来年度は行動変容理論に基づいた健康増進理論の内容を充実させたい。

12）人間関係学特論　　１・２年次後期後半(12/01～02/09)　２単位

担当：関根 剛、吉村 匠平

前半部分では、医療現場における患者理解のための精神・身体症状の心理アセスメント法、及び効果的な心理的援助方法を系統的に教授した。後半では、受講者が各自の問題意識に沿ったテーマを設定し（愛着、トラウマ、交流分析など）、文献講読およびプレゼンテーションを行った。講義全体を通して、受講者各自のフィールドにおける人間関係に関する問題についてディスカッションする時間を設けた。

13）保健情報学特論　　１・２年次前期前半(04/16～06/11)　２単位

担当：佐伯 圭一郎

次のようなテーマについて、文献の輪読およびディスカッション、演習をセットにして実施し、看護実践に必要とされる高度な情報処理、情報管理の知識と技能を教授した。テーマは、サンプルサイズ設計、尺度(Scale)の作成と検討、メタアナリシス、多変量解析（因子分析、パス解析など)、統計ソフトウェア、コンピュータの管理・運用（ハード、ソフト、ネットワーク）などである。

履修者の基礎的な情報処理能力のばらつきと研究テーマの広がりに、必ずしも十分に対応できたとはいえず、大学院教育における必須の教育内容と個別性に応じたさらに高度な内容をどのように組み合わせて講義を進行させるかが課題である。

14）広域看護学演習　　担当：金 順子、草間 朋子、中村 喜美子

チュートリアル方式で、指導教官と学生で綿密に文献検討・原著講読を行った。

15）発達看護学演習　　担当：宮崎 文子、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美

修士論文テーマについて指導教官と学生で文献検討、原書講読を行った

2. 特別研究

1）大津 佐知江

・患者満足度による看護ケアの評価方法に関する検討

－インスリン療法導入患者に対する教育に着目して－

主指導教員：粟屋 典子、副指導教員：平野 瓦、佐伯 圭一郎

2）小野 愛奈

・看護業務前後の看護師の精神的ストレスの多面的評価

－唾液中コルチゾール・クロモグラニン A と POMS、血圧を用いて－

主指導教員：河島 美枝子、副指導教員：稲垣 敦、吉田 成一

3）福田 広美
・運動負荷による疲労と血液中・尿中サイトカインの発現との関係
主指導教員：草間 朋子、副指導教員：高橋 敬、吉留 厚子

4）渡部 綾
・育児不安をもつ母親への保健師の効果的介入について
－家庭訪問における初期の関わりに着目して－
主指導教員：草間 朋子、副指導教員：工藤 節美、関根 剛

3－6－2 博士（後期）課程

専攻領域の授業科目では、自ら考え能動的に学習するチュートリアル方式を取り入れ、国内外の文献を抄読し、問題解決のための新たな研究課題、研究方法を探究させている。また、個々の履修者の抱える研究課題に対応した高度な統計解析，情報処理の技法を講義・演習を交えた形で，個別の教育を行っている。現状では，個別に対応することで教育内容を取捨選択しているが，基本的な部分と個別性について整理し，標準的なプログラムを構築することをすすめている。

３－７ ボランティア活動

1）自閉症療育連続セミナー・保育ボランティア
参加者：２年次生：小野 美由紀、小野 里奈、葛巻 亜希子、坂口 友香、沼田 幸恵、野口 直美、水町 直美、屋比久 加奈子、山口 智治
１年次生：佐藤 優、吉永 礼香、渡邉 裕美
大分県自閉症児・者親の会が主催する「自閉症療育連続セミナー 自閉症児・者、保護者のためのTEACCHプログラム」（独立行政法人福祉医療機構助成事業）にボランティアとして参加した。平成16年５月22日、６月19日、７月３日、８月18日、10月23日および12月５日の６回、各日約４時間のレスパイト・ケアに従事した。

2）自閉症児療育キャンプ
参加者：平野 亙、４年次生：石川 沙也、酒見 博之、高木 英莉、高橋 久美子、平春 亜希子、室井 美樹、森口 徳子
３年次生：黒木 七瀬、山本 梓里、吉田 裕美
２年次生：小野 美由紀、小野 里奈、葛巻 亜希子、坂口 友香、手嶋 彬、沼田 幸恵、野口 直美、山口 智治
１年次生：佐藤 優、吉永 礼香、渡邉 裕美

大分県自閉症児・者親の会が主催する年少児の療育キャンプに参加した。この療育キャンプは大分市「のつはる少年自然の家」において平成 16 年８月 21 日（土）・22 日（日）の１泊２日で行われ、学生は自閉症児およびきょうだい児とペアを組み、食事介助、遊戯療法やレクリエーションに取り組みながらそれぞれの児童の持つ障害の特性を理解し、保護者が学習会に参加する時間帯にはレスパイト・ケアを行ってキャンプの運営を支えた。

3）平成 16 年度　糖尿病患者会：豊友会試食会

参加者：伊東 朋子、小野 美喜

２年次生：赤池 直美、内山 美紅、大塚 未紀、小野 美由紀、加藤 沙弥香、
門田 美穂、河野 未来、北住 京子、葛巻 亜希子、小林 由佳、坂口 有香、
城下 智世、永野 祐子、野口 直美、林友 里恵、外薗 菜緒、牧 美穂、
森田 由貴、屋比久 加奈子

糖尿病患者の自助グループである豊友会は、食事療法を継続していくことを目的に毎年試食会を開催している。今年も平成 17 年２月 24 日に大分県立病院で実施され、学生ボランティア 19 名が参加した。学生は、大分県立病院の山口康平医師や栄養士の指導のもと、前日の学習会から準備に携わり試食会に臨んだ。当日は、患者会の方々とマンツーマンでコミュニケーションをとるとともに、自らの知識を活かしながら、食事の単位計算・食品選び・試食のサポートを行った。

4)「糖尿病サマーキャンプ」、「こどもの健康週間」

報告者：高野 政子

(1) 第 20 回糖尿病サマーキャンプ

平成16年８月７日から12日にかけて国東半島国見ユースホステルにおいて開催され、２年次生　大串 早月、３年次生　宇土 奈緒、白石 玲奈が参加し活動をサポートした。

(2) こどもの健康週間

平成 16 年 10 月 11 日（月）高尾山公園において開催され、下記の学生 10 名が参加し活動をサポートした。

１年次生　森崎 美紀
２年次生　赤池 直美、飯田 由紀美、葛巻 亜希子、屋比久 加奈子、小林 由佳
３年次生　吉野 辰亮
４年次生　真鍋 美貴、森口 徳子、高木 英莉

5）神経難病研究会

神経難病研究会では主として日本ＡＬＳ協会大分県支部、大分県難病連でのボランティアをおこなっている。平成16年に行った日程と内容を以下に示す。

平成16年５月30日（日）：社会福祉法人博愛会主催の博愛交歓会に介助ボランティア

平成16年６月13日（日）：日本ＡＬＳ協会大分県支部第10回総会の手伝い

平成16年11月６日（土）：若葉祭で日本ＡＬＳ協会大分県支部メンバー作成品の販売

4　学内セミナー

４－１　英語多読教材貸し出し

この企画は、本学教職員の自己研鑽を目的として、英語多読教材を教職員に貸し出すもので、本学言語学研究室の宮内講師が中心となって行っている。英語を母語とする児童・生徒用に作られた児童書や、英語を外国語として学習している人のために語彙数、総語数、文法内容を厳選した多読教材(Graded Readers)を、自分の好みや技量に合わせて選び、読んでいくものである。読みやすい本を大量に読むことにより、英語への抵抗感や苦手意識を軽減し、同時に英文処理スピードと英語運用能力の向上を期待する。「楽しむ」ことを基本にしており、学習動機の長期維持が可能である。目標は総読書量 100 万語を超えること、辞書なしでペーパーバックが読めるようになることである。１年次生、２年次生に対する英語授業の一環として、この多読（Extensive Reading）が導入されている。

４－２ オープン・ハウス

この企画は、平成10年開学当初から本学の教職員の研鑽を目的として始めたものである。言語学研究室のシャーリー助教授が中心となって、毎週金曜日の昼時間に行っている。自由でリラックスした雰囲気での英会話を目的としており、会話の内容はその時々の話題をテーマにしている。大切なのは日本語を一切使用せず、英語を聴いて話し、みんなで英語のおしゃべりを楽しむことである。英語の得意、不得意に関係なく、誰でも気軽に参加できるような会になるよう心がけている。

４－３　CALL システムによる英語学習

この企画は、CALL（Computer Assisted Language Learning）システムを研究・開発した広島市立大学との共同研究の一環として、試験的に導入、実施したものである。この CALL システムは、TOEIC 受験を念頭において構成された英語学習のための問題を、コンピューターを用いてウェブ上で演習していくものである。本件実施に当たり、本学 LL 教室に 24 台の e-Mac コンピューターを新規に購入し環境を整備した。事前ガイダンスによって受講者を募集し、１年次生 17 名、２年次生８名、３年次生１名の合計 26 人が受講した。実施期間は平成 16 年 10 月 18 日から同年 12 月 17 日の 9 週間に設定した。学習内容は Reading（30 問）、Listening（751 問）、文法：正解選択（100 問）、文法：間違い探し（100 問）という構成であった。本件実施に際し、受講者の学習の成果を見る指標として、システム実施直前と学習期間終了直後の計２回、TOEIC - IP を本学にて実施した。ほとんどの受講生が熱心に取り組み、結果として TOEIC - IP の得点が全体的に向上した。システム運用終了後の受講者へのアンケート調査においても、今回のシステム学習の機会が、学校で履修するほかの科目の勉強の妨げになるような影響はなかったという結果が得られた。以上の状況を踏まえて、今後継続的に CALL シス

テムによる英語学習を本学で実施していく計画である。受講者にとってより効果的なシステム運営を図るために、カリキュラムへの導入も念頭に入れつつ、さらに環境を整備していくことが今後の課題である。

５　学内プロジェクト研究

1) 電子レンジによる油脂類の酸化と発癌性

研究者：市瀬 孝道（責任者)、安部 真佐子、吉田 成一、定金 香里、安部 恭子

我々は空気に自動酸化させた酸化油脂類（ラード、ダイズ油、イワシ油）に肝の腫瘍発生を促進する作用があること、その作用は酸化油脂中の種々アルデヒド類や生体内で生じる活性酸素が関与していていることを報告した。本プロジェクト研究では、電子レンジによって短時間内に加熱処理した油脂類（ダイズ油、イワシ油）のアルデヒド産生や、摂取時の活性酸素生成、それによる DNA 損傷を調べ、肝発癌との関連を明らかにすることを目的とする。本年度はダイズ油とイワシ油を電子レンジで加熱処理し、その中に含まれる過酸化脂質（ROOH）とマロンジアルデヒドの経時的産生量を調べ、これらの油脂をマウスに投与するのに適した電子レンジ加熱処理時間を検討した。現在は電子レンジ加熱処理した油脂をマウスに経口投与している段階である。２～６ヶ月後に肝組織中のフリーラジカルによる DNA 損傷、DNA のメチル化やアルデヒド類と DNA との架橋形成等を調べ、発癌性との関連を考察する予定である。

2) 生活習慣病予防とヘルスプロモーションのためのセルフケアの確立

（野津原プロジェクト）

研究者： 草間 朋子（責任者)、平野 亙、桜井 礼子、稲垣 敦、小西 清美、
八代 利香、品川 佳満、中山 晃志、高波 利恵、木村 厚子

平成１６年度に取組んだ課題を以下に示す。

１）昨年度、都市エリア産官学連携促進事業で株式会社エリアと共同開発した保健師活動支援システムを旧・野津原町の基本健診後の訪問指導で利用し、受診者および保健師に面接調査を実施し、これに基づいてシステムをさらに改良した。

２）旧・野津原町の基本健診後に、定点足踏み歩行時の心拍数、血圧、SpO2 を測定し、呼吸循環器系持久力の指標としての妥当性を検討した。

３）旧・野津原町の基本健診時に、両掌間誘導 BI 法と両足底間誘導 BI 法による体脂肪率測定を行い、間接法による体脂肪率測定法について検討した。

４）中高齢者の内転筋強化のため、両膝で発砲スチロールを全力で挟む等尺性筋力トレーニング法を提案し、４週間実施後の効果を評価した。

５）基本健診で実施すべき高齢者体力テスト項目の評価基準を作成した。

６）高齢者の肥満度評価のためのウェスト・身長比の指標を提案し、その妥当性を評価し、評価基準を作成した。

７）高齢者の加齢に伴う等尺性膝関節伸展力の変化を検討し、評価基準を提案した。

６　奨励研究

1）認知症高齢者と寝たきり高齢者の主介護者が感じる介護負担感の相違

研究者：工藤 節美、大村 由紀美

本研究では、認知症高齢者と寝たきり高齢者の主介護者が感じる介護負担感の相違を明らかにすることを目的とした。認知症高齢者の主介護者 5 人、寝たきり高齢者の主介護者 5 人を対象に、半構成的面接調査と Zarit 介護負担尺度日本語版を参考に作成した自記式質問紙調査を行った。看護概念創出法を用いた分析の結果、介護負担感を反映しているコアカテゴリは認知症 6 つ、寝たきり 7 つが抽出された。両者のコアカテゴリ、カテゴリ、サブカテゴリを比較した結果、認知症特有の負担感は【Ⅰ．認知症症状対応への困惑と療養者の変化への不安】、【Ⅱ．療養者の状態と介護サービス内容との不適合】、寝たきり特有の負担感は【ⅰ．介護技術の未熟さに対する不安・緊張】、【ⅱ．医療処置の実施に伴う負担感】【ⅲ．介護に伴う経済的負担感】であった。介護負担尺度の結果でも、各々同等の質問項目で負担感が高くなっていた。

認知症では療養者の問題行動や高齢期の心身状態への対応に関すること、寝たきりでは医療処置の実施や介護技術の未熟さ、治療や介護に係る経済的負担が、主な介護負担感になっていることが示唆された。

2）哺乳および摂食の行動に関する咬筋の形態学的評価

研究者：安部 恭子、吉留 厚子

近年、スローフードが着目され、その食材や食べ方にも関心が寄せられている。先行研究では母乳の摂取量と児の哺乳力との関連が報告されている。しかし、人を対象とした咬筋の観察は難しく、咬筋に限定して経時的に観察したデ-タはみあたらない。そこで、今回の目的は実験動物を用いて、咬筋の形態学的発達を経時的に明らかにすることである。今年度は、実験動物（ICR-マウス）を通常の飼育用の餌を与えたコントロール群、10%の油脂を添加した高カロリー群、20%の食物繊維を添加した低カロリー群の 3 群に分けて飼育した。試料は、生後 3 日、10 日、20 日、30 日、12 週齢、24 週齢のマウスから咬筋を切り出したのち光学顕微鏡下で観察した。その結果、3 群それぞれで経時的な筋線維の形態的変化を観察でき、3 日目ですでに筋線維のサイズに差が確認された。12 週齢のマウスの咬筋の観察では筋線維のサイズの他に筋内膜の密度に差が確認された。

3）脂肪細胞分化成熟過程における urokinase の機能に関する研究

研究者：石塚 香子

脂肪組織は各種サイトカインを合成、分泌することが報告されている。生活習慣病の

１つである肥満は脂肪組織が肥大化したもので、糖尿病や動脈硬化などの疾病を加速する。前脂肪細胞から脂肪細胞への分化形質の一つとして線溶因子である urokinase(uPA)の発現が確認されているが、その生理学的機能は未だ不明である。そこで分化成熟過程におよぼす uPA の生理学的機能を検討した。脂肪細胞への分化誘導に伴い油滴の蓄積と細胞骨格タンパク質の再構成ならびに接着斑タンパク質の消失が確認された。分化誘導時に uPA 阻害剤を添加すると接着斑タンパク質の消失が抑制され、細胞内の油滴蓄積量が減少した。同時に脂肪細胞内で中性脂肪分解酵素の遺伝子発現が亢進していた。これらの結果より uPA は脂肪細胞の分化成熟過程において油滴蓄積に適した形態変化に重要な因子の 1 つである可能性が示唆された。

4) マウス培養細胞での ataxin1 発現量の抑制について

研究者：安部 眞佐子

Ataxin1 の機能を調べるために、培養筋肉細胞である C2C12 細胞と、ヒラメ筋由来の sol8 細胞を使用する。まず、筋管細胞への分化を誘導させる系を確認し、その後に ataxin1 発現量を RNA 干渉によって減少させることとした。複数の dsRNA 構築用ソフトによって、抑制効果を発現する箇所を選び、25mer を 1 箇所、21mer を 9 箇所選び合成を依頼した。25mer を導入して 1-3 日後に ataxin1 の mRNA 量を検討したが、100nM 以上でないと抑制効果が見られなかった。次に、21mer を 20nM 導入して 2 日間培養したところ、2 番が強く抑制作用を示し、dsRNA を加えない場合の 30%まで抑制した。2 番の濃度を変えて、両細胞に作用させると、濃度依存的に ataxin1 mRNA 発現を抑制した。今後は、2 番が off target 効果を持つかどうかを検討し、細胞毒性の無い場合には、筋肉分化、並びに、酸化ストレス暴露時、基質変換時に、ataxin1 の発現を抑制し、細胞に与える効果を判定する予定である。

5) In vitro 細胞培養系を用いた微小粒子状物質によるケモカイン産生誘導

研究者：吉田 成一、市瀬 孝道

ディーゼル排気微粒子 (DEP)や粒子状物質そのものであるカーボンナノ粒子 (CB：平均粒径 14nm)のサイトカイン・ケモカイン発現への影響について in vitro 細胞培養系を用いて検討した。マウスマクロファージ様細胞株 RAW264.7 細胞に DEP 及び CB を処理した結果、TNF、MCP-1 mRNA 発現量に有意な変動は認められなかったが、24 時間処理により MIP-1α mRNA 発現量が対照群と比較し DEP 処理では約 4 倍、CB 処理では約 2 倍に増加した。*in vitro* 培養系で検討を行った本研究結果は *in vivo* 系で認められた結果に一致していることから、作用機序解明の一助に成り得ると思われる。

6) γ-H2AX の線量・時間反応関係から見た線量率効果のモデル化

研究者：小嶋 光明

『目的』同じ線量の放射線を被ばくしても、どれだけの時間の間に受けたかによって作用の程度が異なる。この現象は線量率効果と呼ばれ、一般に、低線量率だと高線量率の場合と比較して、突然変異や染色体異常の誘発が軽減される。しかし、そのメカニズムは明らかにされていない。医療やあらゆる面で放射線の利用が身近になった現代において、線量率効果のメカニズムを明らかにすることは、放射線の人体に対する健康リスクを考える上で非常に重要な課題である。そこで、本研究では放射線の照射線量に対する DNA 損傷の割合と、その修復との関係を X 線照射後のリン酸化ヒストン H2AX（γ-H2AX）の線量・時間反応関係から解析し、染色体異常に見られる線量率効果のモデル化について検討した。

『方法』放射線照射後のγ-H2AX フォーカス数の変化を調べている文献から、1.2~200 mGy の照射線量で形成されるγ-H2AX フォーカス数の照射後の時間経過による変化を 2 項の指数関数モデルで記述し数式化した (SAS 利用)。次に、この数式を用いて 1.2~200 mGy の放射線を 0.01~24 時間毎に照射し、集積線量が 2×103 mGy となった時のγ-H2AX のフォーカス数を計算した。この結果を 60~6×104 mGy/h の線量率で 2×103 mGy を照射した際に、線量率効果として観察されている染色体異常の減少率と比較した。

『結果・考察』モデル計算の結果、40 mGy/h で得られるγ-H2AX のフォーカス数は 2×104 mGy/h の場合と比較して約十分の 1 に減少することが分かった。この結果は、60~6×104 mGy/h の線量率で観察された線量率効果による染色体異常の減少パターンと類似していた。従って、線量率効果のメカニズムは放射線の照射線量とその後の時間経過によるγ-H2AX のフォーカス数の変化を詳細に調べることにより説明できる可能性が示唆された。これらの結果を踏まえ、現時点において考えられる線量率効果の誘導機構を次のように考えた。

[線量率効果のモデル] 低線量率と高線量率とでは、単位時間当たりの線量が異なるため、初期に生じる DNA 損傷の割合に差が生じる。DNA 損傷の修復時間は初期損傷の割合に比例して長くなるため、次の DNA 損傷が起きる時に残っている残存損傷の割合が高線量率の方で多くなる。従って、必然的に線量率に依存して損傷が蓄積し、線量率効果が生じるのではないかと考えられた。

7) 力を精確に発揮する制御機能における中枢レベルの関与

研究者：吉武 康栄

本研究は，力を精確に発揮する課題動作中における中枢（大脳）レベルと末梢（筋）レベルの活動動態の関係を明らかにすることを目的とし、脳波と筋電図の波形の類似性を定量化した。課題動作は、右手の第一背側骨間筋の等尺性筋収縮とし、最大筋力の 20%を目標値とした。被検者（若齢健常者）はオシロスコープ上に表示された目標値と実測値が

できるだけ精確に合うよう力調節を行った。脳波（EEG）は C3 部位より、筋電図（EMG）は第一背側骨間筋腹上から双極誘導により取得した。筋電図においては、筋活動のリズムをより明瞭化するために、全波整流化を行った。EEG と EMG の波形の時間空間的および周波数空間的な類似性を明らかにするために、相互相関解析（cross correlation）および coherence 解析をそれぞれ行った。相互相関解析の結果、EMG および EEG は、ほぼ時間ずれなく波形に類似性があることが統計学的に認められた。また、coherence 解析の結果、その類似性は、8-12Hz, 30-35Hz, 45-50Hz 付近に存在することが明らかとなった。現段階では、それらの周波数帯域における波形の類似性の生理学的意義は不明であるが、先行研究の結果、最大筋力の 20%程度の一定負荷での等尺性収縮中において、運動単位の発火頻度は、10Hz 付近であることから、8-12Hz 帯域 の筋電図－脳波の類似性は、大脳活動と運動単位の発火頻度の同期性を反映していることが示唆される。本研究で行った解析方法は、今後、力調節機能が低下した高齢者や疾患者において、その機能低下の生理学的機序の解明に有用であると考えられる。

8) 運動負荷による疲労と血液中・尿中サイトカインの発現との関係

研究者：福田 広美

看護職者のための適切な疲労評価法の開発が求められている。近年の研究では、サイトカインが疲労を引き起こすことが報告されている。このため本研究では、尿中のサイトカインが疲労のバイオマーカーとして成り立つか否かを明らかにすることを目的とした。対象者は 20～30 代の健康な女性 10 名とした。運動負荷は自転車エルゴメーターを用い、VO2max の 40%、50%、および 60%負荷を 30 分間行った。尿と血液の採取は 50% VO2max 運動負荷では、運動前、運動直後、運動終了 1 時間、2 時間、24 時間後に行い、40%と 60% VO2max 運動負荷では、運動前、運動直後、運動終了 1 時間後に行った。運動負荷による尿と血液に発現するサイトカイン類の定性には、Cytokine Protein Array System III（CPAS）を用いた。CPAS により発現の認められた尿中、血中 IL-8 と ANG を ELISA kit を用いて定量化を行った。さらに 60% VO2max 運動負荷による筋組織の炎症の指標として B-mode 超音波画像による撮影を行った。全対象者で運動後の白血球数が有意に（$p<0.01$）増加した。CPAS による定性実験の結果、運動後に血液中および尿中に発現したサイトカインは、Angiogenin、IL-8、IL-1α、TNF-βなどであった。ELISA kit による定量化の結果、50% VO2max 運動負荷時の血中 IL-8 は、運動終了直後に増加傾向を認め、運動終了 2 時間後より有意に（$p<0.05$）減少したが、尿中 IL-8 は、運動終了 2 時間後と 24 時間後に有意に（$p<0.05$）増加した。本研究では、血漿中と尿中の IL-8 や ANG が、疲労のバイオマーカーとして成り立つことが示唆された。

9) モナストラルブルーによるナノ粒子の生体内動態の検索

研究者：定金 香里、市瀬 孝道、吉田 成一

大気中浮遊粒子状物質に含まれるナノ粒子は、粒径が比較的大きい粒子よりも肺組織への貯留時間が長く、血管やリンパ管を介して全身に移行する可能性がある。近年、大気中浮遊粒子状物質が、呼吸器だけでなく生殖機能や循環器系へ影響を及ぼすことが疫学調査や動物実験で指摘されている。これら生体影響には、全身への移行が考えられるナノ粒子が関わっていることが示唆されているが、その動態を調べた実験は数少ない。本研究は、模擬ナノ粒子として光顕下で明瞭に観察できるモナストラルブルー色素（平均粒径約 500nm）を用いて同粒子の生体内の動態を検索した。マウスにモナストラルブルーを気管内投与した結果、肺、肺門リンパ、肝、脾臓、腎臓、嗅球、腸管膜リンパ節、心臓、腋下リンパ節周辺脂肪組織に粒子像が認められた。特に肺門リンパで顕著に、肝、脾臓で比較的多数の粒子が存在していた。これら各組織へは、マクロファージに貪食されて、またはモナストラルブルー自身が血管内に移行して、運ばれたものと考えられる。この結果から、大気中浮遊物質中のナノ粒子が全身へ影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

7　インターネットジャーナル「大分看護科学研究」

平成 11 年 12 月に創刊後、広報、審査、編集作業などを継続し、平成 16 年 6 月に第 5 巻第 2 号、平成 17 年 3 月に第 6 巻第 1 号を刊行した。ジャーナルは本学ホームページ（http://www.oita-nhs.ac.jp/journal）に公開されており、ダウンロードすることができる。

第 5 巻 2 号　目次

原著
Nursing in China: Historical development, current issues and future challenges
Derek R Smith, Sa Tang

報告
看護の視点の広がりを育成するための地域看護学実習　－実習効果を上げるための特徴的な取り組み－　　工藤 節美、宇都宮 仁美、時松 紀子、大村 由紀美

「総合看護学」導入の試み　－専門基盤教育と看護専門教育の融合と自律性を目指して－
伊東 朋子、藤内 美保

トピックス
ラオス人民民主共和国の看護教育の過去・現在・将来　　小西 清美、草間 朋子

第 6 巻 1 号　目次

原著
老人保健法の基本健診を利用した高齢者の体力テストの必要性とテスト項目の提案
稲垣 敦，桜井 礼子，八代 利香，平井 仁，平野 亙，洪麗 信，草間 朋子

トピックス
カザフスタン共和国セミパラチンスク地域における精神保健事情　-JICA によるプロジェクトに短期参加して-　　大賀 淳子，八代 利香，草間 朋子

大分県立看護科学大学第 6 回看護国際フォーラム
タイと中国の看護基礎教育」(Dr. Tassana Boontong と Dr. Huaping Liu の講演から)
松尾 恭子

「日本における看護の継続教育」の概要(井部俊子先生と岡谷恵子先生の講演から)
小西 清美

８　業績

８－１　著書

赤司 千波他:　エクセルナース検査編 14、第 10 章老年の検査，松岡 緑、樗木 晶子監修、メディカルレビュー社，　東京，　2004.

石塚（岩崎）香子、深川 雅史:　内分泌・糖尿病科，　科学評論社，　東京，　2004.

甲斐 倫明:　宇宙からヒトを眺めて　－宇宙放射線の人体への影響－　藤高和信・福田俊・保田浩志編，　研成社，　東京，　2004.

金 順子、李 仙玉、金 梅子、朴 點姫、張 銀姫、沈 瑩華、孫 貞台:　基本看護學　第 7 版，　壽文社，　ソウル，　2005.

草間 朋子:　改訂　放射線防護マニュアル　安全な放射線診断・治療を求めて，日本医事新報社，　東京，　2004.

高橋 敬:　DIC　病態解明と治療の最前線　細胞外マトリックスと細胞性線溶機構，　高橋 芳右編，鳥居薬品，　東京，　2004.

高橋 敬:　血液の辞典　プラスミノーゲンアクチベータレセプター，平井、押味、坂田編，朝倉書店，　東京，　2004.

高橋 敬:　血栓・止血・血管学　ウロキナーゼ受溶体と細胞膜ドメイン：その基礎と応用，一瀬 白帝編，中外医学社，　東京，　2004.

８－２　翻訳

影山 隆之訳：Diana E McMillan 著，　認知行動療法は慢性的な不眠におけるベンゾジアゼピンの中断に有効である，　ＥＢNursing，　4(4)，　66-67，　2004.

８－３　研究論文

安部 恭子、吉留 厚子:　顕微鏡所見からみる母乳の意義，　第 35 回日本看護学会論文集(母性看護)，　2004.

宮崎 啓子、安部 恭子、藤内 美保、神田 貴絵:　看護ケア実施時のストレス負荷の違いに

よる唾液中クロモグラニンＡと自覚的疲労感の変化，　第 35 回日本看護学会論文集　(看護管理)，　2005.

長弘 千恵、永井 あけみ、小柳 宏子、樗木 晶子、馬場 みちえ、赤司 千波、畝 博：　公民館活動における女性高齢者の主観的健康状態に関する調査，　九州大学医学部保健学科紀要，　4,73-79，　2004.

長家 智子、松岡 緑、篠原 純子、川上 千普美、樗木 晶子、赤司 千波、原 頼子、永江 ゆき子、濱田 正美：　虚血性心疾患患者の自己管理行動への影響因子,九州大学医学部保健学科紀要，　5、33-40，　2005.

伴 信彦、松下 智美、甲斐 倫明：　小児期の造血幹細胞移植による二次がんのリスクに関する考察，　小児がん，　41(4)，　822-827，　2004.

姫野 稔子、三重野 英子、末弘 理恵、桶田 俊光：　在宅後期高齢者の転倒予防に向けたフットケアに関する基礎的研究　－足部の形態･機能と転倒経験および立位バランスとの関連－，　日本看護研究学会雑誌，　27(4)，75-84，　2004.

Hiyoshi K,　Takano H,　Inoue K,　Ichinose T,　Yanagisawa R,　Tomura S,　Cho AK,　Froines JR,　Kumagai Y.　：　Effects of a single intratracheal administration of phenanthraquinone on murine lung. ,　J Appl Toxicol,　(25),　47-51,　2005.

Inoue K,　Takano H,　Yanagisawa R,　Ichinose T,　Sadakane K,　Yoshino S,　Yamaki K,　Uchiyama K,　Yoshikawa T:　Effets of 15-deoxy-Delta-prostaglandin J on the expression of Toll-like receptor 4 and 2　in the murine lung in the presence of lipopolysaccharide. ,　Ciln Exp Pharmacol Physiol,　32,　230-232,　2005.

及川 力、斉藤 まゆみ、稲垣 敦：　４～６歳の聴覚障害幼児の運動能力に関する横断的研究，　障害者スポーツ科学，　2(1)，14-24，　2004.

高波 利恵、品川 佳満、桜井 礼子、稲垣 敦、草間 朋子：　基本健康診査受診者を対象にした高齢者の体力の実態とそれに基づく評価基準の提案，　公衆衛生，　69(1)，　81-85，2004.

稲垣 敦、桜井 礼子、八代 利香、平井 仁、平野 亙、洪 麗信、草間 朋子：　老人保健法の基本検診を利用した高齢者の体力テストの必要性とテスト項目の提案,大分看護科学研究，　6(1)，　1-14，　2005.

Iwasaki-Ishizuka　Y, Yamato H,　Murayama H,　Ezawa I,　Kurokawa K,　Fukagawa M.：Menatetrenone rescues bone loss by improving osteoblast dysfunction in rats

immobilized by sciatic neurectomy, Life Sci. , 76(15), 1721-34, 2005.

伊東 朋子、品川 佳満、松成 裕子、宮腰 由紀子: 筋萎縮性側索硬化症患者における夜間睡眠パターンの検討－催眠レベル測定機器 (Bispectral Index)を用いて－, 日本職業・災害医学会会誌, 52(6),355-363, 2004.

松成 裕子、伊東 朋子、品川 佳満、小林 敏生、藤井 宝恵、宮腰 由紀子: ＢＩＳによる自然下における睡眠評価の有用性について, 日本職業・災害医学会学会誌, 53(2), 2005.

影山 隆之、小林 敏生、河島 美枝子、金丸 由希子: 勤労者のためのコーピング特性易尺度(BSCP)の開発：信頼性・妥当性についての基礎的検討, 産業衛生学雑誌, 46,103-114, 2004.

影山 隆之、塩田 貴子、小西 忠司、岩崎 シユ: 電子メールによる学生相談の意義と課題－ある国立高等専門学校での全校調査による利用希望の検討－, 学校保健研究,529-542, 2004.

Kageyama, T., Kobayashi, T., Nishikido, N., Oga, J., Kawashima, M.: Association of sleep problems and recent life events with smoking behaviors among female staff nurses in Japanese hospitals, Industrial Health, 43,133-141, 2005.

吉田 博美、小西 聖子、影山 隆之、野坂 祐子: ドメスティック・バイオレンス被害者における精神疾患の実態と被害体験の及ぼす影響, トラウマティック・ストレス, 3(1),83-89, 2005.

小野 治子、甲斐 倫明: 乳癌の腫瘍成長の数理モデルを用いたスクリーニングマンモグラフィの余命延長効果の評価, 日本乳癌検診学会誌, 13(3), 289-297, 2004.

小野 孝二、赤羽 恵一、羽田 道彦、高野 嘉久、甲斐 倫明、草間 朋子: 視覚評価のための肺腺癌模擬病変ファントムの開発, 日本放射線技術学会雑誌, 60(9), 1301-1307, 2004.

今戸 啓二、三浦 篤義、大西 謙吾、清水 清二、姫野 稔子、小林 三津子、伊東 朋子: 背負子型腰部負担軽減具の開発, 生体医工学, 42(4),154-161, 2004.

小西 清美、吉留 厚子、宮崎 文子、神代 雅晴: 産褥早期における桶谷式乳房マッサージが自律神経機能に及ぼす影響, 日本助産学会誌, 18 (2)、87-93, 2004.

甲斐 仁美、佐伯 圭一郎、影山 隆之、草間 朋子: 看護の国際協力を推進するための看護教育のあり方, 看護教育, 46 (2) 134-139, 2005.

宮崎 文子、中山 晃志、今村 友子: 女子高校生の性感染症の認識度と対策の方向性 ーエイズおよびクラミジア、淋病、性器ヘルペス、トリコモナスの分析よりー, 助産雑誌, 58(7), 645-651, 2004.

中村 喜美子、堀江 京子、藤原 辰志: 保育園児の生活実態（４） 父母の生活実態, 保育と保健, 10(2), 42-49, 2004.

中山 晃志、佐藤 和子: 看護職の交代勤務の形態と蓄積的疲労の関係, 看護管理, 14(5), 408-411, 2004.

中山 晃志、藤澤 洋徳、緒方 可奈子: 高齢者におけるウエスト身長比の適性と判定基準, 厚生の指標, 52(2), 35-40, 2005.

大津 佐知江、福田 広美、小野 美喜、内田 雅子、粟屋 典子 : 大腿骨頸部骨折を起こした高齢者の退院に関する意思決定 , 日本看護学会誌, 14(1), 51-58, 2004.

小野 美喜: 病院組織に働く看護師の継続教育を支援する教育計画の検討, 看護展望, 29(7), 104-111, 2004.

Inoue K, Takano H, Yanagisawa R, Morita M, Ichinose T, Sadakane K, Yoshino S, Yamaki K, Kumagai Y, Uchiyama K, Yoshikawa T.:
Effects of 15-deoxy-delta12,14-prostaglandin J2 on the cyclooxygenase-2 expression in the murine lung in the presence of lipopolysaccharide.,
Arzneimittelforschung, 54(11), 711-714, 2004.

Inoue K, Takano H, Yanagisawa R, Ichinose T, Sadakane K, Yoshino S, Yamaki K, Uchiyama K, Yoshikawa T.:
Components of diesel exhaust particles differentially affect lung expression of cyclooxygenase-2 related to bacterial endotoxin, J Appl Toxicol, 24(6), 415-418, 2004.

Yanagisawa R, Takano H, Inoue K, Ichinose T, Yoshida S, Sadakane K, Takeda K, Yoshino S, Yamaki K, Kumagai Y, Yoshikawa T.:
Complementary DNA microarray analysis in acute lung injury induced by lipopolysaccharide and diesel exhaust particles., Exp Biol Med, 229(10), 1081-1087, 2004.

Ichinose T, Nobuyuki S, Takano H, Abe M, Sadakane K, Yanagisawa R, Ochi H, Fujioka K, Lee KG, Shibamoto T.： Liver carcinogenesis and formation of 8-hydroxy-deoxyguanosine in C3H/HeN mice by oxidized dietary oils containing carcinogenic dicarbonyl compounds., Food Chem Toxicol, 42(11), 1795-1803, 2004.

Sanbongi C, Takano H, Osakabe N, Sasa N, Natsume M, Yanagisawa R, Inoue KI, Sadakane K, Ichinose T, Yoshikaw: Rosmarinic acid in erilla extract inhibits allergic inflammation induced by mite allergen, in a mouse model., Clin Exp Allergy, 34(6), 971-977, 2004.

Inoue K, Takano H, Yanagisawa R, Sakurai M, Ichinose T, Sadakane K, Hiyoshi K, Sato M, Shimada A, Yoshikawa T. ： Role of metallothionein in antigen-related airway inflammation. , Exp Biol Med, 230(1), 75-81, 2005.

Oshio, S., Yoshida, S., et al: Individual Variation in Semen Parameters of Healthy Young Volunteers., Archives of Andrology, 50(6), 417-425, 2004.

Yoshida, S., Takeda, K.： The effects of diesel exhaust on murine male reproductive function., Journal of Health Science, 50, 1-5, 2004.

Tsukue, N., Yoshida, S., Sugawara, I.., Takeda, K.： Effect of Diesel Exhaust on Development of Fetal Reproductive Function in ICR Female Mice., Journal of Health Science, 50, 174-180, 2004.

Takeda, K., Tsukue, N., Yoshida, S.： Endocrine Disrupting Activity of Chemicals in Diesel Exhaust and Diesel Exhaust Particles., Environmental Sciences, 11, 33-45, 2004.

畑中 京子、高野 政子: 乳幼児を持つ母親の離乳食に対する困難感と食物アレルギーに関する検討, 第35回日本看護協会論文集（地域看護）, 51-53, 2004.

後藤 留美、高野 政子: 学童の近視と就寝時照明および夜間の近業活動との関連, 第35回日本看護協会論文集（地域看護）, 54-56, 2004.

高野 政子: 思春期における１型糖尿病児のインスリン自己注射の手技の安全性に関する検討, 日本小児看護学会誌, 14(1),1-7, 2005.

藤内 美保: 交代制勤務の看護師の生活時間構造と生活意識および疲労との関連 ーー般女性有職者および女性教員との比較ー, 日本看護研究学会学会誌, 27（4）,17-23,

2004.

藤内 美保　藤内 修二:　交代制勤務の看護師における生活時間構造と疲労　末子年齢別による分析,　日本公衆衛生雑誌,　51 (10) ,874-883,　2004.

大石 美由紀　神田 貴絵　藤内 美保　安部 恭子:　健常成人における入浴とシャワー浴が循環・呼吸動態に及ぼす影響の比較,　第35回日本看護学会論文集(看護教育),　2004.

衛藤 美由樹　杉本 久美　佐藤 祐子　安部 涼子　藤内 美保　吉留 厚子　:　片麻痺患者に対するインスリン自己注射用補助具の作製,　第35回日本看護学会論文集(成人看護),2004.

八代 利香、松成 裕子、梯 正之:　看護職における「与薬エラー発生」に関わる要因―国内外の研究動向と今後の課題―,　日本職業・災害医学会会誌,　52 (5) ,299-307,　2004.

Yoshitake Y,　Shinohara M,　Kouzaki M,　Fukunaga T.:　Fluctuations in plantar flexion force are reduced after prolonged tendon vibration.,　Journal of Applied Physiology, 97(6), 2090-2097,　2004.

安心院 登代美、穴井 万亀子、杉安 佐知子、安部 寿美、吉留 厚子、藤内 美保:　ビデオレターを活用した試験外泊への家族指導,　第3回　ＮＰＯ法人　日本リハビリテーション看護学会　学術大会収録,　48-50,　2004.

吉留 厚子、松井 典子、小西 清美、宮崎 文子、河野 富美代:　乳腺炎における乳房マッサージ前後の乳房表面皮膚温度変化,　第 35 回日本看護学会論文集　－母性看護－,149-151,　2004.

波川 京子、上林 康子、吉留 厚子:市町村合併モデルを用いた保健師配置課題の検討,　社会医学研究22号,　13-20,　2004.

中尾 陽子、麻生 真紀子、吉留 厚子、藤内 美保:　手術後せん妄についての看護師のアセスメント能力,　第35回日本看護学会　成人看護Ⅰ,　44-46,　2005.

８－４　その他論文

井田 政則、福田 広美　:　看護師への職場サポートがバーンアウト反応におよぼす影響,立正大学心理学研究所紀要,　(2), 77-88,　2004.

石田 高明、林 猪都子、西山 利正:　海外渡航時の予防接種,　総合臨床,　53(6),1839-1844,　2004.

影山 隆之: 病院看護職にとっての職場での人間関係とストレスマネジメント, Nurse Data, 25(12), 5-10, 2004.

小西 聖子, 吉田 博美, 野坂 祐子, 影山 隆之: ドメスティック・バイオレンス被害者のメンタルヘルス調査, 平成15年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書「DV被害者における精神保健の実態と回復のための援助の研究」, 84-113,2004.

影山 隆之: 「早寝早起き」の神話 最近の睡眠科学から, 教科の窓－小中学校通信 保健／体育, 2005,1月号, 2005.

甲斐 倫明: 医療被曝に伴う放射線発がんのリスク推定とその理解, 新医療, 10月号, 52-54, 2004.

甲斐 倫明: 放射線診断の被ばくに伴う放射線発がんのリスク, 日本医学放射線学会雑誌, 64(7), Suppl. 11-15, 2004.

小西 清美、草間 朋子: ラオス人民民主共和国の看護教育の過去・現在・将来, 大分看護科学大学研究, 34-37, 2004.

工藤 節美、宇都宮 仁美、時松 紀子、大村 由紀美: 看護の視点の広がりを育成するための地域看護学実習, 大分看護科学研究, 5（2）,21 26, 2004.

草間 朋子: 看護職のリスクと対処法 ①被ばく, Nursing Today, 19（５）,64-65, 2004.

草間 朋子: 画像診断の適用と安全性, 周産期医学, 34（6）817-822, 2004.

草間 朋子: 看護職の放射線影響に対する誤解を解く, 助産雑誌, 58（11）964-969, 2004.

草間 朋子: 放射線の正しい知識, 助産雑誌, 58（11）981, 2004.

草間 朋子: 医療被ばくとそのリスクに関する最近の話題, 日本小児放射線学会雑誌, 21（1）4-8, 2005.

草間 朋子: カザフスタンおよびウズベキスタンにおける国際協力, 大分県JICA派遣専門家連絡会会報, （8）10-14, 2005.

宮崎 文子、渡部 尚子、岡本 喜代子、鈴井 江三子、番内 和枝、吉留 厚子、林 猪都子、

中山 晃志: 受胎調節実地指導員の意識と活動の現状分析, ペリネイタルケア, 23(10)、82-87, 2004.

宮崎 文子、渡部 尚子、岡本 喜代子、鈴井 江三子、番内 和枝、吉留 厚子、林 猪都子、中山 晃志: 求められる受胎調節実地指導員のあり方に関する検討 -家族計画指導(避妊相談等）に関するニーズ調査より-, 助産師, 58 (4)、59-64, 2004.

佐山 静江、渡部 尚子、石川 紀子、遠藤 俊子、葛西 圭子、斉藤 益江、宮崎 文子、柿沼 由美子、山崎 圭子、川元 知子、小林 康江、八木橋 香津代: 医療機関における助産ケアの質評価 ー自己点検のための評価基準ー, 助産師, 58 (4)、19-30, 2004.

宮崎 文子、渡部 尚子、岡本 喜代子、鈴井 江三子、番内 和枝、吉留 厚子、林 猪都子、中山 晃志: 望まない妊娠の防止に関する研究, 平成 14～16 年度 厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）佐藤研究班分担研究班報告書, 2004.

宮崎 文子、渡部 尚子、岡本 喜代子、鈴井 江三子、番内 和枝、吉留 厚子、林 猪都子: 受胎調節実地指導員 NEW『リカレント教育マニュアル』, 厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）佐藤研究班 分担研究班報告書, 2004.

宮崎 文子: 母体保護法第 39 条の改正に向けての提言, 月刊母子保健, 通巻第 544 号, 9, 2004.

佐伯 圭一郎: 生活習慣改善への取り組み, 保健の科学, 46(7),488-493, 2004.

高野 政子: 連載「看護の特殊性 教育との共通性」前編 なぜ看護に教育学が必要か, 看護教員と実習指導者, 1(1),70-77, 2004.

高野 政子: 連載「看護の特殊性 教育との共通性」後編 看護職者はどのような医療場面で教育を行うか, 看護教員と実習指導者, 1(2),74-80, 2004.

藤内 美保、関根 剛、玉井 保子、姫野 稔子、小林 みどり、神田 貴絵、安部 恭子、伊東 朋子: 看護基本技術能力向上のための技術チェックプログラムの実施ー大分県立看護科学大学の取り組みー, 看護教育, 46 (1) ,8-12, 2005.

相原 豊、白瀬 浩司、吉村 匠平: 実りある現場実践のためにー保育・教育技能研鑽の機会としての大学祭企画ー, 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要, 10(69-88), 2005.

吉武 康栄、篠原 稔、上 英俊、森谷 俊夫: 筋音図による筋収縮特性の解明, 第 19 回生体・生理工学シンポジウム論文集, 163-166, 2004.

加藤 尚美、宮城 真里子、中 千登世、牛ノ濱 幸代、富安 俊子、吉留 厚子:助産師資格取得後の業務達成度，全国助産師教育協議会　平成 15 年度事業活動報告書,11-19,　2004.

吉留 厚子、藤内 美保、江月 優子:　わたしがわたしらしく入院中を過ごすためにー入院中の患者の化粧についてー，　看護実践の科学，　29(9),68-71,　2004.

８－５　　学会発表

安部 恭子、吉留 厚子:　顕微鏡所見からみる母乳の意義，　第 35 回日本看護学会学術集会　母性看護 2004,　松本市，　2004.　7

安部 恭子、宮崎 啓子、藤内 美保、神田 貴絵:　看護ケア実施時のストレス負荷の違いによる唾液中クロモグラニンＡと自覚的疲労感の変化，　第 35 回日本看護学会学術集会　看護管理 2004,　徳島市，　2004.　10

赤司 千波、平野（小原）裕子:　グループホームの痴呆性高齢者の情報収集に関する研究ー情報収集担当者の特性と情報収集との関連ー，　第 30 回日本看護研究学会，　さいたま市，　2004.　7

長家 智子、松岡 緑、篠原 純子、川上 千普美、樗木 晶子、赤司 千波、原 頼子、永江 ゆき子､濱田 正美:　虚血性心疾患患者の自己管理行動への影響因子，　第 35 回日本看護学会　老年看護，　福岡市，　2004.　9

川上 千普美、松岡 緑、樗木 晶子、長家 智子、赤司 千波、篠原 純子、原 頼子:　虚血性心疾患患者の自己管理行動と家族のサポート，　第 24 回日本看護科学学会学術集会，東京，　2004.　12

篠原 純子、松岡 緑、樗木 晶子、長家 智子、赤司 千波：　虚血性心疾患患者の自尊感情と関連要因，24 回日本看護科学学会学術集会,東京，　2004.　12

坪根 千枝、伴 信彦、甲斐 倫明:　妊娠可能な女性の放射線診療に関する考察　ー診療放射線技師に対する意識調査からー，　日本保健物理学会第 38 回研究発表会，　神戸市,2004.4

Ban,N. and Kai,M.：　Formation and expansion of leukemia-specific chromosome aberrations in hematopoietic cells of x-ray irradiated mice, 11th International Congress of the International Radiation Protection Association, Madrid, Spain,　2004.　5

伴 信彦、甲斐 倫明: 放射線誘発マウス白血病における遅延性染色体異常の関与に関する検討, 日本放射線影響学会第 47 回大会, 長崎市, 2004. 11

瀬口 真奈美、林 猪都子、大神 純子、宮崎 文子: 出産時分娩体位における女性の意識, 第４５回日本母性衛生学会, 東京都新宿区, 2004. 9

工藤 昌子、林 猪都子、大神 純子、宮崎 文子: 妊娠中の飲酒行動特性の検討, 第 45 回日本母性衛生学会, 東京都新宿区, 2004. 9

寺川 孝枝、岡部 裕美、加藤 元美、林 猪都子: 妊娠中の乳頭・乳房の変化とブラジャーサイズが及ぼす影響, 第 45 回日本母性衛生学会, 東京都新宿区, 2004. 9

日吉 孝子、熊谷 嘉人、戸村 成男、市瀬 孝道、柳澤 利枝、井上 健一郎、高野 裕久: 卵白アルブミンによる喘息モデルに大気中微小粒子成分 1,2-ナフトキノンが及ぼす影響について, 第 16 回アレルギー学会春季臨床大会, 群馬, 2004. 5

桜井 美穂、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、日吉 孝子、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一: アレルギー性気管支喘息モデルにディーゼル排気微粒子 (DEP) 構成成分が及ぼす影響, 第 45 回大気環境学会, 秋田, 2004. 10

市瀬 孝道、定金 香里、高野 裕久、柳澤 利枝、西川 雅高、森 育子、川里 浩明、安田 愛子、日吉 孝子: ダニ抗原誘発マウス喘息に対する黄砂及びカオリン粒子の影響, 第 54 回日本アレルギー学会, 横浜, 2004. 10

柳澤 利枝、高野 裕久、桜井 美穂、井上 健一郎、日吉 孝子、定金 香里、市瀬 孝道、唐 寧、早川 和一: マウス喘息モデルに対するディーゼル排気微粒子 (DEP) 構成成分の影響 [2], 第 54 回日本アレルギー学会, 横浜, 2004. 11

井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、桜井 美穂、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一: ナノ粒子の抗原誘発アレルギー性気道炎症への影響, 第 54 回 日本アレルギー学会, 横浜, 2004. 11

稲垣 敦: スポーツの振興をめざしたルールの変更:観衆や聴衆の緊張度から, 日本体育学会第 55 回大会, 長野市, 2004. 9

及川 力、橋本 有紀、斉藤 まゆみ、稲垣 敦: 教育形態の違いが聴覚障害者の形態、体力や運動能力に及ぼす影響：通常の小学校に在籍する聴覚障害児と聾学校小学校に在籍する聴覚障害児の比較, 日本体育学会第 55 回大会, 長野市, 2004. 9

橋本 有紀、及川 力、斉藤 まゆみ、稲垣 敦: ６歳から 11 歳の聴覚障害児の体格および

体力・運動能力：聴覚障害児と健常児の比較，　日本体育学会第55回大会，長野市，　2004. 9

Inagaki, A.,　Oga, J.,　Hoaki, Y.,　Ono, T.,　and　Okuma, H.：　Laterality of hand function as an index of rehabilitation for people with schizophrenia, XVIII World Congress of World Association for Social Psychiatry, Kobe, 2004. 10

Oga, J.,　Inagaki, A.,　Kawashima, M.,　Kageyama, T.,　and Hoaki, Y.：Assessing physical fitness and their relating factors in patients with schizophrenia, XVIII World Congress of World Association for Social Psychiatry, Kobe, 2004. 10

稲垣 敦、桜井 礼子、八代 利香、平野 亙、草間 朋子：　高齢者の膝関節伸展力の加齢に伴う変化と評価基準，　第63回日本公衆衛生学会総会，　松江，　2004.　10

石塚 香子、大和 英之、黒川 清、深川 雅史：　経口吸着剤（AST-120）投与は骨の遺伝子発現を維持し、低回転骨発症を防止する，　第４７回日本腎臓学会，　宇都宮市，2004.　5

河野（新居）智子、石塚（岩崎）香子、大和 英之、西 裕志、深川 雅史：　インドキシ硫酸による骨でのPTH抵抗性発現機序ーin　vitroでの解析ー，　第47回日本腎臓学会，　宇都宮市，　2004.　5

石塚（岩崎）香子、大和 英之、河野（新居）智子、黒川 清、深川　雅史：　腎性骨症における低回転骨は腎機能低下に依存して無形成骨へと進展する，　第24回日本骨形態計測学会，　高松市，　2004.　6

Iwasaki-Ishizuka Y,　Yamato H,　Fukagawa M:　Pravastatin ameliorates suppressed bone formation in uremic rats with adynamic bone disease, American Society of Nephrology,　St.Louis　(USA),　2004.　11

石塚 香子、安部 真佐子、高橋 敬：　脂肪細胞への分化成熟過程におけるウロキナーゼ（uPA）の生理機能，　第27回日本血栓止血学会，　奈良市，　2004.　11

Nii-Kohno T,　Yamato H,　Iwasaki-Ishizuka Y,　Nishi H,　Fukagawa M:　Indoxyl sulfate causes skeletal resistance to PTH in vitro,　American Society of Nephrology,　St　Louis　(USA),　2004.　11

岩崎（石塚）香子、大和 英之、深川 雅史、高橋 敬：　プラバスタチンは無形成骨症を呈する腎疾患ラットでの骨形成低下を改善する，　第 78 回　日本薬理学会年会，　横浜市，2005.　2

Matsunari,Y.,Sakihara,S.,Fujii,T.,Ito,T.： Reliability and Validity of the Newly Developed Attitude Scale for Predicting Health Behavior.-On the correlation with health Practices score of Sleep,Breakfast,Between meals,BMI,Exercise,Drinking,Smoking.-, Third Annual 2004 Summer Institute on Evidence-Based Practice,Academic Center for Evidence-Based Nursing (ACE),San Antonio,Texas, 2004. 7

吉野 聡，服部 訓典，立川 秀樹，飛鳥田 菜美，笹原 信一朗，森田 展彰，影山 隆之，松崎 一葉： 簡易職業性ストレス質問紙(BSJS)に影響を与える因子に関する研究－ストレス認知特性としての首尾一貫感覚(SOC)を中心に－， 第77回日本産業衛生学会， 名古屋市， 2004. 4

笹原 信一朗，吉野 聡，立川 秀樹，飛鳥田 菜美，服部 訓典，森田 展彰，影山 隆之，松崎 一葉： 筑波研究学園都市における職員のストレス状況に関する研究(3)－ストレス認知特性としての首尾一貫感覚(SOC)の年代毎の推移について－， 第 77 回日本産業衛生学会， 名古屋市， 2004. 4

小林 敏生，石本 里恵，影山 隆之： 看護職の職業性ストレスおよびストレス対処特性と抑うつ症状との関連（第２報）－改訂版簡易質問紙の信頼性と妥当性の検討－,第77回日本産業衛生学会， 名古屋市， 2004. 4

影山 隆之，小林 敏生，河島 美枝子： ストレス対処特性評価のための新しい質問紙の開発（第３報）:BSCP 最終版の信頼性・妥当性および公務員管理職集団の抑うつ症状との関連について， 第77回日本産業衛生学会， 名古屋市， 2004. 4

影山 隆之，河島 美枝子： 遠距離自家用車通勤における「ヒヤリハット」と日中の眠気および職業性ストレスとの関連， 第11回日本産業精神保健学会， 東京， 2004. 6

影山 隆之，高瀬 珠子，大賀 淳子，河島 美枝子： 遠距離通勤者が多い職場の勤労者における職業性ストレスと日中の眠気および運転中のインシデントとの関連， 日本睡眠学会第29回定期学術集会， 東京， 2004. 7

影山 隆之，吉富 早紀，佐藤 和子，岩男 和美，雨宮 克彦，雨宮 洋子： 痴呆を伴う高齢者への排尿援助が睡眠に及ぼす影響， 日本睡眠学会第 29 回定期学術集会,東京， 2004. 7

Kaku, J., Kabuto, M., Kageyama, T., Kuno, K., Kuwano, S., Namba, S., Sueoka,S., Tachibana, H., Yamamoto, K., Yamashita, M., Kamigawara, K.： Standardization of social survey method in Japan, Proceedings of the 33rd

International Congress and Exposition on Noise Control Engineering, Prague, 2004. 8

Kageyama, T., Kobayashi, T., Nishikido, N., Oga, J., Kawashima, M.: Countermeasures or one of causes Association of sleep problems and recent life events with smoking behaviors in Japanese hospital nurses, The 6th ICOH International Conference on Occupational Health for Health Care Workers, 北九州市, 2004. 10

影山 隆之，小泉 典章，大隈 紘子，山村 礎: 精神障害者グループホームの実態（第１報）運営状況の全国調査, 第 63 回日本公衆衛生学会, 松江市, 2004. 10

小泉 典章，影山 隆之，大野 祥子，大隈 紘子，山村 礎: 精神障害者グループホームの実態（第２報）利用者の聴取り調査, 第 63 回日本公衆衛生学会, 松江市,2004. 10

堤 雅恵，小林 敏生，澄川 桂子，影山 隆之，涌井 忠昭: 高齢者睡眠研究における睡眠日誌の有効性ーアクチグラムデータとの比較, 第 63 回日本公衆衛生学会, 松江市, 2004. 10

Kageyama, T., Koizumi, N., Okuma, H., Yamamura, M., Shimpo, Y.: A nationwide survey of group home for the mentally ill people in Japan: Correlates with quality of life among tenants, XVIII World Congress of World Association for Social Psychiatry, 神戸市, 2004. 10

甲斐 倫明、佐藤 亜衣: 極低周波電磁界と小児白血病の関係を調べた患者対象研究の誤差要因分析, 日本保健物理学会第 38 回研究発表会, 神戸市, 2004. 4

岡崎 敬一郎、甲斐 倫明、高野 嘉久、小野 孝二: 軽量な無鉛防護エプロンの放射線防護効果に関する実験的・理論的検討, 日本保健物理学会第 38 回研究発表会, 神戸市, 2004. 4

赤羽 恵一、西澤 かな枝、甲斐 倫明、草間 朋子、齋藤 公明: シミュレーション計算による CTDI と臓器線量の関連性の検討, 日本保健物理学会第 38 回研究発表会,神戸市, 2004. 4

甲斐 倫明、伴 信彦: 放射線誘発白血病（ALL, AML）の発症機構における放射線の作用に関する数理モデルからの考察, 日本放射線影響学会第 47 回大会, 長崎市, 2004. 11

今戸 啓二、三浦 篤義、大西 謙吾、清水 清二、姫野 稔子、小林 三津子、伊東 朋子: 背負子型腰部負担軽減具の開発, 生体医工学シンポジウム 2004, 札幌市,2004. 9

三苫 恵子、萱島 順子、小西 清美、吉留 厚子、河野 富美代、宮崎 文子: 授乳婦人における乳房マッサージによるリラクゼーション効果, 大分県母性衛生学会設立総会・学術講演会, 大分市, 2004. 10

大賀 淳子、河島 美枝子、影山 隆之、安部 静子: 自殺に関する地方公務員の意識調査, 産業衛生学会九州地方会学会, 宮崎市, 2004. 6

J.Oga, A.Inagaki, M.Kawashima, T.Kageyama, Y.Hoaki: Assessing Physical Fitness and their Relating Factors in Patients with Schizophrenia, 18th World Congress of World Association for Social Psychiatry, 神戸市, 2004. 10

大賀 淳子、河島 美枝子、影山 隆之、古場 郁乃: アルコール自助グループ活動の活性化要因に関する調査, 日本公衆衛生学会, 島根市, 2004. 10

浦崎 康子、大神 純子、林 猪都子、宮崎 文子: 出産に対する産婦の主体性と分娩施設選択条件の関係性, 日本母性衛生学会, 東京, 2004. 9

柳澤 利枝、高野 裕久、桜井 美穂、井上 健一郎、日吉 孝子、市瀬 孝道、定金 香里、早川 和一: マウス喘息モデルに対するディーセル排気微粒子(DEP)構成成分の影響, 第16回日本アレルギー学会春季臨床大会, 前橋市, 2004. 5

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、川里 浩明、安田 愛子: アトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼすディーゼル排気微粒子抽出物塗布の影響, 第16回日本アレルギー学会春季臨床大会, 前橋市, 2004. 5

桜井 美穂、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、日吉 孝子、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一: アレルギー性気管支喘息モデルにディーゼル排気微粒子(DEP)構成成分が及ぼす影響, 第45回大気環境学会, 秋田市, 2004. 10

日吉 孝子、熊谷 嘉人、戸村 成男、市瀬 孝道、定金 香里、柳澤 利枝、井上 健一郎、高野 裕久: OVA感作アレルギーに対する大気中微小粒子成分1,2-ナフトキノンの修飾効果, 第45回大気環境学会, 秋田市, 2004. 10

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、桜井 美穂、川里 浩明、安田 愛子、早川 和一: ディーゼル排気微粒子抽出物塗布によるアトピー性皮膚炎の増悪機序の検討, 第54回日本アレルギー学会総会, 横浜市, 2004. 11

市瀬 孝道、定金 香里、高野 裕久、柳澤 利枝、西川 雅高、森 育子、川里 浩明、安田 愛子、日吉 孝子: ダニ抗原誘発性マウス喘息モデルに対する黄砂及びカオリン粒

子の影響, 第54回日本アレルギー学会総会, 横浜市, 2004. 11

柳澤 利枝、高野 裕久、桜井 美穂、井上 健一郎、日吉 孝子、定金 香里、市瀬 孝道、唐 寧、早川 和一: マウス喘息モデルに対するディーゼル排気微粒子(DEP)構成成分の影響(2), 第54回日本アレルギー学会総会, 横浜市, 2004. 11

井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、桜井 美穂、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一: ナノ粒子の抗原誘発アレルギー性気道炎症への影響, 第 54 回日本アレルギー学会総会, 横浜市, 2004. 11

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、桜井 美穂、川里 浩明 安田 愛子、早川 和一: アトピー性皮膚炎発症初期に及ぼすディーゼル排気微粒子抽出物の影響, 大気環境学会九州支部総会, 福岡市, 2005. 1

関根 剛、金子 進之助: 被害者に関する講話による受刑者の被害者認知の変化, 犯罪心理学会, 東京, 2004. 9

Saito,T, Sekine,T: An 8-Year GHQ-28 Follow-up Study of Mental Health in Patients with Thalidomide Embryopathy - in the case of the limb deformities group -, 社会精神医学会, kobe, 2004. 10

押尾 茂、机 直美、吉田 成一、阿部 学、武田 健: ディーゼル排ガスの健康影響, 2004 NEW環境展, 東京都, 2004. 5

武田 健、田畑 真佐子、吉田 成一、机 直美、押尾 茂: Toxicogenomics 環境化学物質の生体影響評価におけるゲノム情報の活用, 第 88 次日本法医学会総会, 旭川市, 2004. 6

押尾 茂、小野 なお香、庭田 祐一郎、吉田 成一、机 直美、菅原 勇、高野 裕久、武田 健: マウス精子形成に及ぼすディーゼル排ガス胎仔期曝露の影響, 日本アンドロロジー学会第23回学術大会, 甲府市, 2004. 7

押尾 茂, 小野 なお香, 吉田 成一, 武田 健: ディーゼル排ガス妊娠期曝露の出生仔への影響, 日本不妊学会学術講演会, 旭川市, 2004. 9

吉田 成一、平春 亜季子、野口 恵子、早川 和一、高野 裕久、武田 健、市瀬 孝道: ディーゼル排気微粒子中に含まれる Estrogen Receptor α mRNA 発現低下作用を有する物質の探索, フォーラム 2004 衛生薬学・環境トキシコロジー, 千葉市, 2004. 10

庭田 祐一郎，小野 なお香，阿部 学，机 直美，吉田 成一，押尾 茂，菅原 勇，
高野 裕久,武田　健:　マウス精子形成に及ぼす除塵ディーゼル排ガス胎仔期曝露の影響,
フォーラム 2004　衛生薬学・環境トキシコロジー，　千葉市，　2004.　10

武田 健、吉田 成一、机 直美、押尾 茂、井原 智美、菅又 昌雄:　ディーゼル排ガス胎仔期曝露が生殖系及び脳神経系に及ぼす影響，　第 45 会大気環境学会年会，　秋田市，　2004.　10

押尾 茂、小野 なお香、庭田 祐一郎、阿部 学、机 直美、吉田 成一、高野 裕久、
武田 健:　精巣特異的 cDNA マイクロアレイを用いたディーゼル排ガス胎仔期曝露マウスの精子形成に及ぼす影響の解析，　フォーラム 2004　衛生薬学・環境トキシコロジー，　千葉市，　2004.　10

庭田 祐一郎、小野 なお香、阿部 学、机 直美、吉田 成一、押尾 茂、菅原 勇、
高野 裕久、武田 健:　除塵ディーゼル排ガス胎仔期曝露がマウス精子形成に及ぼす影響,
第 9 回精子形成・精巣毒性研究会，　大阪府，　2004.　10

吉田 成一、長山 小夜子、森 育子、西川 雅高、市瀬 孝道:　黄砂の内分泌かく乱作用に関する研究～雄性生殖機能への影響，　第 7 回　環境ホルモン学会，　名古屋市，　2004.　12

庭田 祐一郎、小野 なお香、吉田 成一、机 直美、高野 裕久、菅原 勇、押尾 茂、武田　健:
ディーゼル排ガス胎仔期曝露のマウス精子形成能に及ぼす影響,第 7 回　環境ホルモン学会，　名古屋市，　2004.　12

押尾 茂、庭田 祐一郎、小野 なお香、机 直美、吉田 成一、菅原 勇、高野 裕久、
西宗 義武、武田 健:　精巣特異的マイクロアレイを用いたディーゼル排ガス胎仔期曝露マウスの検討，　第 7 回　環境ホルモン学会，　名古屋市，　2004.　12

Shigeru Oshio　,　Yuichiro Niwata,　Naoka Ono,　Naomi Tsukue,　Seiichi Yoshida,　Isamu Sugawara,　Hirohisa Takano,　Yoshitake Nishimune,　Ken Takeda:　Analysis of the effects of diesel exhaust exposure in utero on mouse spermatogenesis using testis specific cDNA microarray,　Copenhagen Workshop on Environment, Reproductive Health and Fertility Rigshospitalet, コペンハーゲン, 2005.　1

Yuichiro Niwata,　Naoka Ono,　Seiichi Yoshida,　Naomi Tsukue,　Hirohisa Takano,　Isamu Sugawara,　Shigeru Oshio,　Ken Takeda:　Effect of diesel exhaust exposure in utero on mouse spermatogenesis, Copenhagen Workshop on Environment, Reproductive Health and Fertility Rigshospitalet,　コペンハーゲン,　2005.　1

吉田 成一、高野 裕久、市瀬 孝道: In vitro 細胞培養系を用いた微小粒子状物質によるケモカイン産生誘導, 日本薬学会第125年会, 東京都, 2005. 3

石塚 香子、安部 眞佐子、高橋 敬: 脂肪細胞への分化と成熟過程におけるウロキナーゼ（uPA）の生理機能, 日本血栓止血学会学術集会, 奈良市, 2004. 11

高野 政子、安部 留美: 子どもへのテレビ視聴の影響に対する保護者と小児看護師の認識, 日本小児看護学会 第14回学術集会, 宮崎市, 2004. 7

安部 留美、高野 政子: 乳幼児のテレビ視聴の影響に関する保護者と小児看護師の認識, 第10回大分県小児保健学会, 大分市, 2004. 9

畑中 京子、高野 政子: 乳幼児をもつ母親の離乳食に対する困難感と食物アレルギーに関する検討, 第35回日本看護学会（地域看護）, 高知市, 2004. 10

後藤 留美、高野 政子: 学童の視力低下と就寝時照明および夜間の近業活動との関連, 第35回日本看護学会（地域看護）, 高知市, 2004. 10

高野 政子: 1.6歳、3歳児の喘息・喘鳴と母親の予防行動, 日本看護科学学会 第24回学術集会, 東京, 2004. 12

時松 紀子、中村 喜美子、大村 由紀美、秦 桂子、松岡 祐子、寺尾 英夫: 女子大学生の喫煙の実態と初回喫煙時の状況, 第50回大分県公衆衛生学会, 大分市, 2005. 2

藤内 美保、大石 美由紀、神田 貴絵、安部 恭子: 健康成人における入浴とシャワー浴が循環・呼吸動態に及ぼす影響の比較, 第 35 回日本看護学会（看護教育）, 和歌山市, 2004. 8

衛藤 美由樹、杉本 久美、佐藤 祐子、安部 涼子、藤内 美保、吉留 厚子: 片麻痺患者に対するインスリン自己注射用補助具の作製, 日本看護学会(成人看護), 佐賀県, 2004. 8

山下 早苗、猪下 光: 外来通院している小児がん患者への告知に対する親の意向と不確かさ, 日本小児看護学会 第14回学術集会, 宮崎市, 2004. 7

山下 早苗、猪下 光: 外来通院している小児がん患者への告知に対する親の意思決定支援ー告知に対する不確かさを分析してー, 第 30 回日本看護研究学会学術集会, さいたま市, 2004. 7

山下 早苗、猪下 光: 乳幼児をもつ母親の子どもの発病時における家庭での判断と対処行

動　－帰納的質的分析－，　第14回日本外来小児科学会年次集会，　大分市，　2004.8

Yoshitake Y,　Shinohara M,　Kouzaki M,　Fukunaga T.：　Activation of gastrocnemii influences steadiness in plantarflexion force.,　American College of Sports Medicine　(ACSM),　Indianapolis,　USA,　2004.　5

Yoshitake Y,　Shinohara M,　Kawakami Y,　Kanehisa H,　Fukunaga T.：　Catchlike property decreases the amplitude of mechanomyogram in humans.　,　International Society of Electrophysiology &　Kinesiology,　Boston,　USA,　2004.　6

吉武 康栄，川上 泰雄，金久 博昭，福永 哲夫：　筋音図解析によるCatchlike　property発生機序の解明，　第59回日本体力医学会，　大宮市，　2004.　9

吉留 厚子、松井 典子、小西 清美、宮崎 文子、河野 富美代：　乳腺炎における乳房マッサージ前後の乳房表面皮膚温度変化，　第 35 回日本看護学会－母性看護一，　松本市，2004.　7

安心院 登代美、穴井 万亀子、杉安 佐知子、安部 寿美、吉留 厚子、藤内 美保：ビデオレターを活用した試験外泊への家族指導，　第3回　ＮＰＯ法人　日本リハビリテーション看護学会　学術大会，　相模大野，　2004.　10

中尾 陽子、麻生 真紀子、吉留 厚子、藤内 美保：　手術後せん妄についての看護師のアセスメント能力，　第35回日本看護学会　－成人看護－ ，　名古屋市，　2004.　10

波川 京子、吉留 厚子、上林 康子、近藤 裕子、松永 保子：　看護必要度の用語の定義についての文献検討，　第35回日本看護学会　－看護管理－，　徳島市，　2004.　10

吉留 厚子、小西　清美、河野 富美子、宮崎 文子：　離乳時の乳房マッサージによる主観的症状と乳房表面皮膚温の変化，　第1回大分県母性衛生学会，　大分市，　2004.　10

吉留 厚子、波川 京子、上林 康子、近藤 裕子、松永 保子：　医療機関における看護要員の配置算定方法の選択および運営での困難（第1報），　第9回日本看護研究学会九州地方会学術集会，　熊本市，　2004.　11

松永 保子、波川 京子、上林 康子、近藤 裕子、吉留 厚子：　医療機関における看護要員の配置算定方法の選択および運営での困難（第2報），　第9回日本看護研究学会九州地方会学術集会，　熊本市，　2004.　11

８－６　学術講演等

市瀬 孝道:　黄砂の肺毒性およびアレルギーへの影響.,　第 45 回大気環境学会、分科会 7. 都市大気エアロゾル分科会,　秋田,　2004.　10

甲斐 倫明:　放射線発がんリスク論,　第 63 回日本医学放射線学会シンポジウム,　横浜市,　2004.　4

甲斐 倫明:　Lancet 論文の概要,　日本保健物理学会第 38 回研究発表会,　神戸市,　2004.　4

甲斐 倫明:　放射線診断に伴う放射線発がんのリスク,　第 63 回日本癌学会学術総会教育講演,　福岡市,　2004.　10

甲斐 倫明:　医療被ばくのリスクをどう考えるか,　日本放射線影響学会第 47 回大会,　長崎市,　2004.　11

甲斐 倫明:　CT を用いた放射線診断件数の将来予測とその被ばくに伴う寄与リスク,　放射線リスク検討会平成 16 年度全体会合,　京都市,　2005.　1

草間 朋子:　医療被曝とそのリスクに関する最近の話題,　第 40 回日本小児放射線学会,　長崎市,　2004.　6

草間 朋子:　医療被曝とそのリスクに関する最近の話題,　第 40 回日本小児放射線学会,　長崎市,　2004.　6

草間 朋子:　放射線防護の最近の動向,　平成 16 年度九州国立病院療養所放射線技師会学術大会,　別府市,　2004.　10

草間 朋子:　医療放射線利用と放射線安全,　第４３回全国自治体病院学会,　広島市,　2004.　11

吉武 康栄，篠原 稔，上 英俊，森谷 敏夫:　筋音図の発生機序とその応用性,　第 19 回生体生理工学シンポジュウム,　大阪,　2004.　11

吉武 康栄，神崎 素樹，篠原 稔:　協働筋収縮中の力調節安定性に対する各筋の貢献度の評価法,　運動と神経筋研究　特別シンポジウム　2004,　所沢市,　2004.　12

９　地域貢献

９－１　　講演

粟屋 典子:　看護管理概説,　大分県看護協会認定看護管理者ファーストレベル,　大分市, 2004.　5

粟屋 典子:　大学の教育課程・自己啓発,　大分県看護協会実習指導者講習会,　大分市, 2004.　5

粟屋 典子:　キャリアラダーについて,　国家公務員共済組合連合会看護部長会議,　金沢市,　2004.　7

粟屋 典子:　看護サービス提供論,　大分県看護協会認定看護管理者ファーストレベル, 大分市,　2004.　10

粟屋 典子:　看護組織論　看護サービスの質評価と改善,　熊本県看護協会認定看護管理者セカンドレベル,　熊本市,　2004.　11

粟屋 典子:　看護組織論　看護サービスの質保証・評価・向上,　宮崎県看護協会認定看護管理者セカンドレベル,　宮崎市,　2005.　2

伴 信彦:　IVRでの看護,　放射線医学総合研究所第36回放射線看護課程,　千葉市, 2004.　5

伴 信彦:　IVRでの看護,　放射線医学総合研究所第37回放射線看護課程,　千葉市, 2004.　7

伴 信彦:　IVRでの看護,　放射線医学総合研究所第40回放射線看護課程,　千葉市, 2005.　2

林 猪都子:　大分県立大分商業高等学校（１年生）　「今を大切に生きる」,　日本助産師会大分県支部,　大分市,　2004.　7

林 猪都子:　大分市立原川中学校（２年生）　「命をつないで」,　日本助産師会大分県支部,　大分市,　2004.　10

林 猪都子:　大分市立三佐小学校（4年生）　すこやか体験学習　「命の大切さについて考えましょう」,　日本助産師会大分県支部,　大分市,　2004.　10

林 猪都子： 大分市立原川中学校（３年生） 「今を大切に生きる」， 日本助産師会大分県支部， 大分市， 2004． 10

林 猪都子： 大分市立判田中学校（１年生） 「大切ないのち」， 日本助産師会大分県支部， 大分市， 2004． 12

林 猪都子： 大分市立判田中学校（２年生） 「命をつないで」， 日本助産師会大分県支部， 大分市， 2004． 12

林 猪都子： 大分市立南大分中学校ＰＴＡ 「思春期の子育て」， 大分市家庭教育推進協議会， 大分市， 2005． 2

平野 亙： 福祉・介護・医療サービスにおける「苦情」と「第三者評価」， 大分県介護福祉士会第１回研修会， 大分市， 2004． 6

平野 亙： ヘルスケア提供システム論， 平成１５年度看護管理者ファーストレベル研修会， 大分市， 2004． 6

平野 亙： リスクマネジメント， 大分県看護協会平成１６年度実習指導者講習会， 大分市， 2004． 7

平野 亙： 問われる看護の質 －事例から学ぶ－， 独立行政法人国立病院機構東佐賀病院看護部集合教育 特別講演， 佐賀県中原町， 2004． 10

平野 亙： 医療をめぐる人権， 大分県人権研修講師ステップアップ研修， 大分市， 2004． 10

平野 亙： ケアの安全管理 －事故情報から学ぶ－， 別府発達医療センター 安全管理研修， 別府市， 2004． 10

平野 亙： 看護管理者に求められるもの －問われる看護の質－， 民医連九州･沖縄地方協議会2004年度看護師長研修会， 別府市， 2004． 11

平野 亙： 看護の安全管理 －事故情報から学ぶ－， 大分県看護協会 日田・玖珠地区「第13回看護のつどい」， 日田市， 2004． 11

平野 亙： 健康づくり活動を楽しもう， 日田市環境保健委員会 健康づくり講演会, 日田市， 2004． 12

平野 亙： 福祉サービス第三者評価の意義， 大分県福祉サービス第三者評価事業推進組

織「福祉サービス第三者評価事業事業者説明会」， 大分市， 2004. 12

平野 亙： 看護の安全管理 －事故情報から学ぶ－， 大分県看護協会 玖珠地区看護師研修会， 玖珠町， 2005. 3

稲垣 敦： レクリエーション， 野津原わくわくヘルスセミナー， 野津原町， 2004. 6

稲垣 敦： 精神障害者の体力と運動， Sports Day， 大分市， 2004. 6

稲垣 敦： 活力ある老後のための健康運動， いきいき女性セミナー， 野津原町，2004. 7

稲垣 敦： 高齢者の体力トレーニング， 七瀬大学／野菊の会， 野津原町， 2004. 9

稲垣 敦： ウォーキング， 大分県精神保健福祉センター講習会， 大分市， 2004. 9

稲垣 敦： 精神障害者の体力測定・運動指導・体力相談， 大分丘の上病院， 大分市，2004. 11

岩崎（石塚）香子： 腎機能低下にともなう無形成骨症の発症， ROD-21研究会， 浜松市，2004. 7

石塚（岩崎）香子： 無形成骨症に対するスタチン製剤の治療効果に関する検討， 腎性骨症研究会， 東京都， 2004. 7

伊東 朋子： 虫刺されの応急処置， 健康講座7月学習会， 野津原町， 2004. 7

影山 隆之： 睡眠と健康な生活， 平成16年度日出町健康づくり推進協議会研修会,日出町,2004. 5

影山 隆之： 看護研究の基礎， 大分県看護協会教育計画研修会， 大分市， 2004. 5

影山 隆之： メンタルヘルス， 大分県職員研修所新任係長級研修， 大分市， 2004. 6

影山 隆之： 看護研究の基礎Ⅱ， 大分県看護協会教育計画研修会， 大分市， 2004. 6

影山 隆之： 看護研究の基礎Ⅱ， 大分県看護協会教育計画研修会， 大分市， 2004. 7

影山 隆之： 看護研究２ 実践編， 大分県看護協会教育計画研修会， 大分市， 2004. 7

影山 隆之： 事例研究：うつ病，適応障害，統合失調症， 大分産業保健推進センター第９回産業医研修会， 大分市， 2004． 8

影山 隆之： ストレスと睡眠・休養， 大分県佐伯南郡地方振興局「こころの健康講座」，佐伯市， 2004． 9

影山 隆之： メンタルヘルスの基礎， 大分産業保健推進センター労働衛生週間特別講演会， 日田市， 2004． 9

影山 隆之： メンタルヘルスの基礎知識， 大分県労働基準協会「メンタルヘルス指針基礎研修」， 大分市， 2004． 10

影山 隆之： 介護に生かす自己理解・他者理解， 大分県竹工芸・訓練支援センター向上訓練， 別府市， 2004． 11

影山 隆之： 心の痛みを分かちあう， 別府市消防本部メモリアルデー職員研修， 別府市，2004． 11

影山 隆之： 健康と看護学， 大分県立大分雄城台高校総合的学習「出張授業」， 大分市， 2004． 11

影山 隆之： 精神障害者グループホームの実態調査から見えたもの， 大分県精神保健福祉センター・精神保健福祉関係者「応用研修」， 大分市， 2004． 12

影山 隆之： メンタルヘルスと労務管理， 大分県労働基準協会・労務管理セミナー，大分市， 2004． 12

影山 隆之： 大分県の施策（地域精神保健福祉活動）について ー地域精神保健福祉活動でのホームヘルパーの役割ー， 竹田市･精神障害者居宅支援事業担当者研修会， 竹田市，2005． 1

影山 隆之： 中年の健康とストレス管理， 別府市職員健康管理講演会， 別府市，2005．1

影山 隆之： 心の健康づくりとリハビリ ー毎日のくらしでできることー， 日出町健康づくり推進協議会研修会， 日出町， 2005． 2

影山 隆之： 働く人のストレス管理 ー自分でできること､職場単位でできることー， 中津下毛地区安全衛生協議会こころの健康講座， 中津市， 2005． 3

影山 隆之: 看護研究発表の講評，別府市医師会看護職研修会， 別府市， 2005. 2

甲斐 倫明: Mathematical models for radiation-induced cancer risk, JICA集団研修「放射線防護：線源から影響まで」， 千葉市， 2004. 11

甲斐 倫明: 微量な放射線線量の健康リスクとその不安に答える， 平成16年度市町村検診事業従事者連絡協議会， 大分市， 2004. 12

河島 美枝子: 職場のメンタルヘルス ー管理監督者の役割ー， 大分県職員研修所新任所属長研修， 大分市， 2004. 4

河島 美枝子: 新入職員のためのメンタルヘルス， 大分市新任職員第1次研修， 大分市，2004. 4

河島 美枝子: 新任課長補佐研修 ーメンタルヘルスー ， 大分県市町村職員研修運営協議会， 大分市， 2004. 5

河島 美枝子: 研修担当者研修 ーメンタルヘルスー， 大分県市町村職員研修運営協議会， 大分市， 2004. 5

河島 美枝子: 職場におけるメンタルヘルスケア， 大分県医師会 産業医研修会， 大分市， 2004. 6

河島 美枝子: 職場におけるメンタルヘルス事例への対応， 大分県産業保健推進センター， 大分市， 2004. 6

河島 美枝子: 職場におけるメンタルヘルスケア， 大分県医師会 平成16年度第1回産業医研修会 ， 大分市， 2004. 6

河島 美枝子: メンタルヘルス事例への対応， 日鉄物流管理職研修会， 大分市， 2004. 6

河島 美枝子: メンタルヘルスケアとは， 大分市職員安全衛生管理講演会， 大分市，2004. 6

河島 美枝子: 市町村職員課長研修 ーメンタルヘルスー， 大分県市町村職員研修運営協議会， 大分市， 2004. 7

河島 美枝子: 事業場におけるメンタルヘルス活動の基礎と実践 ー中小企業を対象としてー， 厚生労働科学研究 研究班， 東京都， 2004. 8

河島 美枝子: 職場のメンタルヘルス ーこれからの取り組みー, 平成16年度労働衛週間説明会, 三重町, 2004. 9

河島 美枝子: 心の健康管理, 大分市水道局職員研修会, 大分市, 2004. 9

河島 美枝子: 心の健康管理, 鶴見町役場職員研修会, 鶴見町, 2004. 9

河島 美枝子: メンタルヘルス指針基礎研修, 大分県労働基準協会, 大分市, 2004. 10

河島 美枝子: 心の健康管理, 別府女性調停員研修会, 別府市, 2004. 10

河島 美枝子: 職場のメンタルヘルス ー管理･監督者の役割ー, 原電事業株式会社, 東海村, 2004. 10

河島 美枝子: 産業看護基礎コース 職場におけるメンタルヘルス, 茨城県産業保健推進センター, 水戸市, 2004. 11

河島 美枝子: 産業看護基礎コース 労働衛生教育のあり方, 茨城県産業保健推進センター, 水戸市, 2004. 11

河島 美枝子: 心の健康管理 その2, 大分税関支署職員研修会, 大分市, 2004. 11

河島 美枝子: 心が沈み、気分が滅入るときあなたはどうしていますか, メンタルヘルスパネルディスカション, 大分市, 2004. 12

河島 美枝子: 職場におけるメンタルヘルス, 中津市民病院看護師研修会, 中津市, 2004. 12

河島 美枝子: 心の健康管理, 大分県のぞみ園職員研修会, 大分市, 2005. 1

河島 美枝子: 職場のメンタルヘルス ー管理職の役割ー, 川澄化学工業株式会社, 三重町, 2005. 2

河島 美枝子: 職場のメンタルヘルス 管理者の役割, 中央保健所日出支所 ストレス対策会議, 日出町, 2005. 2

小西 清美: 今を大切に生きる, 日本助産師会大分県支部, 大分市, 2004. 7

小西 清美： 原川中学校（2年生）性教育， 日本助産師会大分県支部， 大分市， 2004. 10

小西 清美： 原川中学校（3年生）性教育， 日本助産師会大分県支部， 大分市， 2004. 10

小西 清美： 命の大切さについて考えましょう －胎児の発育（4年生）－， 日本助産師会大分県支部， 大分市， 2004. 10

工藤 節美： 保健師教育課程， 大分県看護協会 平成16年度実習指導者講習会， 大分市， 2004. 5

工藤 節美： 大学における保健師教育の現状， 臼杵保健所管内地域保健従事者研修会， 臼杵市， 2004. 5

工藤 節美： 家族の特性と支援の方法， 大分県看護協会 平成16年度第1回訪問看護研修ステップ１， 大分市， 2004. 5

工藤 節美： 地域看護活動の展開・初任期に必要なこと・， 大分県医務薬事課 平成16年度保健師初任者研修会（前期）， 大分市， 2004. 6

工藤 節美： 訪問看護過程， 大分県看護協会 第1回訪問看護研修ステップ１， 大分市， 2004. 7

工藤 節美： 在宅介護の基礎知識， 野津原町健康講座9月学習会， 野津原町， 2004. 9

工藤 節美： 生活習慣病を知ろう， 富士見が丘長寿会研修会， 大分市， 2004. 9

工藤 節美： 在宅呼吸管理に関する制度等の動向と実態， 大分県看護協会 平成16年度訪問看護研修ステップ2「呼吸管理」， 大分市， 2004. 10

工藤 節美、藤内 美保、玉井 保子、小野 美喜： 呼吸管理実習㈱， 大分県看護協会 平成16年度訪問看護研修ステップ2「呼吸管理」， 大分市， 2004. 10

工藤 節美： 家族の特性と支援の方法， 大分県看護協会 平成16年度第2回訪問看護研修ステップ1， 大分市， 2004. 11

工藤 節美： 個別事例から地域支援活動への展開， 大分県医務薬事課 平成16年度保健師初任者研修会（後期）， 大分市， 2004. 11

工藤 節美: 訪問看護過程, 大分県看護協会 平成16年度第２回訪問看護研修ステップ1, 大分市, 2005. 1

草間 朋子: 医師に必要とされる原爆症認定に関する知識, 平成１６年度原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研修会, 長崎市, 2005. 2

宮崎 文子: 助産師教育課程, 実習指導者講習会(大分県看護協会), 大分市, 2004. 5

宮崎 文子： 中高年の健康と性，坂ノ市農業共同組合NOSAI女性部リベルテ総会，2004.

宮崎 文子： 高齢者の健康と性，庄内町，2004.

宮崎 文子： 今を大切に生きる，大分県立大分商業高等学校，2004.

宮崎 文子： 思春期の性，大分県立大分西高等学校，2004.

宮崎 文子： 思春期の性，大分県立大分南高等学校，2004.

宮崎 文子： 女性がいきいき生きるためには，大分市野津原区生涯学習センター，2004.

宮崎 文子： 命つないで，大分市立原川中学校2年生，2004.

宮崎 文子： 今を大切に生きる，大分市立原川中学校3年生，2004.

宮崎 文子： 大切な命，大分市立原川中学校1年生，2004.

宮崎 文子： 命の大切さについて考えましょう，大分市立三佐小学校4年生，2004.

宮崎 文子: 思春期の性―健全な性の意思決定のために，福徳学院高等学校2年生，2004.

宮崎 文子： いきいき女性セミナー，野津原町生涯学習センター，2004.

宮崎 文子: 思春期の子供をもつ親のかかわり方，挾間町立小・中学校PTA連合会，2004.

大賀 淳子: バンクーバーでの精神科および高齢者医療, 千嶋病院職員研修会, 豊後高田市, 2004. 5

大賀 淳子: 症例研究の取り組みについて, 衛藤病院職員研修会, 大分市, 2004. 7

大賀 淳子:　精神看護,　日本放射線技師会アドバンスドセミナー,　狭間町,　2005.　2

小野 美喜:　対象の理解,　大分県看護協会　訪問看護師養成講習会ステップ１,　大分市,　2004.　5

小野 美喜:　対象の理解,　看護力再開発講習会,　大分市,　2004.　9

工藤 節美、藤内 美保、玉井 保子、小野 美喜:　呼吸管理,　大分県看護協会　訪問看護師養成講座　ステップ２,　野津原町,　2004.　10

小野 美喜:　対象の理解,　大分県看護協会　訪問看護師養成講座ステップ１,　大分市,　2004.　11

関根 剛:　困った電話にどうつきあうか,　社会福祉法人大分いのちの電話全体研修会,　大分市,　2004.　4

関根 剛:　学校に行けない子どもたちへの対応　ー家庭はどうかかわり、学校とどう連携をとっていくかー,　大分県教育センター保護者グループカウンセリング講師,　大分市,　2004.　5

関根 剛:　対応が難しい電話相談への対処,　人権擁護委員４年次目研修会,　大分市,　2004.　6

関根 剛:　中学生の発達段階からみた進路指導のあり方,　平成１６年度公立中学校進路指導担当者研修,　大分市,　2004.　6

関根 剛:　カウンセリングの原理と実際,　平成１６年度実習指導者講習会,　大分市,　2004.　6

関根 剛:　カウンセリングスキル,　和歌山いのちの電話協会養成講座一泊研修,　和歌山県美里町,　2004.　7

関根 剛:　学校教育相談における教師のカウンセリングマインド,　大分市立坂ノ市中学校校内研修会,　大分市,　2004.　8

関根 剛:　個別指導におけるカウンセリング,　大分県学校栄養士夏期研究発表会講演,　大分市,　2004.　8

関根 剛:　思春期の子育てについて,　湯布院町教育振興会教育講演会,　湯布院町,　2004.　8

関根 剛： 個別指導におけるカウンセリング， 大分県学校栄養士夏期研究発表会， 大分市， 2004． 8

関根 剛： 今､父親たちにできること， 宇佐郡ＰＴＡ連合会講演会， 安心院町， 2004.9

関根 剛： 被害者支援の必要性について， 大阪府被害者支援会議， 大阪市， 2004． 9

関根 剛： ロールプレイ， 患者の権利オンブズマン研修会， 福岡市， 2004． 9

関根 剛： パネルディスカッション 被害者の現状とサポートのあり方 コーディネィター， 和歌山犯罪被害者支援フォーラム， 和歌山市， 2004． 10

関根 剛： 相談員養成講座 カウンセリングスキル， 和歌山いのちの電話協会相談員養成講座， 和歌山県美里町， 2004． 11

関根 剛： 思春期の子育てージャックと豆の木､鉢かつぎ姫のお話から， 校種交流委員会講演会， 玖珠町， 2004． 11

関根 剛： 惨事ストレスへの対処， 九州ブロック消防学校教官研修会， 大分市， 2004.12

関根 剛： リーダーの仕事， 九州ブロック消防学校教官研修会， 大分市， 2004． 12

関根 剛： 被害者が受ける傷と心理的支援， 大分被害者支援センターボランティア養成講座， 大分市， 2004． 12

関根 剛： 被害者支援における倫理， 大分被害者支援センターボランティア養成講座， 大分市， 2004． 12

関根 剛： 児童生徒の行動変化の促進と予防的エクササイズ， 臼杵養護教員サークル研修会， 臼杵市， 2005． 1

関根 剛： 犯罪被害者の心理， 大分家庭裁判所研修会， 大分市， 2005． 1

関根 剛： カウンセリングスキル（１）～（３）， 大分被害者支援

関根 剛： 犯罪被害者の心理と対応， 和歌山県弁護士会， 和歌山市， 2005． 2

高野 政子： 小児看護， 平成16年度大分県看護協会臨床実習指導者講習会， 大分市，

2004.　7

高野 政子:　乳幼児期の気管支喘息と生活環境,　小児喘息講演会,　大分市,　2004.　8

玉井 保子:　排尿に関するケア,　訪問看護研修ステップI,　大分市,　2004.　6

玉井 保子:　看護職員に必要な検査の知識,　大分県看護協会看護力再開発講習会,　大分市,　2004.　9

玉井 保子:　排尿に関するケア,　訪問看護研修ステップI,　大分市,　2004.　11

玉井 保子:　看護技術指導,　大分県立病院新人研修会,　大分市,　2004.　4

藤内 美保:　フィジカルアセスメントⅠ,　第1回訪問看護職員講習会,　大分市,　2004.6

藤内 美保:　フィジカルアセスメントⅡ,　第1回訪問看護職員講習会,　大分市,　2004.6

藤内 美保:　看護過程（1）,　実習指導者講習会（大分県看護協会）,　大分市,　2004.6

藤内 美保:　看護過程（2）,　実習指導者講習会(大分県看護協会）,　大分市,　2004.　6

藤内 美保:　看護過程（3）,　実習指導者講習会（大分県看護協会）,　大分市,　2004.6

藤内 美保:　看護過程（4）,　実習指導者講習会（大分県看護協会）,　大分市,　2004.6

藤内 美保:　事例を使ったアセスメントの教授法の実際,　看護教員再教育研修会（大分県医務薬事課）,　大分市,　2004.　8

藤内 美保:　看護過程と看護記録,　看護力再開発講習会,　大分市,　2004.　9

藤内 美保:　フィジカルアセスメントの意義,　大分医療センター専門教育研修会,　大分市,　2004.　10

藤内 美保:　フィジカルアセスメントⅠ,　第2回訪問看護職員講習会,　大分市,　2004.11

藤内 美保: フィジカルアセスメンⅡ, 第2回訪問看護職員講習会, 大分市, 2004.12

藤内 美保: フィジカルアセスメント, 県立病院8階東.9西病棟勉強会, 大分市, 2004. 12

吉村 匠平: 保育者としての自己理解と子ども理解, 社会福祉法人皆輪会つくし保育園職員研修, 福岡市, 2004.

吉村 匠平: 育児相談・発達相談, 社会福祉法人皆輪会つくし保育園, 福岡市, 2004.

吉村 匠平: 世代間コミュニケーション体験, 蒲江湘南中学校親子のふれあい学習, 蒲江町, 2004. 12

吉留 厚子: 今を大切に生きる, 日本助産師会大分県支部 性教育（1年生）, 大分市, 2004. 7

吉留 厚子: 命をつないで, 日本助産師会大分県支部 性教育（２年生）, 大分市, 2004. 10

吉留 厚子: 今を大切に生きる, 日本助産師会大分県支部 性教育（３年生）, 大分市, 2004. 10

吉留 厚子: 命の大切さについて考えましょう －胎児の発育－, 日本助産師会大分県支部 性教育（４年生）, 大分市, 2004. 10

９－２ 研究指導

赤司 千波
臼杵市医師会立コスモス病院

伴 信彦
大分県立病院
大分赤十字病院

工藤 節美
国立病院機構 大分医療センター

大賀 淳子
厚生連鶴見病院

日精看大分県支部

桜井 礼子
国立病院機構　西別府病院

品川 佳満
臼杵市医師会立　コスモス病院

吉田 成一
国立病院機構　大分医療センター

藤内 美保
大分赤十字病院

梅野 貴恵
国立病院機構　別府医療センター

９－３　学会その他の委員等

赤司 千波
大分県国民健康保険団体連合会介護給付費審査委員
大分県老人医療費適正化推進委員会ワーキンググループ委員

粟屋 典子
大分県リハビリテーション協議会委員
大分県高齢者医療費適正化推進委員会委員
日本看護系大学協議会　看護管理コース教育検討会委員
日本老年看護学会評議員

伴 信彦
日本放射線影響学会渉外企画委員
日本放射線影響学会第47回大会実行委員
放射線医学総合研究所　低線量生体影響プロジェクト助言委員会委員
放射線影響協会　国際放射線疫学情報調査委員会専門委員

林 猪都子
大分県母性衛生学会設立総会・学術講演会実行委員

平野 亙
NPO法人「患者の権利オンブズマン」オンブズマン

社団法人　別府発達医療センター　安全対策等審議委員会委員
「生涯健康県おおいた21」推進協議会　幹事
大分県社会福祉協議会「福祉サービス第三者評価事業検討委員会」委員
大分県中央保健所運営協議会委員
大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織「第三者評価基準等委員会」委員
別府市養護老人ホーム選定委員会副会長

伊東 朋子
日本ALS協会大分県支部運営委員

影山 隆之
大分県介護保険審査会委員
大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員
日本学校メンタルヘルス学会運営委員
日本精神衛生学会常任理事・編集委員長

甲斐 倫明
アジアオセアニア放射線防護協議会事務局長
九州大学非常勤講師
国連科学委員会国内対応委員会委員
財団法人原子力安全研究協会　放射線防護基準検討委員会委員
財団法人放射線影響協会　国際放射線疫学情報調査委員会委員
独立行政法人原子力安全基盤機構　核燃料施設安全解析評価検討会委員
日本リスク研究学会理事
日本学術会議核科学総合研究連絡委員会委員
日本保健物理学会理事、副会長、企画委員長
日本放射線影響学会誌，　J.Radiation　Research，　Senior　Editor
日本放射線影響学会第47回大会実行委員
文部科学省独立行政法人評価委員会放射線医学総合研究所部会委員
文部科学省放射線審議会委員
放送大学客員教授
名古屋大学工学部非常勤講師

河島 美枝子
産業精神保健学会　評議委員
大分家庭裁判所　参与員
大分家庭裁判所　調停員
大分県教育委員会　判定委員
大分県産業保健推進センター　特別相談員
大分地方労働審議会　委員

金 順子
Founding Member, Global Korean Nursing Foundation, Inaugurated November 1, 2004
International Nursing Conference in commemoration of the Inauguration of Global Korean Nursing Foundation, November 1-2, 2004, Seoul, Korea:Evidence-based Nursing for the Excellence of Nursing Member, Korean Nurses' Association Representative, World Health Professionals Alliance, Leadership Conference; May 15-17, 2004; Geneva, Switzerland
Observer; Joint World Health Organization and International Council of Nurses Workshop for Government Chief Nurses; May 13-15, 2004; Geneva, Switzerland
Observer; The 57th World Health Assembly representing Korean Nurses Association, May 17-19, 2004, Geneva, Switzerland

木村 厚子
大分県少年の船・保健係
日本助産師会大分県支部、通常総会・学会準備委員
日本助産師会大分県支部役員

小林 三津子
財団法人日本医療機能評価機構　評価調査者

小西 清美
大分県母性衛生学会設立総会・学術総会実行委員

草間 朋子
INES評価小委員会
宇宙放射線被ばく防護体系検討委員会委員長
核燃料サイクル開発機構運営審議会
核燃料サイクル機構運営審議会委員
緊急被ばく医療ネットワーク会議委員
原子力安全委員会専門委員
原子力委員会　新計画策定委員会委員
疾病・傷害認定審査会　原爆医療分科会会長代理
疾病・傷害認定審査会委員
総合資源エネルギー調査会
総合資源エネルギー調査会委員
大分県　高等学校改革プラン検討委員会
大分県医療審議会
大分県私立学校審議会委員
大分市次世代育成行動計画委員会委員長

日本アイソトープ協会　ICRP翻訳検討委員会
日本医学放射線学会放射線防護委員会
日本医学放射線学会防護委員会委員
日本看護科学学会評議員
日本看護科学学会理事
日本看護系大学協議会幹事
日本看護系大学協議会副会長
日本原子力研究所研究所研究評価委員
日本原子力研究所研究所評価委員
日本原子力研究所保健物理研究委員会委員長
日本肥満学会評議員

松尾 恭子
大分県看護協会学会委員

宮崎 文子
大分県男女共同参画審議委員会委員
大分県母性衛生学会副会長
大分市男女共同参画推進懇話会委員
日本看護協会助産師職能委員
日本助産師会大分県支部助産院部会長
日本助産師学会準備委員長
日本母性看護学会理事

大賀 淳子
大分県障害児適正就学指導委員

大神 純子
大分県母性衛生学会幹事
大分県母性衛生学会設立総会・学術講演会運営委員

小野 美喜
大分県看護協会教育委員
大分県中小規模病院新人ナース研修支援事業
大分県脳卒中懇話会世話人

桜井 礼子
大分県社会福祉審議会委員
大分市建築審査会委員
大分地方裁判所委員会委員

関根 剛
紀の国被害者支援センター評議員
全国被害者支援ネットワーク研修委員
大分県臨床心理士会被害者支援担当理事
大分被害者支援センター理事・事務局長
日本パーソナリティ心理学会パーソナリティ研究編集委員

秦 桂子
公衆衛生協会評議員

吉田 成一
財団法人日本自動車研究所EDC研究会委員
東京理科大学薬学部客員研究員

高波 利恵
大分県看護協会ホームページ委員会委員

高野 政子
九州小児看護教育研究会　理事
大分県看護協会教育委員会・委員長
大分県小児保健協会　理事・副会長
日本小児看護学会　第14回学術集会企画・運営委員

藤内 美保
大分市男女共同参画社会推進懇話会委員

梅野 貴恵
大分県母性衛生学会幹事(事務局会計)
大分県母性衛生学会設立総会・学術講演会実行委員

八代 利香
NPO大分あんしんねっと　特定非営利活動法人成年後見・権利擁護大分ネット理事
大分県看護協会実習指導者講習会運営委員

吉村 匠平
大分県高齢者虐待防止連絡協議会委員

吉留 厚子
大分県ナースセンター事業運営委員

大分県母性衛生学会設立総会・学術講演会実行委員
大分県母性衛生学会理事
平成17年度日本助産師会通常総会ならびに第61回日本助産師学会準備委員

10　助成研究

　石塚 香子
代表：糖尿病性腎症にともなう骨病変の病態生理と進行抑制に関する研究（腎臓内科学）
文部科学省科学研究費補助金　若手 B（2 年予定の 1 年目）

　石塚 香子
代表：腎機能低下に伴う低回転骨病変に対する経口吸着剤の効果に関する研究（骨代謝）
呉羽化学生物医薬研究所　受託研究費（1 年）

　石塚 香子
代表：無形成骨発症・進展に関する遺伝子発現の変異についての研究（透析骨症）
腎性骨症研究会　研究奨励金（1 年）

　石塚 香子
代表：低回転骨疾患に対するプラバスタチンの効果の検討（骨粗鬆症）
三共株式会社　受託研究費（1 年）

　市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里
代表：黄砂の肺毒性、アレルギー増悪、酸化的 DNA 傷害、内分泌撹乱の影響評価に関する研究（環境影響評価）
日本科学振興会科学研究費補助金　基盤研究 B（３年予定の１年目）

　市瀬 孝道
分担：ディーゼル排気微粒子が糖尿病とその合併症に及ぼす影響とメカニズム解明に関する研究（環境影響評価）
日本科学振興会科学研究費補助金　基盤研究 B（２年予定の２年目）

　市瀬 孝道
分担：大気中ナノ粒子に含有された酸化ストレスを惹起するキノン化合物の生体影響（環境影響評価）
日本科学振興会科学研究費補助金　基盤研究 B（３年予定の 2 年目）

　市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里
分担：大気中に存在する新しい内分泌かく乱物質に関する研究（内分泌かく乱）
科学技術振興機構　戦略的創造研究（５年予定の４年目）

市瀬 孝道、安部 真佐子、吉田 成一、定金 香里、安部 恭子
代表：電子レンジによる油脂類の酸化と発癌性（食品衛生）
大分県立看護科学大学　プロジェクト研究（２年予定の１年目）

稲垣 敦
代表：統合失調症患者の精神的健康関連体力の提案およびそのテストの構成と臨床での実用化（応用健康科学）
文部科学省科学研究費補助金（２年予定の２年目）

稲垣 敦
分担：教育形態の違い（統合教育と分離教育）が聴覚障害者の体力や運動能力に与える影響（体育学）
日本学術振興会（３年予定の３年目）

大賀 淳子、稲垣 敦
代表：精神科入院・通院患者の社会復帰促進のための運動プログラムの提案（精神科リハビリテーション）
日本学術振興会（3 年予定の 3 年目）

甲斐 倫明
分担:分子生物学的知見に基づいた発がん数理モデルの構築およびデータ解析への応用(統計科学
文部科学省科学研究費補助金基盤研究 B（3 年予定の 3 年目）

影山 隆之、河島 美枝子
代表：ストレス対処特性の簡易評価表の開発と産業精神看護学的応用に関する研究（産業保健）
日本学術振興会科研費（３年計画の３年目）

影山 隆之
分担：看護職の職業性ストレスおよび精神的健康度に関する国際比較調査（産業保健）
日本学術振興会科研費（３年計画の３年目）

影山 隆之
分担：自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究（地域保健）
厚生労働省こころの健康科学研究事業（３年計画の１年目）

桜井 礼子、草間 朋子、宮崎 文子、高野 政子
分担：産後ケアシステムの構築－産後１か月に重点をおいた産後ケアサービスステーションのシステム化をめざして－

大分県産業創造機構（2004 年 10 月～2005 年９月）

桜井 礼子、粟屋 典子
分担：看護ケアの質評価・改善システムの運用に関する研究（医療技術評価総合研究事業）
厚生労働科学研究費補助金（３年予定の２年目）

品川 佳満
代表：高齢者宅内での生活音計測による見守りシステムの開発（人間医工学）
文部科学省科学研究費補助金（2 年予定の１年目）

定金 香里
代表：ディーゼル排ガスのアトピー性皮膚炎増悪作用に関する研究（環境影響評価・環境政策）文部科学省科学研究費補助金（若手研究 B)（2 年予定の１年目）

藤内 美保、宮腰 由紀子、伊東 朋子、玉井 保子、松成 裕子、安東 和代
代表：看護技術を保障する判断思考訓練法の開発に向けて―熟練看護師と新人の分析比較―医歯薬学　基礎看護学）
文部科学省科学研究費補助金（2 年予定の１年目）

宮崎 文子
分担：望まない妊娠、人口妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究（子ども家庭総合研究事業）
厚生労働科学研究費補助金（３年予定の３年目）

中山 晃志
代表：高齢者におけるウエスト身長比の冠動脈疾患予防への有用性（生物・医学）
統計数理研究所（１年予定の１年目）

中山 晃志
分担：リスク認知とリスクを規定する要因に関する調査
原子力安全基盤機構（３年予定の１年目）

吉田 成一
分担：ディーゼル排ガス胎仔期暴露の生殖系及び脳神経系への影響に関する研究（環境系薬学）文部科学省研究費 B（3 年予定の 3 年目）

吉留 厚子
分担：二次医療圏における看護必要度から算出した看護職適正配置のための横断的研究
文部科学省科学研究費補助金（3 年予定の 3 年目）

吉武 康栄
代表：力を精確に調節する神経・筋機能において伸張反射の貢献度を筋・腱への機械的振動により分離定量化する（神経生理）
上原記念生命科学財団（1 年予定の 1 年目）

11　海外研究派遣

定金 香里
研究実施国：アメリカ合衆国
研究期間：2004 年 6 月 21 日～7 月 22 日
研究内容：今後予定している過酸化油脂摂食動物実験に関して共同研究者である柴本教授とディスカッションを行った。また、その予備実験としてマイクロウェーブによる油脂の加熱条件を検討した。
研究実施機関：Department of Environmental Toxicology, University of California, Davis
研究報告：2005 年 1 月 19 日、大分県立看護科学大学にて報告会

松尾 恭子
研究実施国：アメリカ合衆国
研究機関：2004 年 7 月 26 日　～　8 月 20 日
研究内容：看護学実習でのリスクマネジメントを知るために、1 年生のアセスメント学の講義、学内実習、臨床実習を見学して実際を把握した。そして、実習においての法的側面を知るために、教職員の方々とのミーティングを通して把握した。また、Flight Camp に参加して、アメリカの救急看護について学ぶ機会となった。
研究実施機関：Case Western Reserve University Frances Payne Bolton School of Nursing, Case Western Reserve University Hospital, Case farm
研究報告：2005 年 1 月 19 日、大分県立看護科学大学にて報告会

吉田 成一
研究実施国：アメリカ合衆国
研究期間：2004年6月10日～7月11日
研究内容：ナノ粒子の健康影響に関して今後共同研究を予定しているCho教授とディスカッションを行った。また、この研究で必要となるナノ粒子をCho博士の研究機関で作成、試料を本研究室に持ち帰った。
研究実施機関：Department of Molecular and Medical Pharmacology, School of Medicine, University of California Los Angeles, Los Angeles
研究報告：2005年1月19日、大分県立看護科学大学にて報告会

12　学外研究者の受入

１）共同研究員の受け入れ

本学教員　　甲斐 倫明
受入れ者　　小野 孝二
　所属　　大分県立病院放射線部
　　名古屋大学大学院工学研究科博士課程
　研究テーマ　放射線診断における画像撮影の最適化に関する研究
　受入れ期間　平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日

本学教員　　甲斐 倫明
受入れ者　　久保 剛
　所属　　大分県総合科学研究支援センター
　　放送大学修士課程
　研究テーマ　生活環境のラドン・トロンの健康影響に関する研究
　受入れ期間　平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日

本学教員　　市瀬 孝道
受入れ者　　日吉 孝子
　所属　　筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科
　研究テーマ　浮遊粒子状物質のアレルギーへの影響
　受入れ期間　平成 17 年 2 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日

１３ 教職員名簿

１．専任教員			
生体科学	教授	高橋 敬	
	助教授	安部 眞佐子	
	助手	石塚 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	講師	吉田 成一	
	助手	定金 香里	
健康運動学	助教授	稲垣 敦	
	助手	吉武 康栄	
人間関係学	講師	関根 剛	
	講師	吉村 匠平	H16.10.1採用
	助手	佐藤 みつよ	
環境科学	教授	甲斐 倫明	
	助教授	伴 信彦	
	助手	小嶋 光明	H16.4.1採用
健康情報学	助教授	佐伯 圭一郎	
	助手	品川 佳満	
	助手	中山 晃志	
言語学	助教授	Ｇ．Ｔ.Shirley	
	講師	宮内 信治	H16.4.1採用
	助手	岡崎 寿子	
基礎看護学	教授	小林 三津子	H16.4.1採用
	助教授	伊東 朋子	
	助手	玉井 保子	
	助手	井上 好	H16.12.31退職
	助手	姫野 稔子	
	助手	小林 みどり	
看護アセスメント学	講師	藤内 美保	
	助手	安部 恭子	
	助手	高橋 ゆか	H16.4.26採用
成人・老人看護学	教授	粟屋 典子	
	助教授	赤司 千波	H16.4.1採用
	助手	小野 美喜	
	助手	大津 佐知江	
	助手	松尾 恭子	
	助手	福田 広美	
小児看護学	講師	高野 政子	
	助手	山下 早苗	
	助手	井上 和美	H16.4.26採用

母性看護・助産学	教授	宮崎 文子	
	助教授	吉留 厚子	
	助教授	林 猪都子	
	講師	小西 清美	
	助手	後藤 由美	H16.8.31退職
	助手	大神 純子	
	助手	梅野 貴恵	H16.4.1採用
	助手	緒方 生久美	H16.9.1採用、11.30退職
精神看護学	教授	河島 美枝子	H17.3.31退職
	助教授	影山 隆之	
	講師	大賀 淳子	
保健管理学	教授	草間 朋子	
	助教授	平野 亙	
	助教授	桜井 礼子	
	助手	高波 利恵	
	助手	木村 厚子	
地域看護学	教授	中村 喜美子	H16.4.1採用
	講師	工藤 節美	
	助手	時松 紀子	
	助手	大村 由紀美	
	助手	秦 桂子	H16.4.1転入
国際看護学	教授	金 順子	H17.3.31退職
	講師	八代 利香	
２．非常勤講師			
		西 英久	哲学入門
		大杉 至	人間と社会
		伊藤 泰信	文化人類学入門
		小林 宏之	法学入門
		合田 公計	経済学入門
		日高 貢一郎	言語表現法
		三舟 求眞人	生体微生物反応論
		西園 晃	生体微生物反応論
		宮本 修	音楽とこころ
		澤田 佳孝	美術とこころ
		佐渡 敏彦	看護と遺伝
		古河 康二	看護と遺伝
		吉良 国光	大分の歴史と文化
		肥田木 孜	母性病態論
		上野 桂子	母性病態論

		宇都宮 隆史	母性病態論
		堀永 孚郎	母性病態論
		江上 佐枝子	母性病態論
		福元 満治	保健医療ボランティア論
		大林 雅之	看護の倫理
		劉　美貞	韓国語
		ALTAMIRANO, Juan Jose	スペイン語
３．事務職員			
○事務局	事務局長	三河 明史	H16.4.1転入、H17.3.31転出
	次長兼総務課長	田原 基之	H17.3.31退職
	主幹	小手川 元晴	H16.4.1転入
	主幹	玉田 逸子	
	主査	平川 俊助	H17.3.31転出
	主任	高橋 厚至郎	H16. 4.1転入
	技師	那須 博文	
	業務技師	和田 ともえ	H17.3.31退職
	臨時職員	池邉 尚美	H16.10.1採用
	臨時職員	橋本 美誉	H16.9.30退職
	臨時職員	工藤 奈緒	H16.4.1採用
○学生部	学生部長併任	（河島美枝子）	
	教務学生課長	三浦　始	H16.4.1転入
	主幹	竹下 敏彦	
	副主幹	佐藤 俊実	
	主任	矢部 美香	
	非常勤保健師	原田 幸代	
	臨時職員	猪原 知恵	H16.4.1採用
	臨時職員	神崎 純子	
○付属図書館	付属図書館長併任	（甲斐倫明）	
	図書館管理係長	小野 永子	
	非常勤司書	牛島 聡子	H16.4.1採用
	非常勤司書	中野 美佐子	H17.2.9退職